茨木市

千 提 寺 南 遺 跡

高速自動車国道近畿自動車道名古屋神戸線建設事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書

2014年3月

公益財団法人 大阪府文化財センター

茨木市

千 提 寺 南 遺 跡

高速自動車国道近畿自動車道名古屋神戸線建設事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書

公益財団法人 大阪府文化財センター



1. 調査地全景(東から)

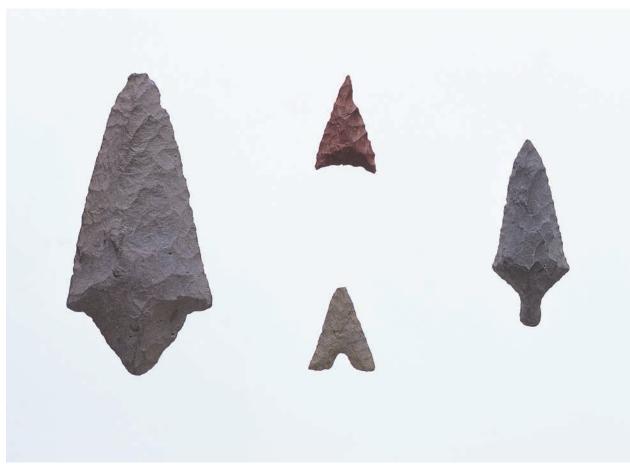


2. 調査地全景(西から)

巻頭図版 2



1.2区215区土坑出土縄文土器



2. 出土石器

序 文

千提寺南遺跡は大阪府の北東部、茨木市の最も北端、山深いところに所在する遺跡であります。大阪市内からは1時間以上を要し、地理的には京都府亀岡市や大阪府豊能町に接しており、今も緑豊かな山々にかこまれて棚田が続く秘境の趣をなし、桃源郷のような風景の広がる地域として知られています。

この周辺は戦国時代の著名なキリシタン大名高山右近の所領地として栄え、地理的な要因も相まって 戦国の禁制の時代から近代に至るまで、隠れキリシタンの里として知られていました。大正時代に藤波 大超氏によってキリシタン墓碑が発見されたのを契機に、様々なキリシタン遺物が周知されることにな り、一躍脚光を浴びることとなりました。

今回の調査は、高速自動車国道近畿自動車道名古屋神戸線(別称として新名神高速道路)の建設に伴うもので、兵庫県の神戸市から大阪府高槻市までを結ぶ道路のうち、茨木北インターチェンジ、茨木北パーキングエリア建設予定地にあたります。今まで埋蔵文化財調査の手が入っていなかった地域に大規模な調査が行われたことによって、この地域の歴史の内容や時代を追っての変遷解明に大きな足跡を残すこととなりました。

千提寺市阪遺跡、千提寺クルス山遺跡、千提寺西遺跡、日奈戸遺跡といった千提寺周辺の他の遺跡が 丘陵地に立地するのに対し、千提寺南遺跡は丘陵地の山裾にあたる谷部分の遺跡となります。そのため、 他の遺跡にある中世から近世の墓地群は発見されませんでした。

中世から埋積谷の傾斜地形を利用して棚田や耕作に関係する施設が広く作られており、現代に至るまで連綿と土地利用されていた事が判明したのは大きな成果です。また、遺跡の東部でみつかった縄文時代中期末の土器群は良好な一括資料であり、全域でみつかった縄文時代早期以降の土器などともあわせて、この地域は縄文時代から活発に人間の営みがあったことを明らかにしました。

最後になりましたが、今回の調査にあたって地元関係各位をはじめ、大阪府教育委員会、茨木市教育 委員会、茨木市立キリシタン遺物資料館、西日本高速道路株式会社関西支社新名神大阪西事務所から多 大な御協力や御尽力を賜りました。記してここに感謝いたします。

平成26年3月

公益財団法人 大阪府文化財センター 理事長 田邉 征夫

例 言

- 1. 本書は茨木市千提寺地内に所在する千提寺南遺跡(調査名:千提寺南遺跡 11 1)の発掘調査報告書である。
- 2. 調査は、西日本高速道路株式会社関西支社(遺物整理は、同支社新名神大阪西事務所)の委託を受け、大阪府教育委員会の指導のもと公益財団法人大阪府文化財センターが実施した。
- 3. 受託契約名、受託期間、調査および整理体制は以下の通りである。

受託契約名: 高速自動車国道近畿自動車道名古屋神戸線建設事業に伴う埋蔵文化財発掘調査(茨木市域) その3

受託期間:平成23年11月1日~平成24年5月31日

調査体制:(平成23年度) 調査課長 江浦 洋 調整グループ長 岡本 茂史

調査グループ長 岡戸 哲紀 調査グループ主幹 金光 正裕

主査 合田 幸美 技師 河本 純一

専門調査員 入江 正則

受託契約名:高速自動車国道近畿自動車道名古屋神戸線建設事業に伴う埋蔵文化財発掘調査(茨木市域)その4

受託期間:平成24年2月1日~平成25年3月19日

調査体制:(平成23年度) 調査課長 江浦 洋 調整グループ長 岡本 茂史

調査グループ長 岡戸 哲紀 調査グループ主幹 金光 正裕

主査 小野 久隆 主査 合田 幸美

専門調査員 入江 正則

(平成24年度) 調査部長 江浦 洋 調整課長 岡本 茂史

調查課長 岡戸 哲紀 調査課主幹 金光 正裕

主査(新名神第二総括)亀井 聡 副主査 本間 元樹

副主査 川瀬 貴子

受託契約名: 高速自動車国道近畿自動車道名古屋神戸線建設事業に伴う埋蔵文化財発掘調査遺物整理(千提寺南)

受託期間:平成25年3月1日~平成26年3月31日

調査・整理体制:(平成24年度) 調査部長 江浦 洋 調整課長 岡本 茂史

調查課長 岡戸 哲紀 調査課主幹 金光 正裕

主査(新名神第二総括) 亀井 聡 副主査 川瀬 貴子

(平成25年度) 事務局次長兼総務企画課長 江浦 洋

調整課長 岡本 茂史 調査課長 岡戸 哲紀

調查第一課長補佐 金光 正裕 副主査 川瀬 貴子

発掘調査は平成24年1月16日~平成25年3月8日及び平成25年5月20日~平成25年6月6日まで行った。それ以外の期間は整理作業を行い、平成26年3月20日に本書を刊行して全ての業務を完了した。

- 4. 調査にあたっては、下記の方々のご指導、ご協力を賜った。記して謝意を表する。(五十音順、敬称略) 大野薫(大阪府教育委員会)
- 5. 本書の執筆、編集は川瀬が行った。
- 6. 本調査に関わる写真、実測図、出土遺物等は公益財団法人大阪府文化財センターにおいて保管している。広く活用されることを希望する。

凡

- 1. 基準高は東京湾平均海水位(T.P.) +を使用している。使用単位はmを基準とする。
- 2. 遺構平面図の使用測地系は、平面直角座標系「世界測地系(測地成果 2000)」第VI座標系を基準とする。単位はすべてmで表記した。
- 3. 本書の遺構図に付与された方位は、すべて平面直角座標系に基づく座標北を標準とする。磁北は西 に 6 ° 18 '、真北は東に 0 ° 12 '振っている。
- 4. 発掘調査および遺物整理は『財団法人大阪府文化財センター 遺跡調査基本マニュアル』 2010 の内容に準拠して行った。
- 5. 本書の土色は小山正忠・竹原秀雄編『新版 標準土色帖』 2006 農林水産省農林水産技術会議事務局監修・財団法人日本色彩研究所色表監修に基づいて行った。記述は記号、土色名、土質名の順である。
- 6. 遺構番号は遺構種類にかかわらず1からの連番を付しており、遺構名は番号ー遺構種類となる。(例: 1土坑)。ただし、複数の調査区を同時に調査していたため、調査区ごとに1からの遺構番号が存在することとなっているので、整理作業の際に新たな遺構番号を付与した。
- 7. 遺構平面図の縮尺は、多種存在するため各挿図に縮尺を示してある。 遺物実測図の縮尺は土器が4分の1と3分の1、石器が3分の2、銭貨・金属製品・石製品・木製品が2分の1としている。土器断面と拓本はそれぞれ残りがよいところでとった。そのため実測図上、必ずしも一致していない。遺物写真の縮尺は任意である。
- 8. 遺物番号は通し番号であり、写真図版に関しては挿図と同一の番号を付与している。

目 次

巻頭図版
序文
例言
凡例
目次
本文
第1章 調査にあたって
第1節 調査の経緯
第2節 地理的·歷史的環境······4
第3節 調査の方法
第2章 基本層序
第1節 基本層序
第3章 調査成果(遺構) 24
第1節 東部(1・2区)の遺構24
第2節 中央部(3~8区、13区)の遺構 44
第3節 西部(9~12区)の遺構 … 71
第 4 章 調査成果(遺物) 81
第1節 1・2区の遺物 81
第2節 3~8・13区の遺物 91
第3節 9~12区の遺物 97
第5章 総括
第1節 千提寺南遺跡における土地利用
第2節 千提寺南遺跡出土縄文土器の評価
遺物観察表112
写真図版
遺構
遺物
報告書抄録
奥付

挿 図 目 次

第1図	千提寺南遺跡の位置と千提寺遺跡群	1
第2図	新名神高速道路建設計画図	2
第3図	周辺遺跡図・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・	6
第4図	茨木市千提寺民俗地図	8
第5図	地区割図	11
第6図	調査区名図・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・	11
第7図	基本層序模式図(1)	14
第8図	基本層序模式図(2)	15
第9図	1・2区東西アゼ断面図、アゼ位置図	· 18
第10図	4・6・7区南北アゼ断面図、アゼ位置図	• 20
第11図	9区南北アゼ、10・11区東西アゼ断面図 21・	• 22
第12図	1 区第 2 面 • 2 区第 3 面平面図	25
第13図	1区第2面平面図	26
第14図	1 区第2面遺構平・断面図(1)	28
第15図	1 区第2面遺構平・断面図(2)	29
第16図	2区第3面平面図	30
第17図	2 区第 3 面 229 石列平・立面図	31
第18図	2区 215 土坑土器出土状況図	32
第19図	2区第3面遺構平・断面図	34
第20図	1 区第3面・2区第5面平面図	35
第21図		36
第22図		38
第23図		39
第24図	1区第3面遺構断面図(3)	40
第25図	1区第3面遺構平・断面図	42
第26図	2区第5面平面図	43
第27図	2区第5面遺構断面図	44
第28図	3区第1面・4区第1面・8区第1面平面図	45
第29図	3区第1面上段平面図・アゼ断面図	46
第30図	4区第1面中央東部平面図	48
第31図	4区第1面中央東部遺構断面図(1)	49
第32図	4区第1面中央東部遺構断面図(2)	50
第33図	4区第1面中央西部平面図	52
第34図	4区第1面中央西部遺構断面図	54
第35図	4 区第 1 面西部・8 区第 1 面平面図	55

第36図	4区第1面西部遺構断面図	56
第37図	4 区第 2 面・ 8 区第 4 面平面図	57
第38図	4区第2面中央東部平面図	58
第39図	4区第2面中央東部遺構断面図	59
第40図	5区第1面・6区第1面・13区第2面平面図	60
第41図	6区第1面平面図・601溝断面図・13区第2面平面図	61
第42図	6 区第 1 面 601 溝石・杭検出状況図	62
第43図	5区第3面・6区第3面平面図	64
第44図	6区第3面602杭列検出状況図	65
第45図	6区第3面603杭列検出状況図	65
第46図	13 区東トレンチ位置図、5・13 区断面図	66
第47図	7 区第 3 面・8 区第 4 面・13 区第 4 面平面図	68
第48図	7 区第 3 面 707 杭列検出状況図	69
第49図	9区第1面・10区第2面・11区第2面・12区第2面平面図	70
第50図	9区第1面平面図	72
第51図	10 区第 2 面 • 11 区第 2 面平面図	73
第52図	10 区第 2 面 1001 溝・石列平・断面図	74
第53図	10 区第 3 面平面図・1003 暗渠断面図	75
第54図	9 区第 2 面・10 区第 4 面・12 区第 3 面平面図	77
第55図	9区第2面平面図	78
第56図	10 区第 4 面平面図	79
第57図	1 ・ 2 区出土遺物実測図	82
第58図	1 ・ 2 区出土石器実測図	83
第59図	1 区遺構出土縄文土器実測図	84
第60図	1 区包含層出土縄文土器実測図	85
第61図	2 区 215 土坑出土縄文土器実測図(1)	88
第62図	2 区 215 土坑出土縄文土器実測図(2)	89
第63図	2・4区包含層出土縄文土器実測図	90
第64図	3~6区出土土器実測図	92
第65図	7・8・13 区出土土器実測図	93
第66図	4~8・13 区出土遺物実測図	95
第67図	4・13 区出土石器実測図	96
第68図	4 区出土石器実測図	97
第69図	9~12区出土土器実測図	98
第70図	$9\sim12$ 区出土銭貨・木製品実測図	100
第71図	9 区出土石器・石製品実測図	101
第72図	全体平面図 105・	106
第73図	千提寺南遺跡出土遺構と水利	107

第74図	1 215 土坑出土縄文土器と	出土位置図				108
第75図] 国際文化公園都市試掘地	点及び免山	氏遺物採集	. 地点		110
第76区	7 千提寺南遺跡出土縄文土	器時期区分				111
		Γ.		. #		
		表	Ħ	次		
	ΛΩ I. I ΠΠΑΘΙΑΘΉ				110	
表1					112 ~	
表2					114 ~	
表3					····· 117 ~	
表 4						
表 5						
表6						
表7						
表8						
表9	調査区遺構面対応表	• • • • • • • • • • • • • • • • • • • •	• • • • • • • • • • • • • • • • • • • •			103
		de t	d≠ r	- 1 1h		
		与	具] 次		
写真 1	捆本仅届星					3
写真 2						
写真3						
写真4						
写真 5						
写真6						12
写真7						12
写真8						12
						12
	八阪州教育安貞芸による。現地説明会風景					12
一分兴 II	,					12
		写直	照图:	百次		
		1 7	S E4 /1//	У П У		
写真図	版1 1区			4.4土坑・5土	:坑(北から)	
1.1区第3面全景(西から)		5. 第2面下段	近景(北から)			
2.1区第3面全景(南西から)			6. 第2面上段	近景(北から)		
写真図	饭2 1区			7. 53 土坑断面	「(西から)	
1.1	区第3面近景(北東から)			8. 71 ピット完	E掘状況(北から)	
	区第3面近景(西から)		Í	写真図版3 2区		
3.1	区第3面近景(東から)			1.2区第2面全	全景(南西から)	

2.2区第2面全景(南から)

写真図版4 2区

1.2区第3面全景(南西から)

2.2区第3面全景(南から)

写真図版5 2区

1.2区第4面全景(南西から)

2.2区第4面全景(北東から)

写真図版6 2区

1.2区第5面全景(南西から)

2.2区第5面全景(北東から)

写真図版7 2区

1.2区第3面215土坑検出状況(西から)

2.2区第3面229石列検出状況(南西から)

写真図版8 3区

1.3区第1面全景(東から)

2.3区第1面全景(南東から)

写真図版9 4区

1.4区第1面全景(西から)

2.4区西部近景(西から)

写真図版 10 4区

1.4区中央部近景(南西から)

2.4区東部全景(東から)

写真図版 11 4区

1.4区 409 溝断面(南東から)

2.4区410溝断面(北から)

3.4区411土坑断面(南西から)

4.4区413土坑断面(南から)

5.4区416土坑断面(北東から)

6.4区417土坑断面(西から)

7.4区450ピット断面(東から)

8.4区440土坑・441土坑断面(南から)

写真図版 12 5区

1.5区第2面全景(西から)

2.5区西半足跡検出状況(南から)

写真図版 13 5区

1.5区第3面全景(西から)

2.5区第3面全景(東から)

写真図版 14 6区

1.6区第1面全景(南西から)

2.6区第1面全景(北東から)

写真図版 15 6区

1.6区第1面601溝(東から)

2.6区第1面601溝断面(南西から)

写真図版 16 6区

1.6区第3面全景(南西から)

2.6区第3面全景(北東から)

写真図版 17 6区

1.6区第3面603杭列検出状況(南東から)

2.6区第3面602杭列検出状況(南東から)

写真図版 18 7区

1.7区第1面全景(南西から)

2.7区第1面全景(南から)

写真図版 19 7区

1.7区第3面全景(北西から)

2.7区第3面全景(北から)

写真図版 20 8区

1.8区第4面全景(北から)

2.8区第4面全景(北西から)

写真図版 21 9区

1.9区第1面全景(西から)

2.9区第1面全景(北から)

写真図版 22 9区

1.9区第2面全景(西から)

2.9区第2面全景(北東から)

写真図版 23 10 区

1.10区第2面近景(南西から)

2. 10 区第 2 面 1001 溝・石列検出状況(北東から)

写真図版 24 10 区

1.10区第3面近景(北東から)

2. 10 区第3面1002石列検出状況(北から)

写真図版 25 10 区

1. 10 区第4面全景(北西から)

2. 10 区第 4 面近景(南西から)

写真図版 26 11 区

1.11区第2面全景(西から)

2. 11 区第2面全景(北西から)

写真図版 27 11 区

1. 11 区第2面全景(北東から)

2. 11 区第2面棚田検出状況(南東から)

写真図版 28 12 区

1.12区第3面全景(北西から)

2. 12 区第3面全景(南東から)

写真図版 29 13 区

- 1. 13 区第2面全景(北西から)
- 2.13区第3面全景(南東から)

写真図版 30 2 区遺構出土縄文土器 (1)

1~3.2区215 土坑出土深鉢

写真図版 31 2区遺構出土縄文土器(2)

1 • 2.2区215 土坑出土深鉢

写真図版 32 2 区遺構出土縄文土器 (3)

1~3.2区215土坑出土深鉢

写真図版 33 1・2 区遺構・包含層出土縄文土器

- 1.2区 215 土坑出土縄文土器、1区 71 ピット出土 縄文土器、53 土坑出土縄文土器
- 2.1区包含層出土縄文土器
- 3.2区包含層出土縄文土器
- 4 5.4区包含層出土縄文土器

写真図版 34 1 区包含層出土縄文土器

1.1区包含層出土縄文土器

写真図版 35 2 · 4 区包含層出土縄文土器

1.2区包含層出土縄文土器、4区包含層出土縄文土器

写真図版 36 1~3区出土土器

- 1.3区出土土器
- 2.2区出土土器
- 3.1区出土土器
- 4.2区出土土器
- 5.2区出土土器

写真図版 37 1・2・4 区出土土器

- 1.2区出土土器
- 2.4区出土土器
- 3.2区出土土器、4区出土土器
- 4.2区出土土器
- 5.1区出土土器

写真図版 38 5~7・13 区出土土器

- 1.5区出土土器
- 2.7区出土土器、13区出土土器
- 3.6区出土土器

写真図版 39 5~8・13 区出土土器

- 1.5区出土土器
- 2·3.7区出土土器
- 4.6区出土土器
- 5. 13 区出土土器

6.7区出土土器、8区出土土器

写真 40 9~12 区出土土器 (1)

- 1.9区出土土器
- 2. 11 区出土土器
- 3. 11 区出土土器
- 4.9区出土土器
- 5.9区出土土器
- 6. 11 区出土土器
- 7.9~11区出土土器

写真図版 41 9~12 区出土土器 (2)

1・2.9~12 区出土白磁・青磁、10 区出土緑釉陶器 写真図版 42 9・10 区出土土器 (3)・木製品

- 1.9・10区出土土器
- 2.6区出土曲物底板
- 3. 11 区出土曲物底板

写真図版 43 打製石器(1)

- 1.9区出土有舌尖頭器
- 2.4区出土石鏃、1区出土石鏃

写真図版 44 打製石器(2)

- 1.2区出土未成品、13区出土剥片、4区出土剥片
- 2.4区出土石核

写真図版 45 磨製石器・石製品

- 1.4区出土磨石、9区出土叩石
- 2.1区出土砥石、9区出土砥石

写真図版 46 銭貨

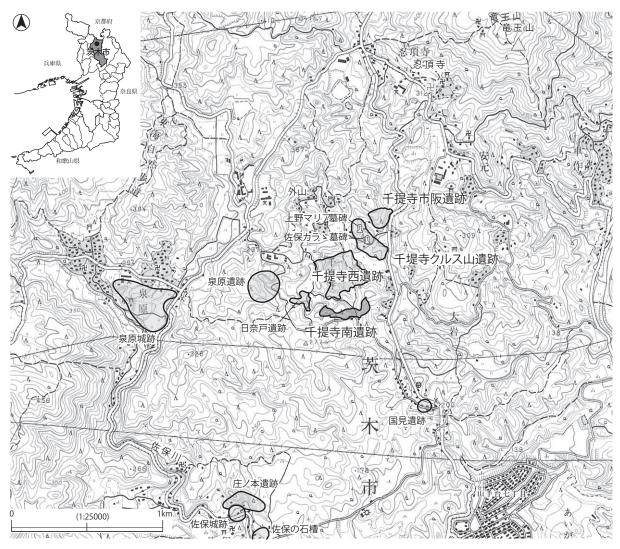
- 唐銭-開元通寳、宋銭-太平通寳、皇宋通寳、嘉 祐通寳、治平元寳、熈寧元寳、元豊通寳、元符通 寳、紹聖元寶
- 2. 明銭-洪武通寳、永楽通寳、寛永通寳
- 3. 宋銭 紹定通寳
- 4. 一銭青銅貨、一銭銅貨

第1章 調査にあたって

第1節 調査の経緯

今回の調査は、高速自動車国道近畿自動車道名古屋神戸線建設に伴うものである。この建設工事は昭和62年(1987)の第四次全国総合開発計画において閣議決定され、平成元年(1989)には基本計画が公示された。平成19年(2007)には、第二名神自動車道から新名神自動車道へと変更した名称が公表されている。道路建設に先立って、平成5年度(1993)に財団法人大阪府文化財センター(現、公益財団法人大阪府文化財センター、以下センターと略)によって高槻から箕面までの大阪工区内の計画路線内の分布調査が実施された。

実際に工事が着手されるようになったのは近年のことで、まず神戸ジャンクションから高槻ジャンクションまでの全長 40.5km の区間が、平成 30 年の開通を目指して事業が進められることとなった。工事は兵庫工事区域と大阪工事区域とに分けられる。そのうち、大阪府内の工事区域は、北摂地域と呼ばれる大阪の最北部、山間地域を東西に横断することとなる。距離にして、西は箕面市から東は高槻市までの全長 19.5km におよぶ(第2図)。それに伴い、平成 23 年度(2011)には当センターによって、箕面市、茨木市、高槻市にわたって埋蔵文化財の有無を調査する広範囲な試掘調査が実施された。



第1図 千提寺南遺跡の位置と千提寺遺跡群(国土地理院25,000分の1地形図「高槻」に加筆)

茨木市域の該当範囲は茨木市で最も北部にあたり、北は大阪府豊能町や京都府亀岡市に接し、国際文化公園都市(彩都)と名付けられたエリアに位置する。東に安威川と府道茨木摂津線、西に佐保川と豊中亀岡線が位置し、北には竜王山がそびえる(第1図)。北摂山地の山がそびえたち、その山間地に集落や棚田が散在する地域である。中世荘園支配の象徴であった忍頂寺などの寺社や、高山右近の旧領地だったことからキリシタン関係の資料などが知られるが、考古学的調査はほとんど行われておらず、資料報告も断片的だった。試掘調査の結果、今まで遺跡として認定されていなかった千提寺地区で、広範囲にわたって遺構や遺物の包含が確認され、千提寺南遺跡は新規発見の遺跡として認定された。

試掘調査をふまえ、西日本高速道路株式会社と大阪府教育委員会によって遺跡の取り扱いについて協議が行われた結果、大阪府教育委員会は西日本高速道路株式会社関西支社に対して、調査を実施するよう指示した。これを受け、当センターと西日本高速道路株式会社関西支社は平成24年1月30日付で契約を締結し、上記建設工事に伴う埋蔵文化財発掘調査の茨木市域その4として千提寺南遺跡の調査が行われることとなった。(それ以前に、埋蔵文化財発掘調査茨木市域その3という契約の中で、千提寺西遺跡の調査とあわせて千提寺南遺跡の機械掘削を行った。)

千提寺南遺跡は丘陵の南側谷部分が調査対象区である。隣接する山側の丘陵部分が千提寺西遺跡、日奈戸遺跡である(第2図)。千提寺西遺跡(日奈戸遺跡を含む)は調査総面積が25,000 ㎡以上であり、千提寺南遺跡や他の遺跡(千提寺クルス山遺跡、千提寺市阪遺跡等)もあわせて、茨木北インターチェンジ、茨木北パー



(西日本高速道路(株)作成の『新名神高速道路神戸JCT~高槻JCT(仮称)』より抜粋、改変)



写真 1 調査区風景 (西から) (平成 24年7月19日撮影)

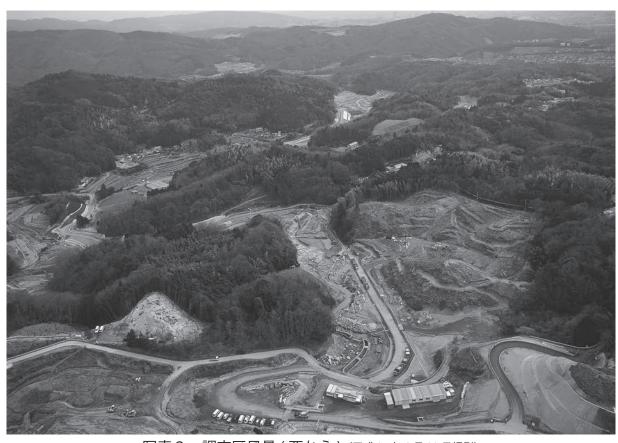


写真 2 調査区風景 (西から) (平成 25年2月22日撮影)

キングエリア建設予定地に相当する。

千提寺南遺跡の現地調査は、調査区を13に分けた(第6図)。調査は本体工事の撤去工などが済み、準備が整った調査区から順次行った。ただし、工程上、道路の付け替えを最後にせざるを得ず、9区や10区に隣接する道路付け替え部(12区)と、6区南側に隣接する道路付け替え部(13区)は、平成24年度から平成25年度を契約期間とする遺物整理事業の中で発掘調査を行うこととなった。

平成 23 年度から平成 24 年度に 12・13 区を除いた 11 の調査区、南北約 80 m、東西約 200 mを調査した (受託契約名:高速自動車国道近畿自動車道名古屋神戸線建設事業に伴う埋蔵文化財発掘調査 (茨木市域) その 4)。平成 24 年 1 月に 1 区の機械掘削を行って調査を開始し、平成 25 年 2 月に調査を終了した。その後、平成 25 年 3 月から遺物整理事業契約の中で 12 区の発掘調査を行った (受託契約名:高速自動車国道近畿自動車道名古屋神戸線建設事業に伴う埋蔵文化財発掘調査遺物整理 (千提寺南))。この 2 年度の調査総面積は 13,400 ㎡におよぶ。遺物整理作業を挟んで、平成 25 年 5 月から 6 月に最後に残った 13 区の調査を行い (12 区と 13 区の調査面積 1,066 ㎡)、全ての調査を終了した。調査総面積は 14,466 ㎡である。

発掘調査の合間には、現地にて遺構実測図面や写真の整理、遺物の洗浄・注記などの基礎整理作業を行い、記録の保存に努めた。全調査の終了後(平成25年4月から5月、平成25年6月から12月)、中部調査事務所にて報告書作成のための整理作業を行った。整理作業の詳細は第3節に述べるが、基礎整理を行った遺構実測図や出土遺物をもとに挿図を作成、また、写真や文章もあわせて遺跡の説明を行った。出土遺物や図面、写真についても整理して収納、保管し照会に応えられるようにした。平成26年3月、本書を刊行して完了した。

第2節 地理的 · 歷史的環境

第1項 地理的環境

千提寺南遺跡は、茨木市の北部、千提寺地区に所在する縄文時代から中世にかけての複合遺跡である。当 遺跡は、北摂山地の山間部を流れる安威川上流、大岩川西側に開かれた谷底平野に立地しており、調査地周 辺の現標高は T.P. +約 220.0 ~ 240.0 mをはかる。北には竜王山が位置する。

北摂山地は地層学的には丹波層群の南端にあたる。丹波層群は三畳紀後半(約2億年前)から堆積した地層であり、ほとんどが硬砂岩である。その後約1億年前には、地下の花崗岩マグマ(石英閃緑岩)が貫入してきたことによって周りの岩石が変質を受け、硬いホルンフエルスへと変化した。竜王山(標高510m)などがそれによってできた(加藤弥三一「IV地質古水流 I 茨木の地形と地質」茨木市教育委員会1991)。

安威川の源流は亀岡盆地の南側にある。亀岡盆地は丹波帯形成後の洪積世の頃に形成された亀岡湖の浅くなったものである。亀岡の谷から北から南に安威川に水流が流れ込む。一方の佐保川は泉原周辺を支流とする川で、下流になると茨木川となる。

安威川上流から中流、京都府亀岡市までは古・中生界の丹波層群から構成される。そのため、深い河谷が 形成される。ところが、竜王山より南になると、中生代白亜紀の花崗岩類で構成されるという。

東岸では同じく深い河谷が形成されるが、西岸では山地は標高 200 ~ 250 mと急激に低くなり、尾瀬と谷が複雑に入り乱れる。近畿トライアングルの花崗岩類から構成される山地は、花崗岩が風化してマサとなっているために、侵食に弱く低平化しやすい特徴をもつ。マサ化した岩盤は容易に掘削できるため、水田化が可能である。花崗岩類の地域には複雑な小谷が刻まれ、水田が開かれる。集落や水田は扇状地帯や山腹傾斜面に築かれる(高橋学「第4章安威川流域の地形環境と土地利用」大阪府文化財センター 1997)。

狭い平坦地を利用するためや乏しい水を有効に使うために、地形にあわせて狭く区画した棚田が多くみられる。水田には天水と湧水を利用した灌漑が不可欠だが、河川灌漑は不可能で、溜池の利用によっている。

第2項 歷史的環境

千提寺南遺跡の周囲には、千提寺地区に位置する遺跡群として、当遺跡の北には千提寺市阪遺跡、千提寺 クルス山遺跡、日奈戸遺跡、千提寺西遺跡が所在する(第1図)。

千提寺という地名は、忍頂寺の塔頭千提寺があったことに由来すると言われている。千提寺はその後浄土 真宗の寺院となり、明治時代頃廃寺となった(『わがまち茨木 地名編』 茨木市教育委員会 1988 より)。

千提寺地区は戦国時代から江戸時代初めの大名、高山右近の旧領地で、キリシタン墓碑やザビエル聖人画像などのキリシタン資料が数多く発見されていることから、隠れキリシタンの里としても有名である。平成11年に分布調査や民俗調査を含めた総合調査が実施され、千提寺地区についても字名などの調査が行われている(第4図)。これと対照すると、千提寺南遺跡は白井が谷の南、字名下日名戸の辺りに相当する。調査地の西側、佐保川左岸では弥生時代の石器が出土した泉原遺跡が知られていたが、千提寺地区では遺跡の存在が明らかでなかった。

今回の高速自動車国道近畿自動車道名古屋神戸線建設に伴って、平成23年度に当センターによって広範囲な試掘調査が実施され、当遺跡は新規に発見された。その後、平成23年度から平成24年度に本格的な調査が行われた。以下では、茨木市内および周辺のその他の遺跡を概観する(第3図)。

[旧石器時代]安威川流域で遺跡の発見はない。しかし、安威川の東、三島段丘や低位段丘には良好な遺跡が発見される。箕面市粟生間谷遺跡で石器製作跡遺構が発見されている。茨木市では佐保の田中代地点や神田平遺跡などがある。高槻市では郡家今城遺跡 A 地点、郡家今城遺跡 C 地点、郡家川西遺跡、塚原遺跡などがあり、塚原遺跡ではナイフ形石器や握斧などが発見されている。

〔縄文時代〕三島地域では縄文時代草創期・早期の遺跡として、高槻市大塚遺跡、吹田市吉志部遺跡、箕面市栗生間谷遺跡がある。栗生間谷遺跡と吉志部遺跡では有舌尖頭器が数多く発見されている。茨木市郡遺跡でも旧石器時代末から縄文時代草創期の有舌尖頭器が発見されている。

縄文時代前期・中期では高槻市柱本遺跡などがある。縄文時代後期は茨木市の安威川流域で初田遺跡、西福井遺跡、太田遺跡などがある。縄文時代晩期は茨木市耳原遺跡で深鉢棺墓 16 基が発見され、石鏃が数多く発見された。千提寺地区では免山篤氏により泉原の堂の前地点や佐保の田中代地点で、楔形石器や尖頭器、石鏃などの石器や高山寺式、神宮寺式、穂谷式など早期の押型文の縄文土器が採取されている。住居などの明確な遺構は検出されていない。

〔弥生時代〕弥生時代前期後半の耳原遺跡、郡遺跡、中期では塚原遺跡、中期後半では太田遺跡、後期では 茨木市安威遺跡、茨木市宿久庄遺跡がある。郡遺跡では弥生時代中期から後期の方形周溝墓や竪穴住居が発 見された。太田遺跡では竪穴住居などが発見された。

[古墳時代] 茨木市総持寺遺跡では、1基の円墳と36基の方墳からなる古墳群から円筒埴輪、形象埴輪が多数発見された。5世紀中頃からの築造と考えられる。三島丘陵では多数の古墳が形成された。古墳時代前期(4世紀前半)の紫金山古墳、将軍山古墳や古墳時代中期(5世紀)の太田茶臼山古墳などである。安威川流域では4世紀終り頃の安威古墳群や、耳原古墳、将軍塚古墳、海北塚古墳、新屋古墳群などの横穴式石室をもつ古墳がある。

〔古代〕竜王山の西南に位置する忍頂寺は、平安時代初めに僧三澄により建立された。貞観2年(860)清和天皇から寺号を賜り、勅願寺となった。当時は勝尾寺、神峰山寺などとともに23もの僧坊をもつ山岳寺院



第3図 周辺遺跡図(国土地理院50,000分の1地図「京都西南部」を使用)

として栄えた。他に寺院遺跡としては、太田廃寺、穂積廃寺、三宅廃寺などがある。

千提寺遺跡群の近くの遺跡としては、佐保の田中代地点で10世紀代の黒色土器B類椀、篠窯緑釉陶器皿、 青磁・白磁などの中国陶磁器などが発見されている。明確な遺構はない。 〔中世〕古代末から中世初めになると茨木でも荘園支配が行われる。藤原氏などの摂関勢力が強かった平野 部では、興福寺や春日社領が多く存在する。

山間部の忍頂寺は古代以後も、仁和寺の末寺として付近の5箇村に16町歩の荘園をもち勢力を誇った。忍頂寺5箇村といわれる、寺辺、銭原、音羽、泉原、佐保の村々である。寺辺の村が大門寺、車作、大岩、安元などとみられる。忍頂寺は織田信長が保護したが、高山右近がキリスト教布教のため寺領を没収し、衰えた。その後、17世紀前半に再興されたが再び衰え、今は寿命院が残るに過ぎない。寿命院本堂の北側斜面には、地輪に「元亨辛酉(1321年)七月十五日 金剛佛子 定盛」と銘が入った五輪塔が残っており、大阪府の有形文化財に指定されている。千提寺地区では、堂の前遺跡が名前の通り、瓦葺の寺院跡があったと推測される遺跡である。遺構は後世の開発により破壊されていたが、南北朝時代から中世末までの瓦が出土している。また、泉原今井遺跡では鎌倉時代の瓦器や土師器、中国陶磁などが発見されている。

中世後半期になると荘園支配が崩れ、地方の土豪が台頭してきて領主となった。茨木氏、中川氏、高山氏、乾氏などである。その居館が山城である。中世の山城跡としては、福井城跡、安威城跡、泉原城跡、佐保城跡などがある。泉原城は築城者が国人泉原氏と確定できる唯一の城である。東西の谷川によって造られた独立丘陵の地形を活かした、東西 250 m、南北 100 m位が城郭の範囲と推定される。現在は拡幅削平されて詳細は不明だが、北側が最も低く、切通となっていたと思われる。佐保城跡は元来城山と呼ばれていた。佐保の盆地が北より延びる急峻な地形を利用して造られた連郭式城である。長楕円形の郭で、北と東側に土塁が廻る。築城者は不明である。

千提寺では、大字千提寺字中ノ谷小字土居山に山城があった。近代初頭まで中世名主の系譜を引いていた 乾氏の居館跡である。千提寺地区のほぼ中央、西から突出した急峻な地形を利用して築かれる。西のみ尾根 続きだが、三方は急斜面である。北と東に土塁が廻る。幅の広い東部は南側に小土居が造られ、郭状をなす。 山間部は高山氏が支配し、キリスト教を厚く庇護したため流罪となったのは広く知られている。

〔近世〕千提寺に関連してはキリシタン遺物の発見がある。大正8年(1919)から昭和5年(1930)にかけて、千提寺安元地区の藤波大超氏が東籐次郎氏の協力を得て、「上野マリヤ」と書かれた墓碑をみつけたのを皮切りに、「フランシスコ・ザビエル画像」や「キリスト磔刑像」などの数々のキリシタン遺物が周辺の民家から発見された。その後、下音羽地区でも「マリア十五玄義図」「象牙彫キリスト磔刑像」なども発見された。これらのキリシタン遺物は、神戸市立博物館や京都大学博物館に保管されている。千提寺地区には昭和62年(1987)に茨木市立キリシタン遺物資料館が設置され、2012年には創立25周年を迎えた。

今回、千提寺南遺跡と共に調査を行った千提寺クルス山遺跡は、まさにこの上野マリヤ墓碑がみつかった場所に相当する。

〈参考文献〉

井藤曉子編 1999 『(財) 大阪府文化財調査研究センター調査報告書第 40 集 彩都(国際文化公園都市)周辺地域の歴史・文 化総合調査報告書』 (財) 大阪府文化財調査研究センター

井藤曉子編 1997 『(財) 大阪府文化財調査研究センター調査報告書第9集 安威川総合開発事業に伴う文化財等総合調査』 (財) 大阪府文化財調査研究センター

茨木市教育委員会 1988 『わがまち茨木 地名編』

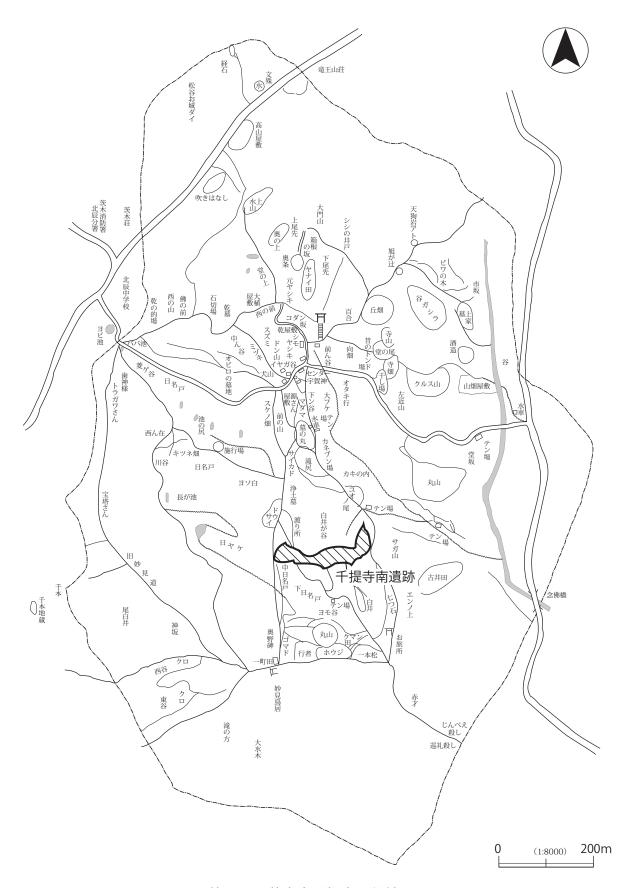
茨木市教育委員会 1991 『わがまち茨木 水利編』

茨木市史編纂委員会編 1969 『茨木市史』

茨木市史編纂委員会編 2004 『新修 茨木市史 第八巻史料編 地理』

公益財団法人大阪府文化財センター 2013 現地説明会資料『千提寺西遺跡の調査』

田代克己、小林章 1998 『茨木の史跡』 茨木市教育委員会



第4図 茨木市千提寺民俗地図

((財)大阪府文化財調査研究センター調査報告書第40集 『彩都(国際文化公園都市)周辺地域の歴史・文化総合調査報告書』より抜粋、改変)

第3節 調査の方法

第1項 地区割と調査区名

調査区割は世界測地系に基づく平面直角座標系に準拠している。

第 I 区画から第IV区画の区割によって大阪府内を分割し、それぞれに地区割名を与えるものである。第 I 区画とは、大阪府の南西端 X=-192,000、Y=-88,000 の交点を基準として、南北 6 km、東西 8 km の範囲を 62 分割した区域をいう。このうちの 1 区画をさらに南北 1.5 km、東西 2 km の範囲を各 4 分割、計 16 分割したものが第 II 区画である。さらに、この第 II 区画を南北に 15 分割、東西に 20 分割した一辺 100 mの範囲を第 II 区画とする。第 II 区画を東西南北それぞれ 10 分割した一辺 10 mの範囲を第 II 区画とする。

大阪府が位置する第VI座標系を第 $I \sim IV$ 区画に区分すると、当遺跡の所在地は第 $I \cdot II$ 区画がL 5 - 7となる。第III区画が $3 \cdot I \cdot 4 \cdot I \cdot 5 \cdot I \cdot 6 \cdot I$

調査区は 13 に当初設定された区割からは工程上若干の変更が生じ、別の調査区だった 12 区と 13 区を一つの区として調査した(第 6 図)。また、道路の付け替え部にあたる 8 区も 2 つに分けて調査したため、それぞれの調査時には 8-1 区、8-2 区と呼称した。この報告書で調査区名の整理を図り、以下の名称に変更する。

旧調査区名 新調査区名 $12 \cdot 13$ 区 \rightarrow 12 区 8-1 区 \rightarrow 8 区 $8-2 \cdot 8-3$ 区 \rightarrow 13 区

また、遺構番号も区の調査順が 1 区、5 区、7 区、9 区、11 区、10 区、3 区、4 区、6 区、2 区、8 区、12 区、13 区の順であり、2 つの調査区を並行して調査することもあったので、調査時には区毎に 1 からの数字を付与した。よって、遺構番号が数字の通し番号となっておらず複数存在する例が生じた(例えば 1 区、6 区、10 区それぞれに 1 溝が存在する)。

そこで、遺構番号も整理し番号を付け替えることとした。1区の遺構番号はそのままにして、それ以外の 区は調査時に付与した遺構番号の前に、調査区を表す数字をつけ、従来の遺構番号はそのあとに2桁ないしは3桁の番号で続けるものとして、3桁ないしは4桁の番号で表すこととした。

(例)

 旧遺構番号
 新遺構番号

 1区 1溝
 → 1溝

 6区 1溝
 → 601溝

 10区 1溝
 → 1001溝

 4区 23 土坑
 → 423 土坑

第2項 発掘調査

各区とも現況測量後にバックホウを用いて盛土・耕土等の機械掘削を行った(写真3)。機械掘削後はベルトコンベアー、排水ポンプ等を設置し、断面観察用のアゼと側溝を適宜設けた。アゼは調査区の南北もしくは東西の座標の正方位にそって谷底を通る箇所に設けるようにしたが、地形にあわせた結果、正方位より45°の角度になった調査区もある。

人力掘削では、包含層の掘削(写真3)、精査、遺構検出、遺構掘削、写真撮影、実測、遺物の取り上げな

どを行った。各遺構面の調査ごとに、遺構面の撮影や平板測量、調査区・遺構断面の実測を行った(写真6・7)。 調査はすべて当センターの『遺跡調査基本マニュアル』に準拠して行われた。遺構平面図の作成には平板 図は100分の1、航空測量図は50分の1縮尺を基本とする。断面図の作成には10分の1もしくは20分の 1縮尺を基本とする。出土状況図は5分の1や10分の1縮尺などを適宜使用した。測量の際は委託して設置 した3級基準点や4級基準点に拠って、各調査区内に杭を設置し、X、Y座標値を割り出した。

写真撮影は35 mmフィルムによるモノクロ、リバーサル撮影とデジタルカメラを基本とし、全景写真や重要写真には6×7版フィルムでモノクロ撮影した。特にカラーでの記録情報が必要なもの、巻頭図版やパンフレット等に使用される可能性があるものは6×7版フィルムでリバーサル撮影した。

航空測量は、13 区以外の調査区で主要な遺構面の調査時に1回、計12回のヘリコプターによる航空測量を実施した(写真4)。航空測量の際は必要に応じて高所作業車を使用して写真撮影を行った(写真5)。また、全調査区とも最終遺構面については大阪府教育委員会の立会を受けた(写真9)。

平成25年3月23日には隣接する千提寺西遺跡で現地説明会が実施された。新聞報道で広く紹介されたこともあり、地元の方以外の遠方からの来訪者もあり、572名の参加を得た。千提寺南遺跡に関しても写真パネルや出土した縄文土器・石器の展示を行い、縄文時代から中世まで継続した千提寺南遺跡の存在を広く印象づけた(写真10)。

第3項 整理作業

今回の調査で出土した遺物はコンテナ 20 箱にのぼった。現場作業の合間に遺物の登録や洗浄、注記といった出土遺物の基礎整理作業を随時実施した。また、撮影した遺構写真のアルバム整理や写真台帳作成、遺構実測図の整理なども現場作業と並行して行った。

平成25年4月からはセンター中部調査事務所にて本格的に整理作業を開始した。

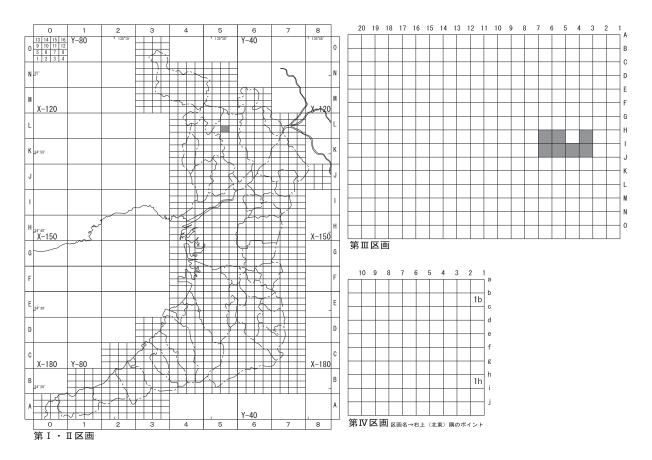
遺構については、実測図や空測図の整理から挿図レイアウト、トレース、版下作成、原稿作成等を行った。 遺構はデジタルトレースを行った。デジタルトレースについては PhotoshopCS 2を用いて図面の合成作業を 行い、IllustratorCS 2でトレース作業を行った。

遺物については、掲載遺物のピックアップから接合、実測(写真8)、拓本、トレース、版下作成、原稿作成、 遺物観察表の作成などを行った。トレースはロットリングトレースを行った。挿図や写真図版の掲載番号が 確定した後は、個々の個体に掲載遺物ラベルを記入し、掲載順にコンテナに収納した。

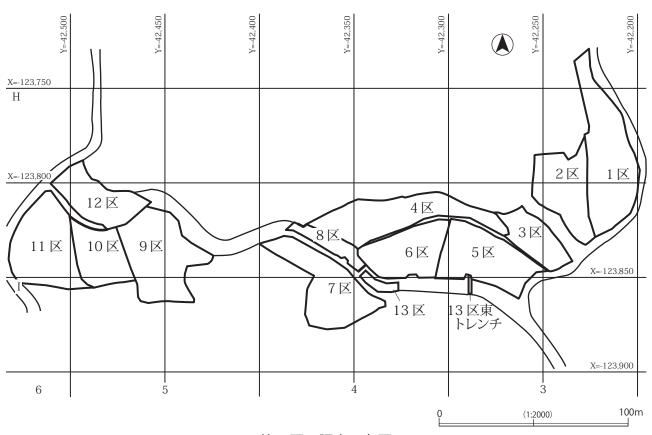
写真図版は、遺構は現場で撮影した6×7版モノクロ写真を中心に写真を選択し、レイアウトを行い、写真室で紙焼、その後貼り込み、キャプション等を作成して完成した。遺構写真図版は29プレートになる。遺物は写真掲載遺物を決定して、必要に応じて接合・復元を行った。レイアウトの後、撮影、紙焼は写真室に依頼した。その後に貼り込み、キャプション等を行って完成した。遺物写真図版は17プレートになる。

原稿、挿図、写真図版を個々に完成した後、編集作業を経て報告書の体裁を整えた。入稿後校正を経て、 平成26年3月本書の刊行をもって完了した。

遺物は報告書掲載順に整理して、報告書の遺物番号などから後日すぐに検索できるよう収納した。台帳はファイルメーカーを用いてデータベースの台帳を作成した。それらの遺物台帳、写真台帳にも掲載番号等を付与し、報告書からの検索を可能とした。



第5図 地区割図



第6図 調査区名図



写真 3 現場作業風景



写真 5 高所作業車からの写真撮影



写真7 断面実測



写真9 大阪府教育委員会による立会



写真4 ヘリコプターを用いた航空測量



写真6 平板測量



写真8 遺物実測



写真 10 現地説明会風景

第2章 基本層序

第1節 基本層序

調査地は南北約80 m、東西約200 mという範囲で、13 の調査区に分かれて存在する(第6図)。1区から8区と13区は、南北の丘陵地に挟まれた谷底平野でその中心にあたる3区のみが北西部の山から伸びる尾根となる。3区を胴として蝶が羽をひろげたような形状である。また、西側の11区から7区にむかっては西から東に下降する地形をとる。そこで、3区より東(1・2区)を東部、3区から8区と13区を中央部、9区から12区を西部と、調査区全体を大きく3つに分けて記述する。

標高は中央部の中では、山の尾根にあたる3区は独立して高い。全体としては西端の11区が最も高く、東端の1区が最も低くなる(第7・8図)。

また、基本層序は大きくは3層に分けられる。試掘調査結果報告に基づく呼称を本調査でも踏襲し、耕土層・ 床土を1層とし、人力掘削を行った層の上層を2層、下層を3層とした。

2層は黄褐色や灰褐色の細砂混じりシルトをベースとする層で、主に中世から近世の遺物を包含する。2 層は区によって堆積の厚さが異なる。

3層は東部では、砂礫を多く含むほか、マンガン粒を含むことにより赤茶色を呈するシルト層が上層に堆積していた。全体では、白色砂礫や有機物を含む黄灰色もしくは灰色シルト層がベースとなる。3層は縄文時代から中世以前の遺物を包含する堆積層と考えられ、地山まで、ほぼこの層が堆積していた。地山に近い最下層では粒子の粗い砂礫層となる事が多い。地山は、黄橙色のしまった中砂から粗砂で、花崗岩のバイラン土である。

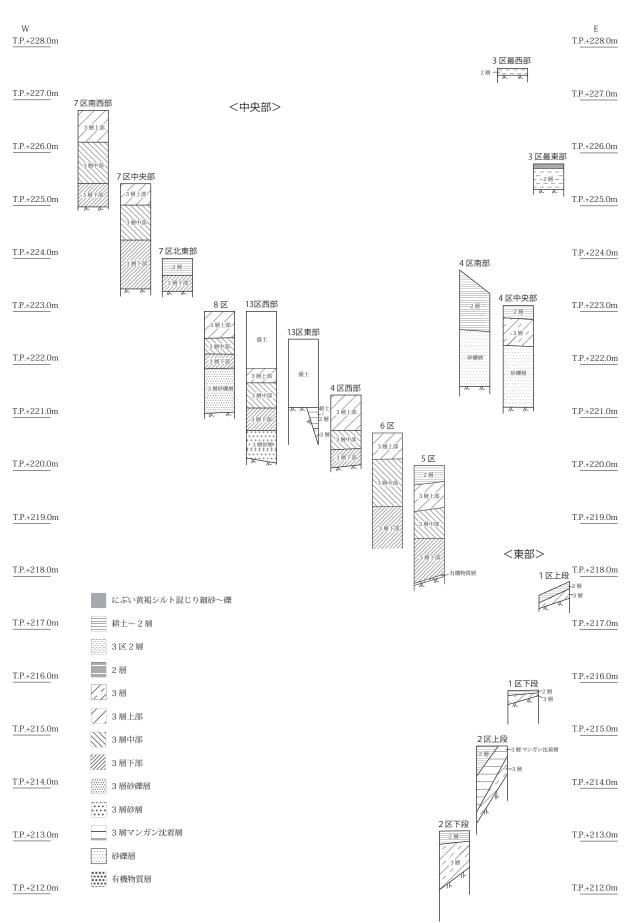
ただし、調査地は広い範囲におよぶため、同じ 2 層、3 層でも離れた地点では土色や土質に違いが認められる。そこで、初めに全体を概括するための基本層序柱状図を示した(第 $7 \cdot 8$ 図)。次に、東部の東西方向を示す断面としては X = -123,800 ラインを通る断面(第 9 図)を、中央部は南北方向を示す断面(第 10 図)を、西部は主に東西方向を示す断面(第 11 図)を掲載した。なるべく各調査区の最も低いところを通る断面を抽出した。また、 3 区については、他の調査区と標高や性格が異なるため、第 3 章の遺構面のところであわせて説明することとする(第 29 図)。

第1項 東部「1・2区](第7・9図)

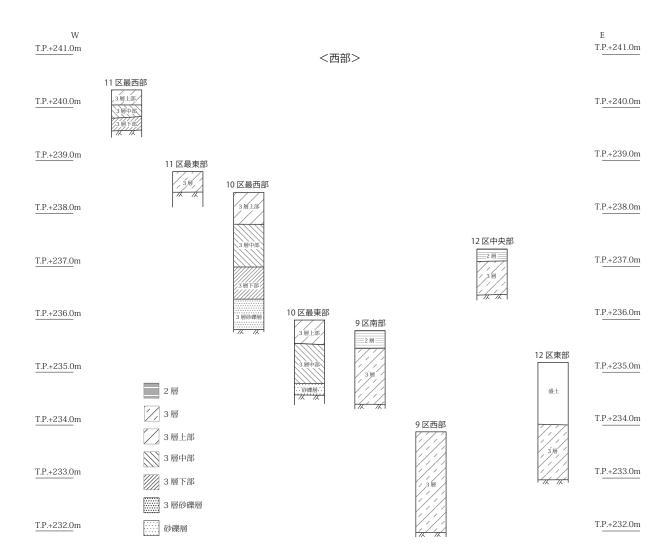
1区、2区とも南北に細長く広がる調査区である。東から西に低くなる。調査前も東から西に落ちる南北方向の棚田であった。1区から2区にむかって下がる傾斜地形が、棚田造成の際に削平を受け現況の段状地形になったと思われる。従って、2区の上段など本来はもっと高かったと考えられる。人力掘削を開始した標高は、最東部の1区上段がT.P. + 218.9 m前後となる。最西部の2区下段でT.P. + 213.2 mをはかる。

2層は $0.1 \sim 0.5$ mの厚さで黄褐色の細砂混じりシルト層を主体とする。北東部から北西部にかけて厚く 堆積する。須恵器などをわずかに含むものの、土師器・瓦器・陶磁器・瓦質土器等を主に包含することから 古代末から中世以降の堆積層と考えられる。2層上面に近世以降とみられる鋤溝などの耕作痕が認められる。

この下層の3層は調査区北東部では灰黄褐色細砂~礫混じりシルト層である。さらに、1区から2区上段では、上層にマンガン粒を多く含むため黄色味が強く、オリーブ褐色を呈する層が認められ、2層と3層を細分することができる。縄文時代所産の遺構はこのマンガン粒が沈着する3層の上面に多く存在する。



第7図 基本層序模式図(1)



第8図 基本層序模式図(2)

マンガンが沈着する層(第7・8図では3層上部と表現)の厚さは $0.1 \sim 0.5$ m程度であり、2 層と同じく北東部で最も厚く堆積が認められ、南東部から南西部ではほとんど堆積しない。さらに3層下層(3層中部~下部と表現)は $0.2 \sim 1.0$ m堆積する。これらの層に縄文土器や石器などが含まれる。

調査区南西部、2区の南側から下段にかけては白色の砂礫を含む灰色細砂混じりシルト層が主となる。これは、中央部や西部の谷に最も標準的に堆積する層である。この下からは湧水が著しい。主に中世の土器を含む。

3層を除去すると丘陵から滑落した岩石が集積する地山面となる。2区下段の3層除去後の標高は約T.P.+212.0 mとなり、1区の上段と比較すると6m程の高低差をもつこととなる。

第2項 中央部 [3・4・5・6・7・8・13区] (第7・10図)

1区、2区と4区に挟まれた山の痩せ尾根部分が3区である。3区は北西から南東に斜めに細長く延びる調査区である。3区の最高部でT.P. + 227.6 m前後である。急峻なため土の堆積が少なく、山頂平坦部では地山の土が風化した層の堆積がわずかに認められるのみである(第29図参照)。

3区の南側山裾に広がるのが 4 区、 5 区、 6 区である。 4 区は 3 区の山裾にあたり、東西に細長く孤を描くように広がる調査区である。東西で約 100 m離れているため、東側、中央部、西側で堆積状況が大きく異なる。北から南に、西から東に低くなる。東側は 3 区の山裾が延びてくるため、盛土を除去すると地山の崩

れた土が堆積するのみである。中央部は T.P. + 221.5 m \sim 223.0 m \circ 、2 層と 3 層が 0.5 \sim 1.0 mと厚く堆積して、それぞれの上面で複数の遺構面が認められた。遺物も縄文時代前期から中世までの幅広い時期のものを包含する。西側は 3 層が厚く堆積する谷状地形をとる。

4区の西側と5区、6区が北と南の山に挟まれた盆地の最も谷底に近い地区で、2層、3層ともに厚く堆積する。人力掘削開始高は4区で約 T.P. + 223.0 m、5区で約 T.P. + 220.0 m、6区で約 T.P. + 220.8 m である。そこから調査で確認できた限りでは、2層、3層が2~3 m堆積する。5区や6区は3層の堆積が3 m以上におよんだ。5区と6区は4区と北を接し、東半が5区、西半が6区に相当する。3層の堆積が厚く、間層となる砂層を目安に数回に分けて掘削し、3層上部、3層中部、3層下部と表現した。

中央部での3層は、灰色から灰褐色の白色砂粒を含むシルト層を主体とする。3層最下層には木の枝などの有機物を含むためか、やや黒味を帯びた黒褐色シルト、あるいは川砂の黄灰色砂礫層が堆積する。3層上層から中層の厚い堆積中に、足跡と考えられる踏み込みを伴う細砂層の堆積が間層として認められた。3層の堆積は一挙に生じたのではなく、機能している時期と、浸水して機能していない時期とが交互に繰り返されたものと推測できる。ただし、上層でも下層でも包含する遺物は古代末から中世後半のものであり、時期幅は数百年内におさまるだろう。

3層途中で杭を列状に並べる、あるいは自然石を利用して列状に並べた遺構が認められた。畦畔などは検出していないが、一定の方向性、規則性が認められることから水田の区画などに基づく施設とも考えられる。 最低部の標高は 4 区で約 T.P.+221.5 m、5 区で約 T.P.+218.0 m、6 区で約 T.P.+219.0 mである。

7区は3区とは4区、5区、6区を挟んで相対的に位置する南側の山から落ちてくる傾斜地で、南東部が 膨らみ、西側が細長いおたまじゃくしのような形状をとる。南西から北東に低くなる。

人力掘削開始高は 7 区南西部で T.P. + 226.5 m、中央部で T.P. + 225.5 m、北東部で T.P. + 224.0 mとなる。そこから南東部や南西部では 2、3 層が $1.5 \sim 2.0$ m堆積する。北西部から 8 区に接する部分は 2 層の堆積が厚く、2 層を除去すると、3 層の堆積がなく地山が露出する部分が多い。2 層は黄褐色のかたくしまったシルト層である。 2 層には陶磁器などが多く含まれていた。膨らんだ南東部を二分するように細くて深い谷筋が入り、その部分にのみ 3 層が厚く堆積していた。 7 区でも最も深い箇所は部分観察にとどまった。 7 区の最高部と最低部の標高差は約 4 mになる。

4区から8区、13区ともに、3層の堆積中には2区などと同様に、山頂から落ちてきた花崗岩の巨石が多数含まれていた。中央部の南北方向の堆積状況を示す断面図を第10図に示した。同じY座標軸では断面を取ることができなかったため、区によって層厚などに若干の相違は生じる。

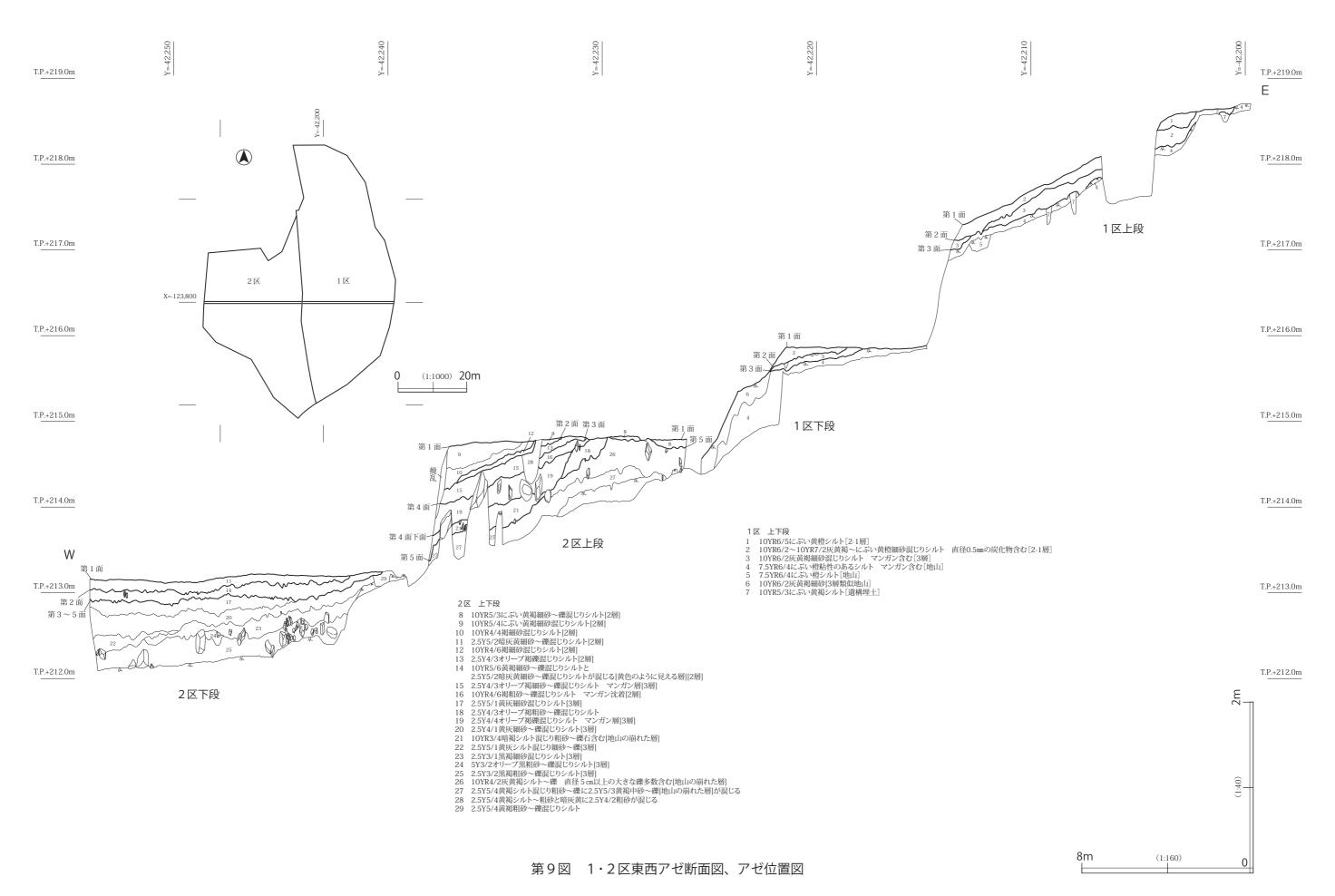
8区は既存の道路部分で主に4区と7区の間に位置する、細長い調査区である。人力掘削開始高は約T.P.+ 222.9 mである。西から東に低くなる。4区同様に3層が厚く堆積していた。

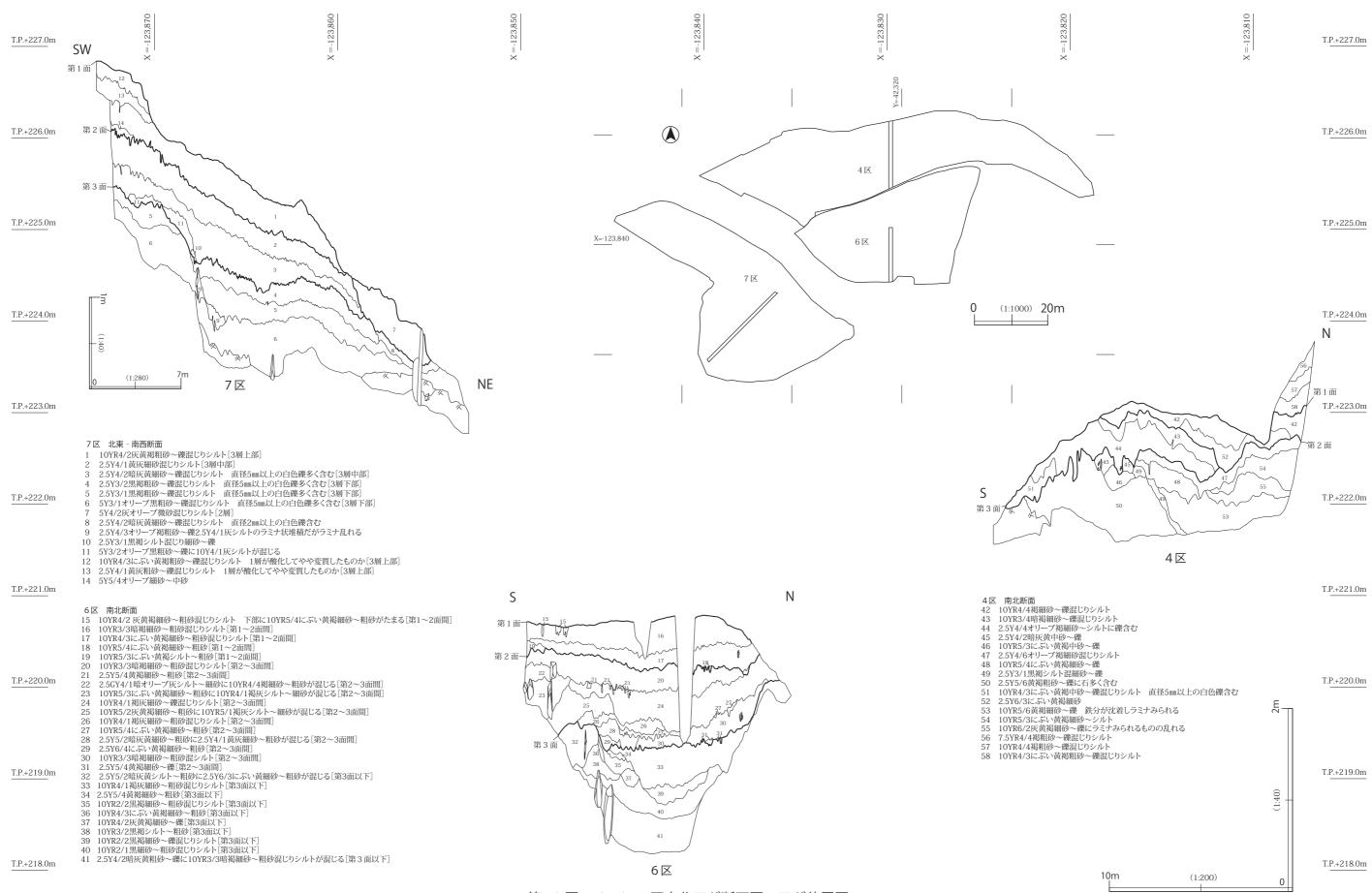
13 区は既存の道路部分で主に 6 区の南に位置する細長い調査区である。人力掘削開始高は約 T.P. + 222.0 mである。西から東に低くなる。6 区同様に 3 層が厚く堆積していた。

13 区東トレンチは 5 区西側の谷から連続する 3 層の堆積を確認するために設定した。 5 区との境界から 2 、 3 m南までは 3 層が 1 mの厚さで堆積するが次第に薄くなり、谷底が上昇して地山が露出した (第 46 図参照)。 第 3 項 西部 「9・10・11・12 区] (第 8・11 図)

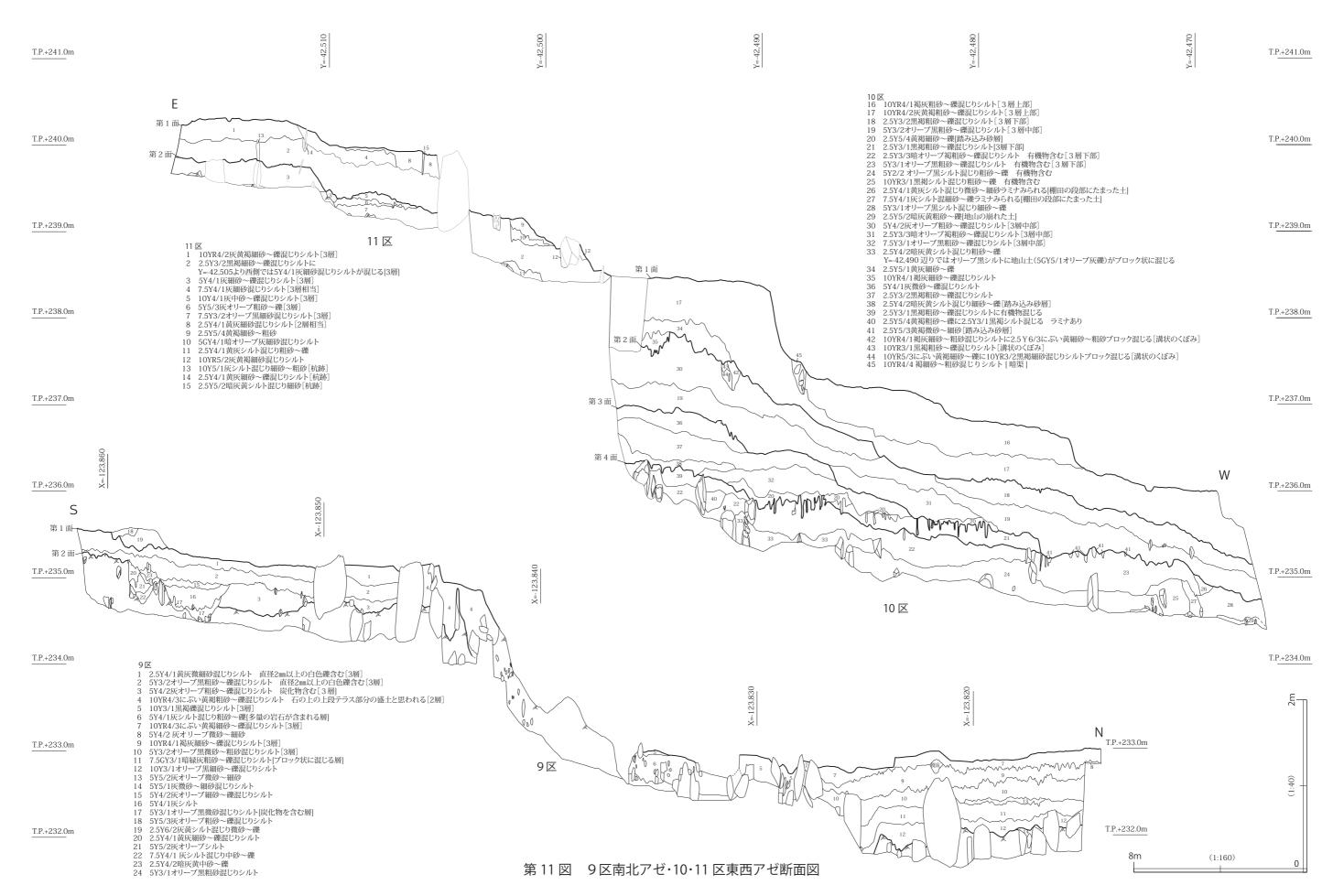
11区、12区は市道千提寺中線を西辺とし、10区は11区の東に、9区は10区の東に位置する。いずれも西から東に下降していく調査区である。調査前も西から東に落ちる南北方向の棚田が8、9段あった。

11区から9区にかけては、調査区の北端と南側で深い埋積谷が認められ、それ以外は機械掘削で盛土等を





第10図 4・6・7区南北アゼ断面図、アゼ位置図



除去すると3層が堆積せず地山が露出した。10・11区では調査区の西半では2層が認められ、2層上面で竹管を用いた暗渠状の遺構が構築されていた。

10・11区の2層は黄褐色から赤褐色のシルト層で、古代末から中世の遺物を包含する。

人力掘削開始高は 11 区最西部で T.P. + 240.4 m、最東部で T.P. + 238.8 m、10 区最西部で T.P. + 238.4 m、 最東部で T.P. + 236.0 m、9 区最西部で T.P. + 235.8 m、最東部で T.P. + 233.9 mとなる。西の 11 区から 東の9 区までの標高差は約7 mとなる。谷筋では、2~3 mの厚さにわたって3 層が堆積する。

11 区と 10 区にある、南側谷筋の西部の 3 層の堆積の厚いところでは、 5・6 区と同様に足跡による踏み込みを伴う砂層が間層として数層確認できた。これを目安に 2、3 層に分けて掘削し、中央部と同様 3 層上部、3 層中部、3 層下部とした。 3 層は灰色から暗灰色のシルト層を基本とし、上部がより粘性が強く、下部になると砂礫の混じり方が強くなる。最下層では有機物が堆積する層が認められる傾向なども中央部と同じである。中央部と比較すると、3 層では土師器、瓦器など主に中世の遺物を包含するが、黒色土器などやや古い遺物も含む。

11 区から 10 区にかけての南側谷筋の 3 層上部では、西に要をおく扇形の中世の棚田が数段確認できた。 近現代と同じく傾斜地形を利用して棚田などの耕作地に利用されていたと考えられる。また、棚田に伴う石 列や杭列などの遺構も確認した。

北端の谷筋は11区から9区の途中まで認められ、調査区外にも延長していくと考えられる。

9区は南側の上段部は山の裾にあたるためか3層の堆積が薄かったが、南東部では縄文時代の石器や弥生 土器などの比較的古い時期の遺物が含まれていた。

9区では、地山の露出した箇所、特に低くなった東側では頂上から滑落してきたと思われる巨石が集積していた。これらの上に盛土等をかぶせて平坦化し、近現代の田や畑として利用していたようである。盛土する際に突出した石の上部を切り取るためのノミなどの加工痕もみられた。

12 区は市道千提寺中線から分岐する道路であり、8 区同様道路の付け替え部分に相当する。山の裾部にあたる。従って、北側は機械掘削を行った段階で地山が露出した。

12 区の調査区の東端、9 区に隣接する部分で深い埋積谷が認められ、それ以外は機械掘削で盛土や締りの弱い表土を除去すると地山が露出した。人力掘削開始高は12 区中央部で T.P. + 237.3 m、東部で T.P. + 234.1 mとなる。中央部では2層が0.2 m、3層が0.5 m程度堆積して地山が現れる。東部では1 m以上におよぶ盛土を除去すると2層はほとんどみられなかった。削平されたと考えられる。その下層には3層が1 m強堆積する。

中央部の3層の堆積の厚いところでは、足跡による踏み込みを伴う砂層が間層としてあるのが確認できた。 これより、近現代と同じく傾斜地形を利用して、中世の棚田などの耕作地に利用されていたと考えられる。 地山の露出した箇所では頂上から滑落してきたと思われる巨石が集積していた。

以上、基本層序を概観すると基本的には東部では東から西に、西部では西から東に下降していく地形をとり、 北の山から、あるいは南の山から落ちてくる数本の谷筋が現道路の辺りで、最も深くなる地形の状況がみて とれる。そして、谷筋深く堆積したシルト層を活用して、主に耕作地に利用されていたと考えられる。利用 の詳細は、次章の遺構でみていきたい。

第3章 調查成果(遺構)

当章では、遺構の調査成果を記述する。調査区が 13 あり、全てを一度に図化、説明すると煩雑になるため、第 2 章に倣って調査区を東部(1、2 区)、中央部(3 \sim 8 区、13 区)、西部(9 \sim 12 区)の 3 つの区域に分け、それぞれ節を設けて記述した。全調査区の主要遺構面の平面図は第 5 章の総括に掲載した(第 72 図)。

出土遺物の調査成果については第4章に記載した。ただし、出土遺物については、1区から12区まで調査区位置の東から西に掲載するが、遺構と同じ東部、中央部、西部の区分となっていない箇所もある。

また、機械掘削終了時に精査した遺構面を概ね第1面としたが、それ以降は層の掘削の細かさが違うため、各調査区によって遺構面数が異なる。基本は東部、中央部、西部毎に対応する遺構面で1つの合成平面図として図化し、説明を行った。その後、合成平面図に含まれるそれぞれの区の遺構面、遺構の図化、説明を行っている。そのため、対応する遺構面の名称が調査区によって異なる場合があるが、あえて統一せず調査時の名称のままとした。各調査区の遺構面の対応は第5章の表9にまとめた。

機械掘削終了面や部分的な調査にとどまった遺構面は、文章や写真図版で説明するにとどめ、遺構平面図は掲載していないものもある。また、1層、2層、3層という包含層の名称は第2章の基本層序の呼称をそのまま使用している。

第1節 東部(1・2区)の遺構

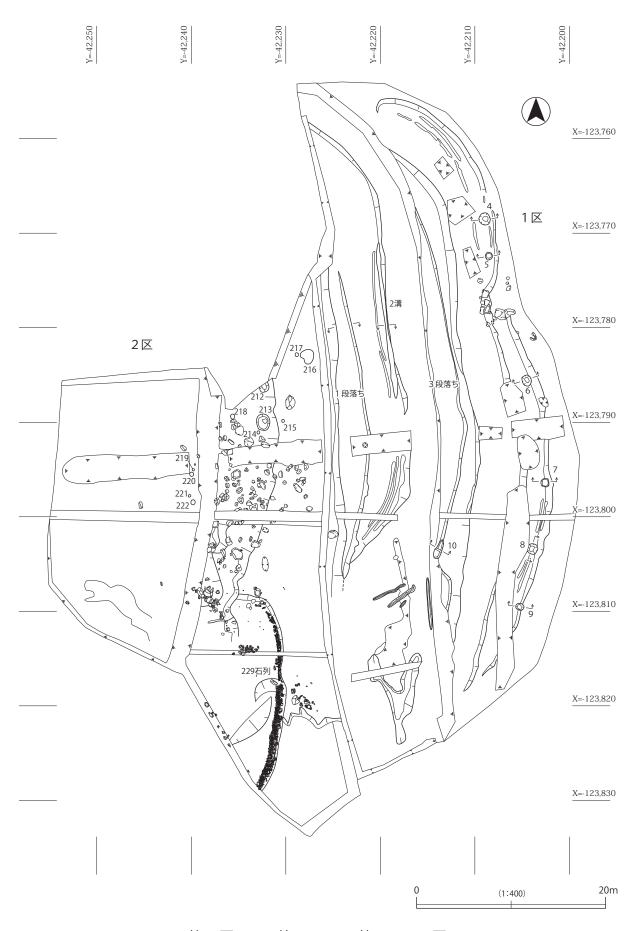
第1項 1区第2面・2区第3面(第12~19図、写真図版1~4)

1 区と 2 区はおおよそ $X=-123,755\sim-123,835$ 、 $Y=-42,200\sim-42,250$ の間に存在する。南北に細長い形状をとる(第 12 図)。調査前の現況では、東から西へと下降する棚田が 4 段広がっていた。機械掘削で盛土や近世耕土層(1 層)を除去しても東から西へと下降するままである。機械掘削終了後の高さは、最も高い 1 区の東端で T.P.+218.8~m、最も低い 2 区の西端で T.P.+213.2~mと比高差は 5~m以上ある(第 9 図)。

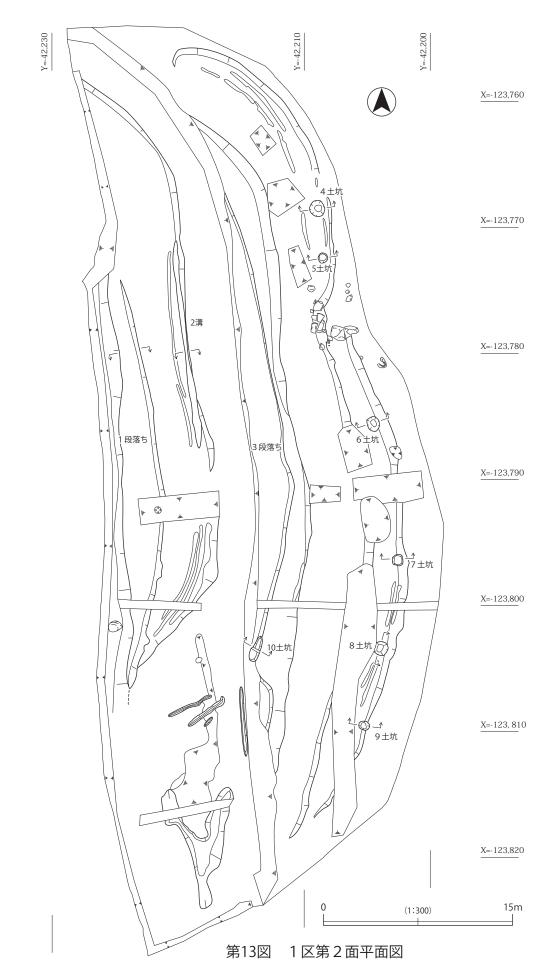
1区、2区とも機械掘削を終了した面を第1面とした。第1面では南北方向、あるいは東西方向の鋤溝を確認した。機械掘削や第1面精査で出土したのは、縄文土器も含むが多くは陶磁器類である(第57図)。よって、第1面は近世の遺構面と判断し、この節では報告しない。その後、1区は2層を掘削して、2層の下面の土坑や溝などを複数検出した遺構面を第2面とした。第2面の平面高は約T.P. + 218.6 m~214.7 mである。

2区は第1面掘削後、上段(東半)中央、X=-123,800 辺りから北5 mほどの範囲にのみ、2層が厚く 堆積して上層、下層と分層できたため、2層上層のみを $0.1\sim0.5$ m掘削して第2面とした(写真図版3)。 2区の第2面では短い溝を1条検出した。

さらに、2層下層を掘削し、土坑などを検出し第3面とした。第3面の平面高は約 T.P. $+214.7 \,\mathrm{m}\sim +213.2 \,\mathrm{m}$ である。 1 区第2面と 2 区第3面とも、3層上面を検出したところを対応する遺構面と捉えて合成平面図を作図した(第 12 図)。 1 区では第2面以下は橙色や褐色系シルトや細砂の 3 層を掘削し、全域で地山まで検出した。 2 区は下段の北西部や X=-123,810 以南では、東の山から落ちてくる谷にあたり、他の調査区でも谷に埋積する灰色シルト(3 層)が深く堆積して、地山まで検出できなかった部分がある。複数時期の遺構が同一遺構面で存在するが、詳細な遺構の説明は以下に記述する。



第12図 1区第2面・2区第3面平面図



1区第2面の遺構(第13図、写真図版2)

第1面の名残で、地形のカーブに沿うように東から西にいくつかの段落ち(1段落ち・3段落ち)や溝(2 溝)が存在する。また、最東部から3段落ちの間で円形や不整円形の土坑数基を検出した。

遺構から遺物が出土していないが、2区での検出遺構の時期や層位との関連から1区の第2面は縄文時代の遺構面と考えられる。

1段落ち(第 14 図)・3段落ち どちらも棚田の段が一段下がる傾斜部分の落ち、溝状部分の上層に土が 堆積したものである。段中心部が最も幅広で、段に沿って三日月状に落ちが発生する。最大幅 $2.5\sim3.0~\mathrm{m}$ 深さ $0.25~\mathrm{m}$ をはかる。

2溝(第14図) 1段落ちと3段落ちの間の南北に長い溝である。幅0.3 m、深さ0.05 mをはかる。

1区の東端の縁辺部に沿って、4土坑から9土坑を検出した。土坑はいずれも不整円形、もしくは隅丸方形で大きさもまちまちである。土坑と土坑の間隔も4土坑と5土坑は約3.0 mだが、5土坑と6土坑の間は14.0 m弱、それ以外も10.0 m、7.0 m、7.0 mとまちまちである。ただし、5土坑と6土坑の間などにさらに土坑が存在していた可能性もある。

10 土坑のみがやや離れた 2 段目の段端の位置に存在し、形状もアメーバ状の長円形であるのに対して、 4 土坑から 9 土坑は平断面形が似ており、南北方向に長軸をとることや埋土に焼土や炭化物が含まれるなどの 共通点が認められる。ただし、遺物も出土しておらずこれらの土坑の性格や関連性は決めがたい。

4土坑(第14 図、写真図版2) 長径 1.3 m、短径 1.2 m、深さ 0.3 mをはかる。南東隅が直線的な不整円形の土坑である。断面形は椀形である。上層には 3 層や地山がブロック状になった土がほぼ水平に堆積していた。下層には炭化物層が広がり、最下層には焼土が歪な形状で北西寄りに認められる。土坑底で何かを焼いた痕跡と思われる。遺物は出土していない。

5土坑(第14図、写真図版2) 長径0.8 m、短径0.75 m、深さ0.2 mをはかる。ほぼ円形の土坑である。 断面形は椀形である。埋土のほとんどは3層と地山ブロックが混じった土で占められるが、下層には炭化物 と焼土が長円形に認められる。遺物は出土していない。

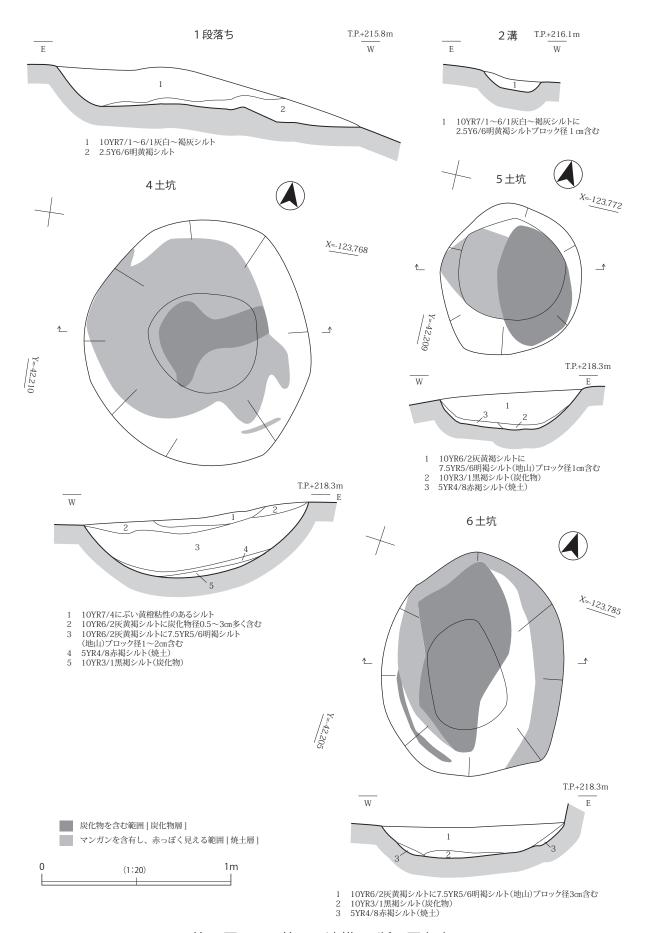
6土坑(第 14 図) 長径 1.2 m、短径 0.95 m、深さ 0.2 mをはかる。南北に長い長円形の土坑である。断面形は皿形である。上層は 3 層と地山ブロックが混じった土で占められるが、下層は焼土が壁に張り付くように巡り、底部には炭化物が認められる。遺物は出土していない。

7土坑(第 15 図) 長径 0.9~m、短径 0.8~m、深さ 0.15~mをはかる。隅丸方形の土坑である。断面形は逆台形である。 6土坑と同じく、東側の壁に焼土がみられ、最下層には炭化物がまだらに認められる。遺物は出土していない。

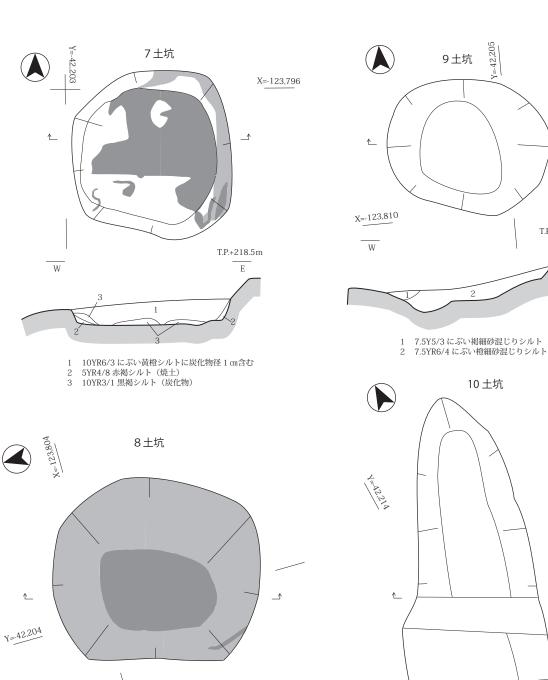
8土坑(第15図) 長径 1.1 m、短径 0.95 m、深さ 0.2 mをはかる。隅丸方形の土坑である。断面形は椀形である。当土坑は上層の埋土を除去すると、壁面に焼土がまんべんなく認められ、底部には炭化物が円形に堆積していた。遺物は出土していない。

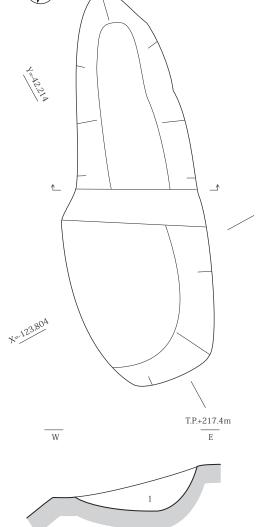
9土坑(第15図) 長径0.9 m、短径0.7 m、深さ0.1 mをはかる。不整円形の土坑である。断面形は皿形であるが、立地条件を反映してか東が高く西が低く、底面が凸凹である。焼土や炭化物が認められなかった。遺物は出土していない。

10 土坑 (第 15 図) 長径 2.1 m、短径 0.7 m、深さ 0.15 mをはかる。長円形の土坑である。断面形は皿形であるが、立地条件を反映してか東が高く西が低い。10 土坑のみ、他の土坑とやや離れた位置で検出され、主軸の方向も北東-南西と他土坑と異なる。埋土も粘質土で、焼土や炭化物が認められなかった。遺物は出



第14図 1区第2面遺構平・断面図(1)





10 土坑

9土坑

T.P.+218.5m

Е

1区第2面遺構平・断面図(2) 第15図

T.P.+218.3m

S

1 10YR6/3 にぶい黄橙シルトに炭化物径 1 cm含む
 5YR4/8 赤褐シルト (焼土)
 10YR3/1 黒褐シルト (炭化物)

1m

マンガンを含有し、赤っぽく見える範囲 [焼土層]

炭化物を含む範囲 [炭化物層]

(1:20)

N



第16図 2区第3面平面図

土していない。

2区第3面の遺構(第16図、写真図版4)

1区と東辺を接する 2区は X = -123,785 以北は調査対象でないため、1区の 3分の 2程度の面積である。南北中心、Y = -42,240 付近で既存の水路によって分断され、大きくは上下の 2段に分かれる。

下段にあたる西半部は、2層を除去すると褐灰色シルト層の3層が全体に広がる。1区東端から急激に落ち込む谷地形となり、2区でより広がったためこの谷に厚く3層が堆積していると考えられる。

上段も X=-123,810 以南では下段と同様の褐灰色シルト層が堆積している。上層を掘削すると X=-123,810 線上で、西から東に伸び、途中で屈曲して南北に伸びる 229 石列を検出した。229 石列の内側にも、人頭大の石が集積する箇所が検出された。

上段の X = -123,810 以北の部分が 1 区から次第に下降して来て、地山が露出する部分にあたる。 3 層でもマンガンが多く含まれる層を除去して検出したのが第 3 面である。

2区上段中心の Y=-42,230 付近になると急激に下降する谷の始まりとなる。この区域で 212 土坑から 222 土坑と自然石や岩を検出した。なかでも 215 土坑は縄文時代中期末の土器が集積した状態で検出され(第 18 図)、意図的に埋納された遺構と考えられる。

215 土坑やその周辺の出土遺物から判断すると、2区第3面は縄文時代の遺構面となる(第 $61\sim63$ 図)。ただし、229 石列やこれより南や西は、3層が褐灰色シルト層となる。ここから出土する遺物は縄文土器はほぼない。わずかに弥生土器なども含むものの、多くは中世から近世の遺物である(第57図)。

従って、2区の第3面は北東部の縄文時代と考えられる 土坑群を検出した区域、遺構面と、それ以外の中世以降と 考えられる区域、遺構面と、区域により2つの時期が混在 しているといえる。個々の遺構については以下で検討を加 える。

229 石列 (第 17 図、写真図版 7) 2 区の東南部、X = - 123,808 より南で検出した。約 5 mは東西の段差に続いて、西を中心とする円が孤を描くように南に伸びていく石



第17図 2区第3面229石列平•立面図

列で、全長は 20 m以上に及ぶ。

南端は調査区南辺の側溝で分断されるため、実際にはさらに続くと思われる。

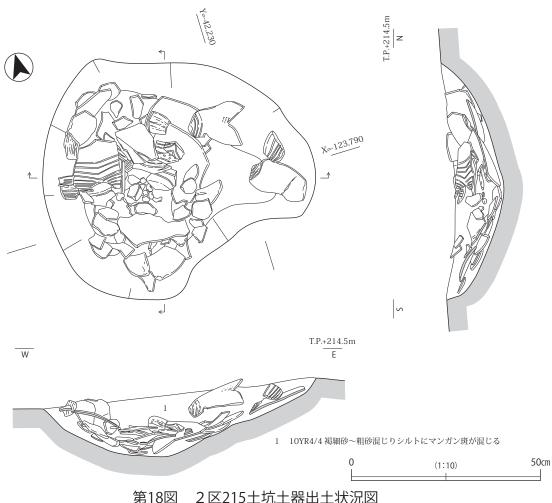
229 石列は小石、礫から握りこぶし大、人頭大のものまで、様々な大きさの花崗岩系の自然石を集積して 幅 1.0 m、高さ 0.5 m弱の堤状の遺構を構築する。石列の上面、下面ともほぼ水平である。229 石列の石は 切り出したり、加工したりした痕跡は認められず、周辺の丘陵地から滑落した自然石か、付近の地山中に存 在した自然石の集積と考える。

229 石列より西の、円弧より内側の部分では褐灰色シルト層が厚く堆積し、東から西に下降していく。従っ て、229 石列はこの窪みとも池ともいえる区域と、東の比較的地盤が安定した区域との境界を示すか、護岸 的用途をもつ遺構といえる。229 石列の内側、X = - 123.814 ライン上でも東西 2 m、南北 1 mの範囲にわたっ て自然石が20~30個集積した遺構を検出したが、用途や性格は不明である。

229 石列は窪み部分から出土する遺物が瓦器や陶器であることから類推すると、中世前半の13世紀から 14世紀、あるいはそれ以降の遺構と考えられる。

215 土坑 (第 18 図、写真図版 5 ・ 7) 2 区の北東部、上段で検出した土坑である。212 土坑から 217 土 坑はこの区域に密集して検出された。215 土坑は地山が急激に下降する平坦部ぎりぎりで検出した。

長径 0.7 m、短径 0.6 m、深さ 0.15 mをはかる。南東部がえぐれた不整円形の土坑である。断面形は皿形 である。マンガン層上面では遺構が判別しにくかったため、実際はさらに上層から掘り込まれた土坑で、直径、 深さともさらに大きかった可能性が高い。これは周辺の他の土坑、213 土坑などと比較しても平面形が小さ



いことからも推測できる。

埋土は単一な層なので、一時で堆積したと考えられる。上層のマンガン粒混じりの褐色で砂質が強い細砂からシルト層である。

この土坑からは、第 18 図のように縄文土器の破片が多数積み重なるような、集積した状態で出土した。出土土器を復元したところ、少なくとも 5 個体以上の縄文土器深鉢が確認された(第 61・62 図、写真図版 30~33)。しかしながら、最も復元できた個体(81)でも、口縁部付近と胴部の一部しか揃わず底部は存在しない。他の個体も口縁部、もしくは口縁部付近から胴部の途中までの破片である。また、検出状況からも土器口縁部が一定方向を示したり、放射状に広がってはない。つまり、直立や倒立していた土器が埋納後に土圧で潰れた状況ではない。破損した土器をこの土坑に集めて廃棄したと考えた方が妥当だろう。

215 土坑より出土した縄文土器は、すべて縄文時代中期末、北白川 C 式の深鉢である。215 土坑は縄文時代中期末に特定される点からも、遺物の残存状況の良さからも、きわめて良好な一括資料といえる。

周辺の土坑からは時期を特定できる遺物が出土しておらず、他の土坑との関連性は不明である。周辺の包含層中からは縄文時代中期末以前に遡る、縄文時代早期末から前期初頭の土器も出土している。よって、この周辺の2区北東部区域は縄文時代早期末から中期末までの長期間機能していたと考えられる。

212 土坑 (第 19 図) 直径 0.9 m、深さ 0.3 mをはかる。円形の土坑と思われるが、北側 3 分の 1 は調査 区外にある。断面形は椀形で、上層のマンガン粒を含む 3 層が水平に堆積していた。遺物は出土していない。

213 土坑(第 19 図) 長径 1.8 m、短径 1.2 m、深さ 0.1 mをはかる。長円形の土坑である。断面形は皿形である。径に比して深さが浅いので、実際はもっと上から掘り込まれていた可能性がある。遺物は出土していない。

214 土坑 (第 19 図) 直径 0.4 m、深さ 0.1 mをはかる。円形の土坑である。断面形は皿形である。213 土坑に近接する。遺物は出土していない。

216 土坑 (第 19 図) 調査区の北東端、2 区の最上段に位置する。直径 1.3 m、深さ 0.2 mをはかる。南西端がくぼんだ不整円形の土坑で、断面形は椀形である。217 土坑に近接する。遺物は出土していない。

217 土坑 (第 19 図) 調査区の北東端、2 区の最上段に位置する。直径 0.25 m、深さ 0.05 mをはかる。 ごく小形の円形土坑で、断面形は皿形である。216 土坑西側に近接する。遺物は出土していない。

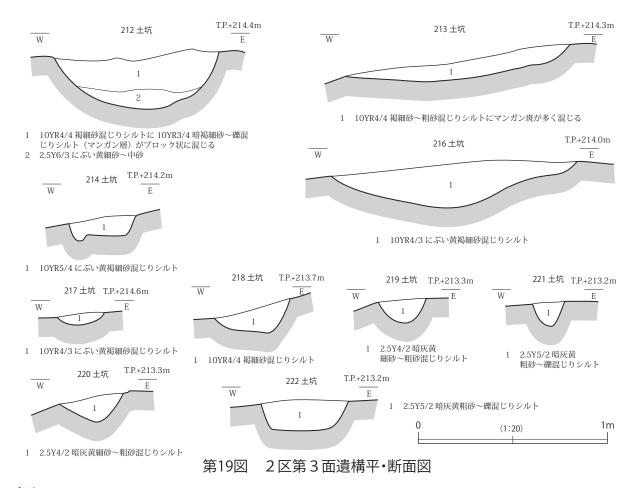
218 土坑 (第 19 図) 2 区の上段から 2 段目に位置する。直径 0.4 m、深さ 0.1 mをはかる。ごく小形の円形土坑である。断面形は椀形である。遺物は出土していない。

212 土坑から 218 土坑に関しては、検出位置から縄文時代の遺構と推測する。

219 土坑~222 土坑(第 19 図) 219 土坑から 222 土坑は 2 区の Y = -42,240 付近を通る側溝より西側、2 区の下段に位置する土坑である。西端に側溝に沿うように南北に並ぶ。219 土坑は、直径 $0.2~\mathrm{m}$ 、深さ $0.1~\mathrm{m}$ をはかる。ごく小形の円形土坑である。断面形は椀形である。220 土坑は直径 $0.3~\mathrm{m}$ 、深さ $0.1~\mathrm{m}$ をはかる。が下の円形土坑である。断面形は椀形である。221 土坑は直径 $0.15~\mathrm{m}$ 、深さ $0.1~\mathrm{m}$ をはかる。ごく小形の円形土坑である。断面形は椀形である。222 土坑は直径 $0.5~\mathrm{m}$ 、深さ $0.15~\mathrm{m}$ をはかる。円形土坑である。断面形は焼形である。がずれも遺物は出土していない。

219 土坑から 222 土坑に関しては、出土遺物がないため時期決定の決め手を欠く。しかし、検出位置が下段部で、埋土が灰色系シルトであることから、229 石列などと相関する、中世の遺構と推測する。

2区の第5面を地山まで検出した遺構面とすると、第3面から第5面の間は、3層を少しずつ掘削し遺構 を検出することを繰り返したため生じた遺構面であるので、第3面から第5面は近接した時期幅の中におさ



まる。

第2項 1区第3面·2区第5面(第20~27 図、写真図版1·2、5·6)

1区では3層をすべて掘削し、調査区の一部をのぞき広範囲で地山を検出した。これを第3面、最終遺構面として、航空測量を実施した。その後、 $X=-123,780\sim-123,790$ 、Y=-42,220 付近の限られた範囲を掘り下げて遺構(71 ピット)を検出したため、第4面とした。第4面は第3面で掘削深度が不十分だったところを確認したもので、本書では第4面も第3面に含めて報告する。

2区も東半の上段北側では地山を検出した。1区同様に東から西への傾斜はさらにきつくなる。また、谷に埋積する褐灰色シルトをさらに掘削すると、下段では土坑や溝(流路)などを検出した。ただし、一部の範囲、つまり上段南側や下段では地山までの検出に至っていない。が、アゼ断面の観察により、第5面より約1m下がった T.P. + 212.0 m前後が地山と考えられる。

2区は第5面を最終遺構面として、航空測量を実施した。1区第3面と2区第5面は遺構を数多く検出し、 出土遺物の時期から縄文時代を中心とする遺構面と考えられる。

1区第3面の遺構(第21図、写真図版2)

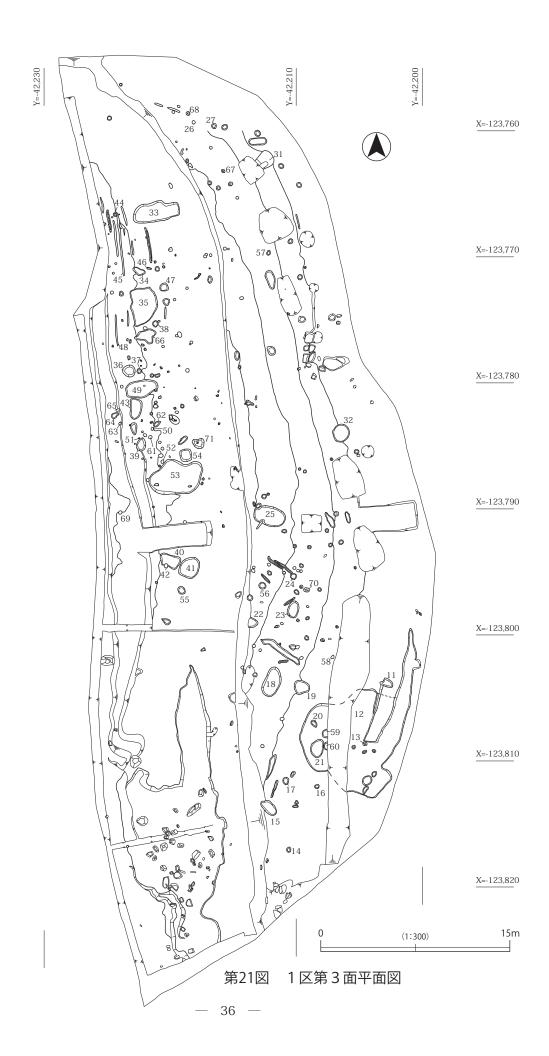
第3面では東から西への傾斜がさらに強くなる。最も高い東南端では T.P. + 218.6 mだが、最も西端中央では T.P. + 215.3 mと 3 m以上の比高差をもつ。調査区の広範囲から土坑、ピット、溝など約 60 の遺構が検出された。なかでも、X=-123,800 以北、 $Y=-42,220 \sim -42,230$ の範囲では遺構が密集する。

遺構・包含層から出土した遺物は主に縄文時代のものである(第59・60図)。よって、1区第3面は縄文時代の遺構面と考えられる。

12 落込み(第22 図) 調査区の南東端に大きく広がる不整形の落込みである。不揃いの円形状から北側の



第20図 1区第3面・2区第5面平面図



み靴形の溝が延びるような形状をとる。円形状部での最大幅 $8.0~\mathrm{m}$ 、深さ $0.25~\mathrm{m}$ をはかる。 $12~\mathrm{\ddot{R}}$ ち込みの中に $13 \cdot 20 \cdot 21 \cdot 59 \cdot 60~\mathrm{ピットが存在する}$ 。

60 ピット・59 ピット (第 22 図) 12 落込みの中にある。撹乱で東約半分は欠損する。60 ピットは直径 0.6 m、深さ $0.05\sim0.15$ mをはかる。円形で、断面形は皿形である。遺物は出土していない。

59 ピットは直径 0.7 m、深さ 0.4 mをはかる。円形である。断面形は逆台形であるが、底面の凹凸が著しい。 遺物は出土していない。

21 ピット・20 ピット(第 22 図) 12 落込みの中にあり、互いに接する。21 ピットは直径 0.7~m、深さ 0.4~mをはかる。長円形で、断面形は椀形である。遺物は出土していない。20 ピットは直径 0.4~m、深さ 0.3~mをはかる。長円形で、断面形はU字形である。遺物は出土していない。

13 ピット(第 22 図) 12 落込みの中にある。直径 $0.3~\mathrm{m}$ 、深さ $0.1~\mathrm{m}$ をはかる。小形の円形土坑である。断面形は皿形である。遺物は出土していない。

11 土坑(第22図) 12 落込みの北側にある。直径 0.3 m、深さ 0.1 mをはかる。不整円形の土坑である。 断面形は逆台形である。遺物は出土していない。

18 土坑 (第 22 図) 12 落込みの北西部、1段下がった段にある。長径 2.1 m、短径 1.35 m、深さ 0.15 mをはかる。楕円形の土坑である。断面形は皿形である。遺物は出土していない。

19 土坑(第22図) 12 落込みの北西、1段目と2段目の段の境界線上にある。そのため当遺構も傾斜が激しい。長径1.1 m、短径1.0 m、深さ0.1 mをはかる。不整円形の土坑である。断面形は皿形である。遺物は出土していない。

58 ピット(第 22 図) 12 落込みや 19 土坑の北側にある。直径 0.15 m、深さ 0.3 mをはかる。ごく小形の円形である。断面形は U字形である。遺物は出土していない。

17 土坑 (第 22 図) 12 落込みの南西にある。直径 0.45 m、深さ 0.4 mをはかる。長円形の土坑である。 断面形は逆台形である。遺物は出土していない。

16 ピット(第 22 図) 12 落込みの南にある。直径 0.4 m、深さ 0.05 mをはかる。ごく小形の円形である。断面形は皿形である。遺物は出土していない。

14 ピット(第 22 図) 16 ピットの南、調査区の南端にある。直径 $0.35~\mathrm{m}$ 、深さ $0.05~\mathrm{m}$ をはかる。ごく 小形の円形である。断面形は皿形である。遺物は出土していない。

15 土坑 (第 22 図) 14 ピットの北西にある。長径 1.8 m、短径 0.75 m、深さ 0.15 mをはかる。長円形の土坑である。断面形は皿形である。遺物は出土していない。

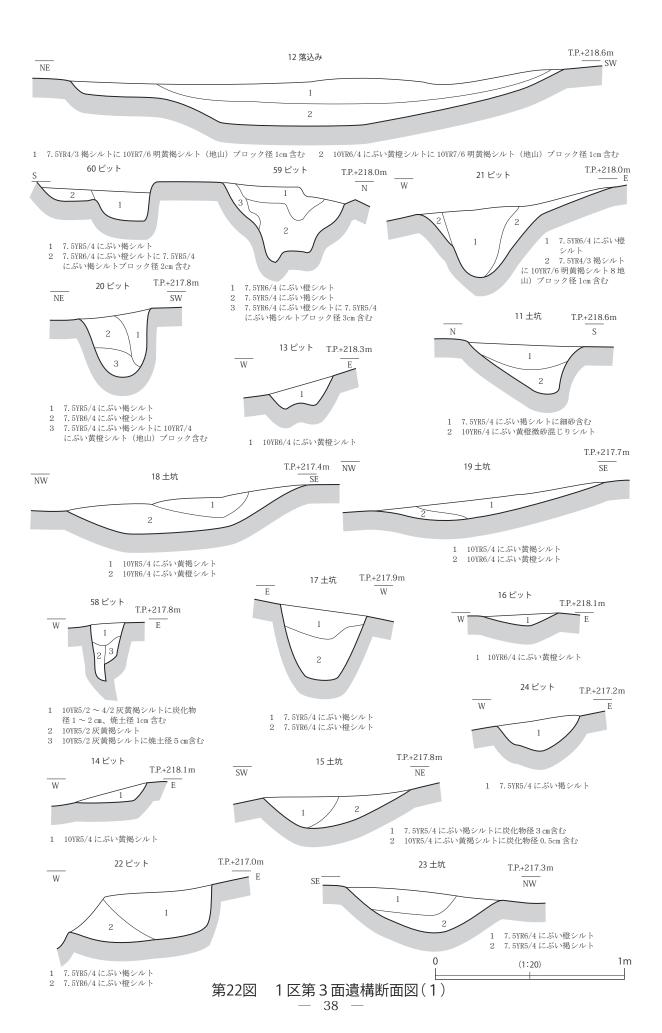
24 ピット (第 22 図) $X = -123,790 \sim -123,800$ の間、2 段目の段上にある。直径 0.4 m、深さ 0.15 mをはかる。小形の円形である。断面形は椀形である。遺物は出土していない。

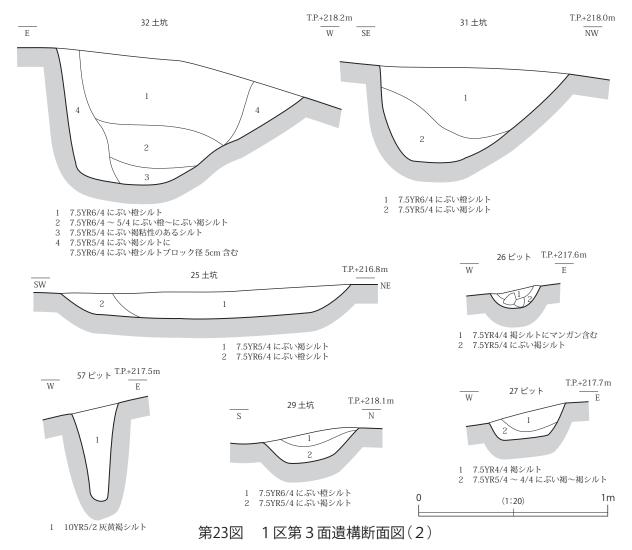
22 ピット (第 22 図) 3段目の段上にあり西半は後世の棚田造成の際に切られる。短径 0.8 m程度、深さ 0.25 mをはかる。東西に長い長円形と思われる。断面形は逆台形で、遺物は出土していない。

23 土坑 (第 22 図) 2 段目の段上、22 ピットの東にある。長径 1.2 m、短径 0.8 m、深さ 0.2 mをはかる。 南北に長い長円形の土坑である。断面形は椀形である。遺物は出土していない。

32 土坑 (第 23 図) X = -123,784、Y = -42,207 付近に存在する。32 土坑のみが他の遺構から離れた、1段目中央に存在している。直径 $1.3 \, \text{m}$ 、深さ $0.7 \, \text{m}$ をはかる。大形の円形土坑である。断面形は逆台形である。側面には裏込の土が堆積し、中心には $3 \, \text{層が水平堆積する}$ 。遺物は出土していない。

31 土坑(第23 図) 調査区の北東端にある大形の土坑である。長径 1.2 m、短径 1.0 m、深さ 0.5 mをはかる。





隅丸方形の土坑だが、撹乱で西側を切られる。断面形は深い椀形で、遺物は出土していない。

25 土坑 (第 23 図) 調査区の中央西端に位置する。長径 2.6 m、短径 1.6 m、深さ 0.15 mをはかる。東西に長い長円形である。断面形は皿形である。遺物は出土していない。

26 ピット (第 23 図) 調査区の北東端にある。直径 0.25 m、深さ 0.1 mをはかる。ごく小形の円形である。 断面形は椀形である。 遺物は出土していない。

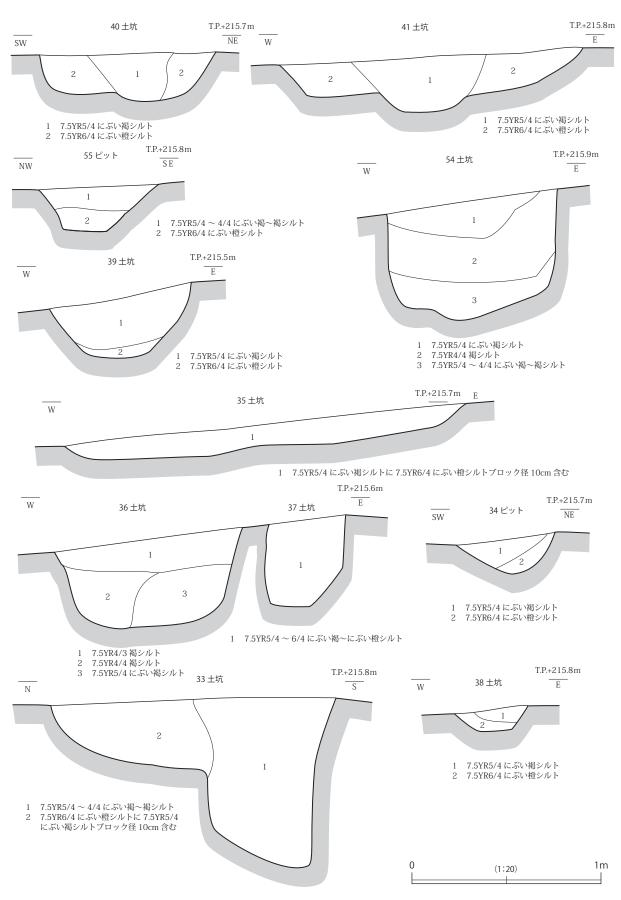
57 ピット (第23 図) 調査区の北部にある。直径 0.25 m、深さ 0.5 mをはかる。ごく小形の円形である。 断面形は U字形で、直径に対して深いのが特徴である。遺物は出土していない。

29 土坑(第23 図) 調査区の北東端、31 土坑の北に位置する。長径 1.2 m、短径 0.5 m、深さ 0.15 mをはかる。 東西に長い隅丸方形の土坑で、東西軸がほぼ真方位をとる。断面形は皿形である。遺物は出土していない。

27 ピット (第 23 図) 調査区の北東端にある。直径 $0.4~\mathrm{m}$ 、深さ $0.1~\mathrm{m}$ をはかる。ごく小形の円形である。断面形は逆台形である。遺物は出土していない。

40 土坑(第 24 図) 調査区の 2 段目中央、 $X=-123,790\sim-123,800$ 間に位置する。長径 1.8 m、短径 1.0 m、深さ 0.35 mをはかる。南東一北西に長軸をとる隅丸方形の大形土坑だが、42 ピットによって南側を切られる。断面形は深い椀形である。遺物は出土していない。

41 土坑(第 24 図) 調査区の 2 段目中央、 $X=-123,790\sim-123,800$ 間の 40 土坑の東に位置する。 長径 $1.9~\mathrm{m}$ 、短径 $1.7~\mathrm{m}$ 、深さ $0.3\sim0.4~\mathrm{m}$ をはかる。不整円形の大形土坑である。断面形は皿形で、中心だ



第24図 1区第3面遺構断面図(3)

けがさらに下がる。石鏃が出土した(第58図)。

55 ピット(第 24 図) 調査区の 2 段目中央、 $X=-123,790\sim-123,800$ 間、41 土坑の南に位置する。直径 $0.5~\mathrm{m}$ 、深さ $0.25~\mathrm{m}$ をはかる。円形で、断面形は逆台形である。遺物は出土していない。

39 土坑(第 24 図) 調査区の 2 段目中央、 $X = -123,780 \sim -123,790$ 間に位置する。長径 1.0 m、短径 0.8 m、深さ 0.45 mをはかる。南北に長軸をとる不整円形の土坑である。断面形は深い椀形である。遺物は出土していない。

54土坑(第 24 図) 調査区の 2 段目中央、 $X=-123,780 \sim -123,790 間、<math>53$ 土坑の北に位置する。長径 1.0 m、短径 0.8 m、深さ 0.65 mをはかる。隅丸方形の土坑である。断面形は深い U字形である。遺物は出土していない。

35 土坑(第 24 図) 調査区の 2 段目北側、 $X = -123,770 \sim -123,780$ 間に位置する。長径 2.8 m、短径 2.2 m、深さ 0.1 mをはかる。不整形の土坑である。断面形は浅い皿形である。遺物は出土していない。

36 土坑・37 土坑(第 24 図) 調査区の 2 段目北側、 $X=-123,770 \sim -123,780$ 間に位置する。互いに接する。36 土坑は直径 1.0 m、深さ 0.5 mをはかる。ほぼ円形の土坑である。断面形は深い U 字形である。遺物は出土していない。37 土坑は直径 0.4 m、深さ 0.4 mをはかる。小形の円形土坑である。断面形は深い U 字形である。遺物は出土していない。

34 ピット(第 24 図) 調査区の 2 段目北側、 $X=-123,770\sim-123,780$ 間に位置する。35 土坑の北側にある。長径 0.6~m、短径 0.4~m、深さ 0.2~mをはかる。ほぼ円形の土坑である。断面形は椀形である。 遺物は出土していない。

33 土坑(第 24 図) 調査区の 2 段目の最北端、 $X=-123,760 \sim -123,770$ 間に位置する。長辺 3.8 m、短辺 1.6 m、深さ $0.35 \sim 0.9$ mをはかる。東西に長軸をとる隅丸長方形の土坑である。断面形は西半が浅い 椀形であるのに対し、東半は深い U字形を呈する。東半が西半を切るような断面形を呈するので、元来は 2 つの遺構だったのを 1 つの遺構として検出した可能性もある。遺物は出土していない。

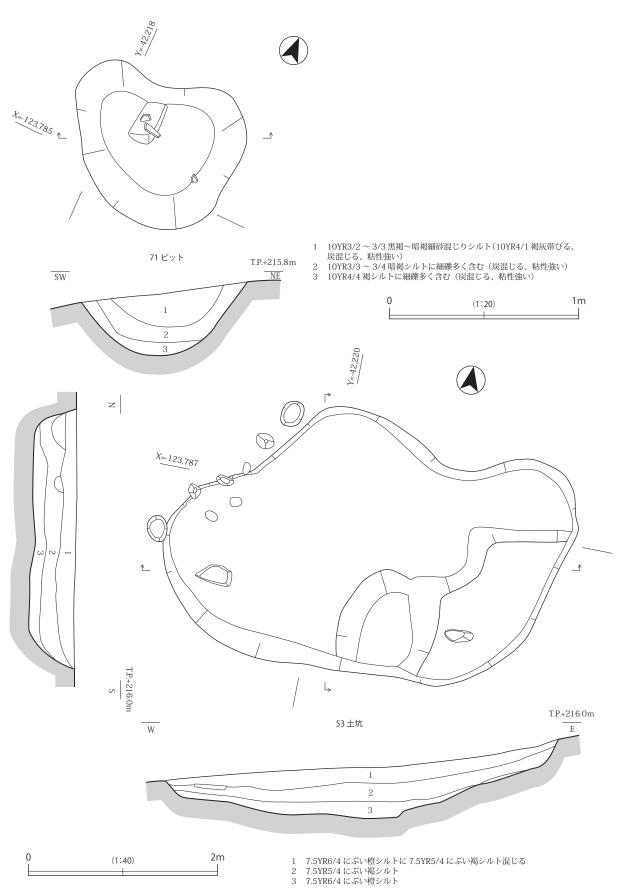
38 土坑(第 24 図) 調査区の 2 段目北側、 $X = -123,770 \sim -123,780$ 間、35 土坑の南東にある。直径 0.4 m、深さ 0.1 mをはかる。ほぼ円形の土坑で、断面形は皿形である。遺物は出土していない。

71 ピット (第 25 図、写真図版 2) 調査区の 2 段目中央、 $X = -123,780 \sim -123,790$ 間に位置する。 71 ピットの周辺のみ 3 層の堆積が厚かったため、南北 10 m、東西 1、 2 mの区域を第 3 面検出後に再掘削した結果、71 ピットを検出した。従って、71 ピットは 1 区第 3 面の中で最も下位に位置する遺構といえる。

長径 0.95 m、短径 0.7 m、深さ 0.3 mをはかる。北西 – 南東に長軸をとり、北西隅が細くなる不整形である。 断面形は椀形である。埋土はピットの形状に沿うように、中心が低く周りが高く 3 層が累層的に堆積していた。 下層は炭混じりとなっており、経年堆積したと考えられる。

71 ピットからは遺物が数点出土している。いずれも細片だが、押し引き沈線をもつ縄文時代早期末から前期初頭の縄文土器や、縄文時代中期末の深鉢口縁部などが含まれる(第59 図、写真図版33)。時期幅があるが、71 ピットは縄文時代中期末以前の遺構と断定できる。

53 土坑(第 25 図、写真図版 2) 調査区の 2 段目中央、 $X=-123,787 \sim -123,790$ 間に位置する。長径 2.1 m、短径 1.4 m、深さ 0.25 mをはかる。東西に長軸をとる不整形の土坑で、南東部は段をもちくぼむ。断面形は浅い椀形もしくは皿形である。埋土は 3 つの層に分層できるがいずれも 3 層に類似し、水平に堆積する。縄文時代早期末から前期初頭の土器胴部片が出土している(第 59 図、写真図版 33)。53 土坑は縄文時代早期末から前期初頭の遺構と考えられる。71 ピット、53 土坑に位置的に近い 49 土坑、52 ピットからも縄文



第25図 1区第3面遺構平・断面図



第26図 2区第5面平面図

土器が出土している(第59図、写真図版30)。

以上のように、1区第3面ではいくつかのまとまりをもって、遺構が多数検出された。遺物が出土するのは中央部に集中し、時期は縄文時代早期末から中期末に限定される。よって、縄文時代の遺構面とする。

2区第5面の遺構(第26図、写真図版5・6)

第5面では高い部分の北東部から中央にかけての掘削をさらに進め、地山を検出した。その結果、東から西への傾斜がさらに強くなる。最も高い東端中央では T.P. + 214.7 mだが、最も低い西南端では T.P. + 213.2 mである。調査区の高い区域から土坑、ピットなどを検出した。また、西南部のシルト層をさらに掘削したところ 230 溝(自然流路か)を検出した。2区の第5面も第3面と同じく西南部は中世以前、北東部から中央にかけては縄文時代の遺構面と考える。

223 土坑(第 27 図) 調査区の東側、X=-123,795、Y=-42,232 に位置する。直径 0.4 m、深さ 0.1 mをはかる。小形の円形土坑である。断面形は皿形である。遺物は出土していない。

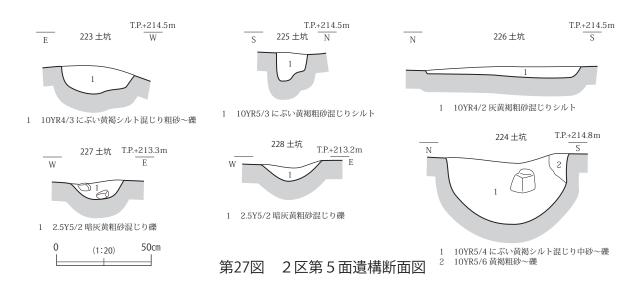
225 土坑(第 27 図) 調査区の最北に位置する。直径 $0.15\,\mathrm{m}$ 、深さ $0.15\,\mathrm{m}$ をはかる。ごく小形の円形である。 断面形は U字形である。遺物は出土していない。

226 土坑(第 27 図) 調査区の北部、225 土坑より 7 m南下して位置する。直径 0.8 m、深さ 0.05 mをはかる。円形土坑で東側は調査区外にある。断面形は皿形である。遺物は出土していない。

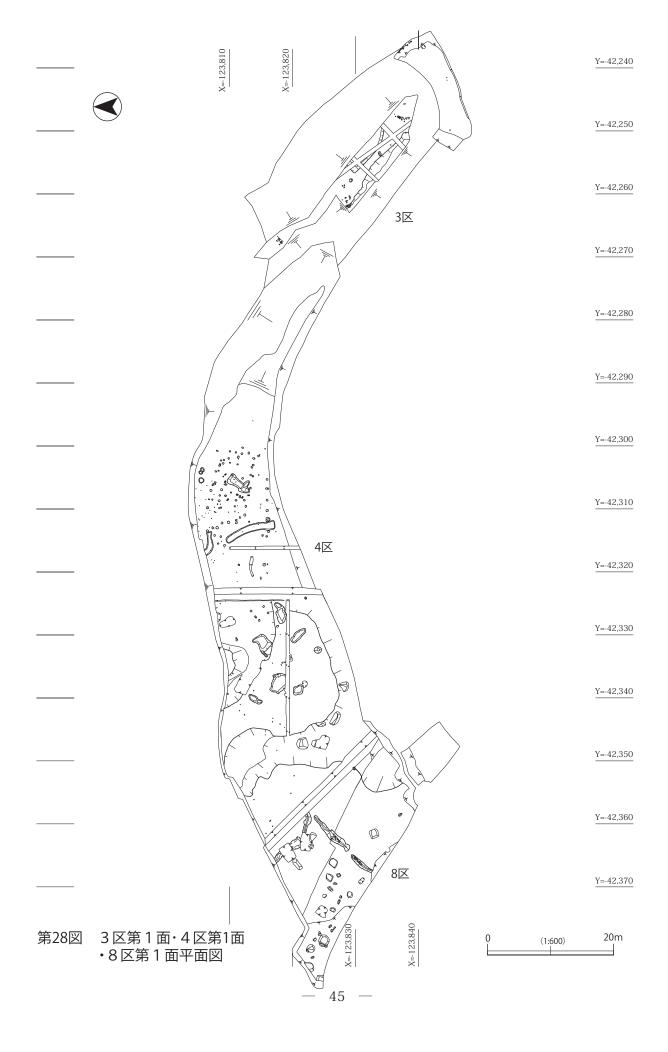
227 土坑・228 土坑(第 27 図) 調査区の下段中央、X=-123,800 付近に位置する。互いに接する。 227 土坑は直径 0.25 m、深さ 0.1 mをはかる。小形の円形土坑である。断面形は皿形である。遺物は出土していない。 228 土坑は直径 0.3 m、深さ 0.05 mをはかる。小形の円形土坑である。断面形は皿形である。遺物は出土していない。

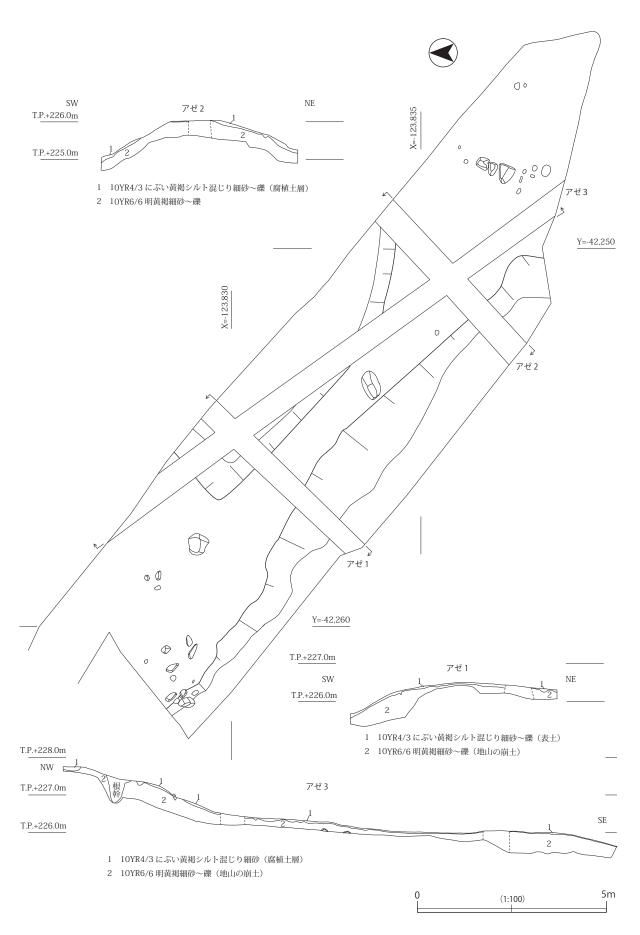
224 土坑(第 27 図) 調査区の東端中央、X = -123,799 付近に位置する。長径 0.8 m、短径 0.4 m、深さ 0.3 mをはかる。円形土坑で東側は調査区外にある。断面形は椀形である。遺物は出土していない。

230 溝(第 26 図) 調査区の南西隅を東から西に流れる溝である。蛇行するように伸びるので、人為的な溝というより自然流路と考えた方がよいかもしれない。調査区外の南側に水源があったのだろうか。長さ 16 m、幅 2.8 m、深さ 0.5 mをはかる。遺物が出土せず、中世以前の遺構としか推測できない。



— 44 —





第29図 3区第1面上段平面図・アゼ断面図

第2節 中央部(3~8区、13区)の遺構

第1項 3区第1面・4区第1面・8区第1面(第28~36図、写真図版8~11)

中央部とは第2章で調査区を大きく東部、中央部、西部と3つに分けた分け方を踏襲し、3区、4区、5区、6区、7区、8区、13区を指す。

中央部はさらに細分できる。東部と中央部を隔てる山の頂部の3区は独立している。その山の山裾から西に広がる丘陵部が4区で、4区の西端から落ちる谷部分が8区である。4区と8区は遺構のつながりから連続した区域と捉えた。4区の南の谷にあたるのが5区と6区である。さらにその南、谷から南側の山にあがる丘陵部が7区である。この小単位で遺構面、遺構の説明を行う。13区は8区の東、5・6区と7区に挟まれた位置で、遺構のつながり具合に応じて5・6区と7区のどちらかで説明する。

3区第1面の遺構(第29図、写真図版8)

3区は1・2区と4区に挟まれた山部にあたる。当初は、この山のほとんどが調査区として設定されていたが急峻で安全管理上、山頂部の主に東側と、調査区東端平坦部の2箇所のみに調査範囲を狭めた。

山頂部は東半が幅5m、長さ20m、面積にして約100㎡である。東半に東西方向に1本、南北方向に2本のアゼを設定して、表土を徐々に掘削することとした。西半は幅2m程度で面積が狭いため、アゼは設定せずに北端の設置柵のための壁を利用して断面観察を行い、表土を掘削した。

山頂部西半は T.P. $+225.0 \sim 228.0 \text{ m}$ の高さで西から東に下降する地形をとる。急峻なため堆積は進まず、 $0.2 \sim 0.5 \text{ m}$ 掘削すると地山が露出した。堆積していたのは地山が崩れ風化した花崗岩のバイラン土である。 北側や南側へ傾斜していく自然地形や自然石などが検出されたが、顕著な遺構は検出できなかった。

東端の平坦部では機械掘削を終えると灰色シルト層(3層上面)の遺構面に相当する面が検出された。石垣を造成した際の撹乱などを南北両端にもつが、顕著な遺構はみあたらなかった。平面の高さは、およそ T.P. + 219.7 \sim 219.9 mである。

遺物は緑釉陶器片(第64図・写真図版36-104)と瓦器片のみである。そのため時期は決定しがたい。

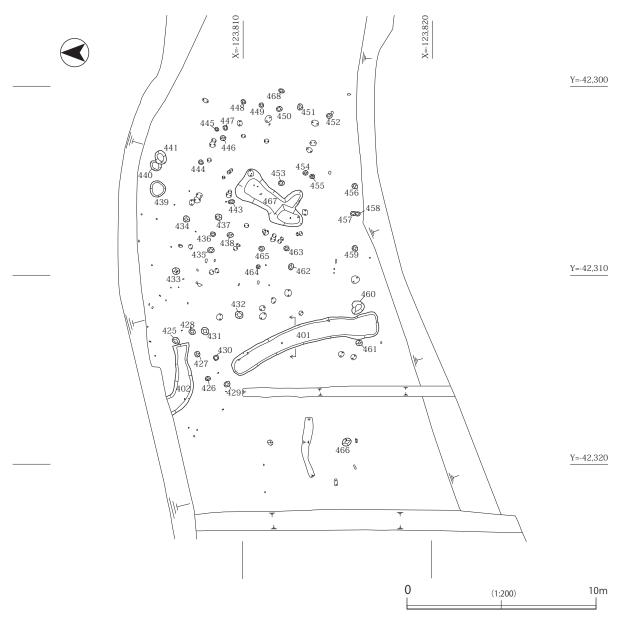
4区第1面の遺構(第30~36 図、写真図版9・10)

4区は東西に細長い調査区である。およそ $Y=-42,268\sim-42,374$ 間の 106m にわたって東西に広がる。南北幅は東が狭く、西が広い。最小幅が約8 m、最大幅が 24 mである。東端から 3 分の 1 、約 30 mの東部は 3 区を山頂とする山裾が広がってきていて、地山がすでに露出している。従って、調査はそれより西に限定して行った。

 $Y = -42,300 \sim -42,355$ の区域を中央部とし、これをさらに、Y = -42,324 ラインで設けた南北アゼ を境に堆積状況が変わることから中央東部、中央西部とした。Y = -42,355 より東は谷地形となり、8 区 につながる。これを西部とする。中央部では2 面、西部では4 面と各区域によって調査遺構面数が異なるが、本報告では整理して2 遺構面として報告する。第2 面で航空測量を実施した。

機械掘削終了時の高さは中央東部で T.P. + 222.9 m、中央西部で T.P. + 222.9 ~ 223.7 m、西部で T.P. + 221.5 mである。調査区中央東部では溝、土坑、ピットなどを 2 面にわたって多数検出した。

401 溝(第 31 図) $X = -123,810 \sim -123,817$ 、Y = -42,313 付近で検出した。長方形の溝だが、やや湾曲する。長さ 8.0 m、幅 1.1 m、深さ 0.2 mをはかる。断面形は皿形で、埋土はシルトがブロック状に含まれており、人為的な埋め戻しがあったことがうかがえる。遺物は出土していない。中央東部の遺構群が一連の関係をもつ柱穴、柵列などならば、この 401 溝が西端を区画する溝と考えられる。

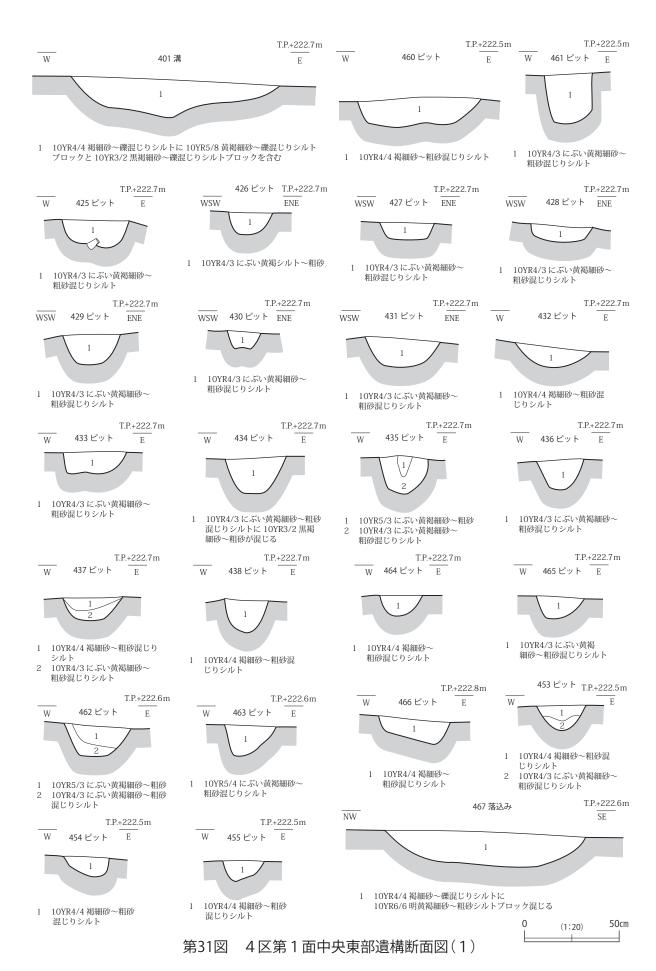


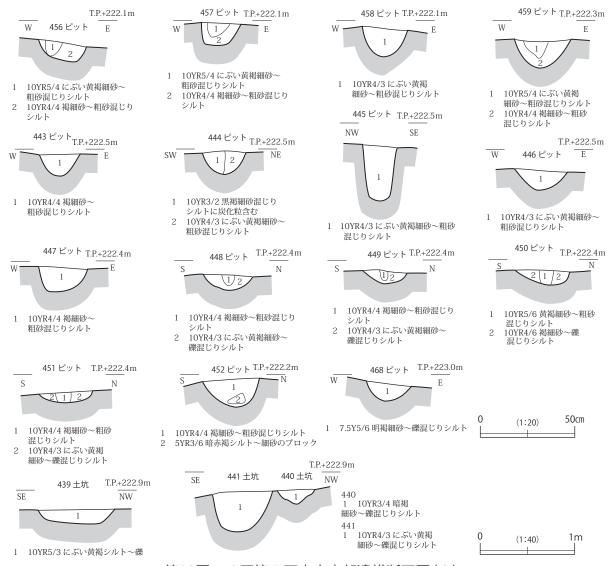
第30図 4区第1面中央東部平面図

460 ピット・461 ピット(第 31 図) 460 ピットは 401 溝の南東端に隣接する不整円形のピットである。 直径 $0.65~\mathrm{m}$ 、深さ $0.15~\mathrm{m}$ をはかる。 断面形は逆台形である。 遺物は出土していない。 461 ピットは 401 溝の南西端に隣接する小形の円形ピットである。 直径 $0.25~\mathrm{m}$ 、深さ $0.25~\mathrm{m}$ をはかる。 断面形は U字形である。 遺物は出土していない。

425 ピット・428 ピット・431 ピット(第 31 図) 調査区の北端、402 溝の東端に位置する。425 ピットは不整円形のピットである。直径 $0.35\,\mathrm{m}$ 、深さ $0.15\,\mathrm{m}$ をはかる。断面形は椀形である。遺物は出土していない。428 ピットは円形のピットである。直径 $0.3\,\mathrm{m}$ 、深さ $0.1\,\mathrm{m}$ をはかる。断面形は皿形で、遺物は出土していない。431 ピットは 402 溝の南東端に位置する。小形の円形ピットである。直径 $0.4\,\mathrm{m}$ 、深さ $0.15\,\mathrm{m}$ をはかる。断面は椀形である。遺物は出土していない。

426 ピット・427 ピット(第31 図) 426 ピットは調査区の北端、401 溝と 402 溝の間に位置する。円形のピットである。 直径 0.2 m、深さ 0.1 mをはかる。 断面形は椀形である。 遺物は出土していない。 427 ピットは 426 ピットの北東に位置する。 円形のピットである。 直径 0.25 m、深さ 0.1 mをはかる。 断面形は逆台形で





第32図 4区第1面中央東部遺構断面図(2)

ある。遺物は出土していない。

429 ピット (第 31 図) 401 溝の北西端に位置する。小形の円形ピットである。直径 0.3 m、深さ 0.15 m をはかる。断面形は椀形である。遺物は出土していない。

430 ピット (第 31 図) 401 溝の北東端に位置する。小形の円形ピットである。直径 $0.2~\mathrm{m}$ 、深さ $0.1~\mathrm{m}$ をはかる。断面形は逆台形である。遺物は出土していない。

432 ピット(第 31 図) 402 溝の南東端に位置する。X=-123,810、Y=-42,312 で検出した。小形の円形ピットである。直径 $0.4~\mathrm{m}$ 、深さ $0.15~\mathrm{m}$ をはかる。断面形は椀形である。遺物は出土していない。

435 ピット・436 ピット・437 ピット・438 ピット(第 31 図) 435 ピットは X = -123,808、Y = -42,309 で検出した。小形の円形ピットである。直径 0.3 m、深さ 0.2 mをはかる。断面形は椀形である。436 ピットは 435 ピットの北に位置する。円形のピットである。直径 0.25 m、深さ 0.15 mをはかる。断面形は椀形である。437 ピットは 436 ピットの東に位置する。円形のピットである。直径 0.3 m、深さ 0.1 mをはかる。断面形は皿形である。いずれも遺物は出土していない。438 ピットは 437 ピットの南西に位置する。円形のピットである。直径 0.2 m、深さ 0.15 mをはかる。断面形は椀形である。遺物は出土していない。

433 ピット (第31 図) X = -123,807、Y = -42,310 で検出した。小形の円形ピットである。直径 0.3

m、深さ 0.1 mをはかる。断面形は椀形である。遺物は出土していない。

434 ピット (第 31 図) X = -123,809、Y = -42,307 で検出した。小形の円形ピットである。直径 0.35 m、深さ 0.2 mをはかる。断面形は椀形である。遺物は出土していない。

464 ピット・465 ピット(第 31 図) 464 ピットは X=-123,811、Y=-42,310 で検出した。小形の円形ピットである。直径 0.2 m、深さ 0.1 mをはかる。断面は椀形である。遺物は出土していない。465 ピットは 464 ピットの東に位置する。円形のピットである。直径 0.25 m、深さ 0.1 mをはかる。断面形は椀形である。遺物は出土していない。

462 ピット・463 ピット(第 31 図) 462 ピットは 464 ピットの南に位置する円形のピットである。直径 0.35 m、深さ 0.15 mをはかる。断面形は逆台形で、遺物は出土していない。463 ピットは 462 ピットの東に位置する円形のピットである。直径 0.3 m、深さ 0.15 mをはかる。断面形は椀形で、遺物は出土していない。

466 ピット(第31 図) 調査区中央部では最も西端、X = -123,815、Y = -42,319 で検出した。円形のピットである。直径 $0.4 \, \mathrm{m}$ 、深さ $0.1 \, \mathrm{m}$ をはかる。断面形は皿形である。遺物は出土していない。

467 落込み(第 31 図) $X=-123,810 \sim -123,813$ 、 $Y=-42,304 \sim -42,307$ 付近で検出した。不整な長方形の落ち込みで、南西部は 2 段の落込みとなる。長さ 4.0~m、幅 0.4~m、深さ 0.1~mをはかる。断面形は皿形で、遺物は出土していない。

453 ピット (第 31 図) 467 落込みの東に位置する。小形の円形ピットである。直径 0.25 m、深さ 0.15 mをはかる。断面形は椀形である。遺物は出土していない。

454 ピット・455 ピット(第 31 図) 453 ピットの南東に位置する。454 ピットは円形のピットである。直径 $0.2~\mathrm{m}$ 、深さ $0.1~\mathrm{m}$ をはかる。断面形は椀形である。遺物は出土していない。455 ピットは円形のピットである。直径 $0.2~\mathrm{m}$ 、深さ $0.1~\mathrm{m}$ をはかる。断面形は椀形である。遺物は出土していない。

456 ピット (第 32 図) 455 ピットの南に位置する。円形のピットである。直径 0.25 m、深さ 0.1 mをはかる。断面形は皿形である。遺物は出土していない。

457 ピット・458 ピット (第 32 図) 456 ピットの南に位置し、互いに隣接する。457 ピットは円形のピットである。直径 $0.25~\mathrm{m}$ 、深さ $0.1~\mathrm{m}$ をはかる。断面形は逆台形で、遺物は出土していない。458 ピットは円形のピットである。直径 $0.2~\mathrm{m}$ 、深さ $0.15~\mathrm{m}$ をはかる。断面形は椀形で、遺物は出土していない。

459 ピット (第 32 図) 457・458 ピットの西に位置する。円形のピットである。直径 0.3 m、深さ 0.15 mをはかる。断面形は椀形である。遺物は出土していない。

443 ピット (第 32 図) 467 落込みの北西隅に位置する。楕円形のピットである。直径 0.2 m、深さ 0.1 mをはかる。断面形は椀形である。遺物は出土していない。

444 ピット(第32 図) 467 落込みの北東に位置する。円形ピットである。直径 $0.2 \,\mathrm{m}$ 、深さ $0.1 \,\mathrm{m}$ をはかる。 断面形は椀形である。 遺物は出土していない。

445 ピット(第32 図) 遺構群の最東端に位置する。円形のピットである。直径 $0.2 \, \text{m}$ 、深さ $0.3 \, \text{m}$ をはかる。断面形はU字形である。遺物は出土していない。

446 ピット・447 ピット(第 32 図) 446 ピットは 445 ピットの南西に位置する。円形のピットである。 直径 $0.25~\mathrm{m}$ 、深さ $0.1~\mathrm{m}$ をはかる。 断面は椀形で、遺物は出土していない。 447 ピットは 446 ピットの南に位置する。円形のピットである。 直径 $0.25~\mathrm{m}$ 、深さ $0.1~\mathrm{m}$ をはかる。 断面形は椀形で、遺物は出土していない。

448 ピット・449 ピット・450 ピット・451 ピット・452 ピット (第 32 図、写真図版 11) 448 ピットは



第33図 4区第1面中央西部平面図

円形のピットである。直径 0.25 m、深さ 0.1 m弱をはかる。断面は皿形で、中心に径 0.05 mの柱痕がある。 遺物は出土していない。449 ピットは円形のピットである。直径 0.25 m、深さ 0.1 m弱をはかる。断面形は 皿形で、中心に径 0.05 mの柱痕がある。遺物は出土していない。450 ピットは円形のピットである。直径 0.3 m、深さ 0.1 m弱をはかる。断面形は皿形で、中心に径 0.1 mの柱痕がある。遺物は出土していない。451 ピッ トは円形のピットである。直径 0.3 m、深さ 0.05 mをはかる。断面形は皿形で、中心に径 0.1 mの柱痕がある。

遺物は出土していない。452 ピットは円形のピットである。直径 0.3 m、深さ 0.15 mをはかる。断面形は椀形である。中心に柱痕は認められなかった。遺物は出土していない。

448 ピットから 451 ピット、あるいは 452 ピットまでは約 1 mの等間隔でほぼ一列に並ぶこと、中心に柱痕をもつことなどから柵列などだった可能性が高い。

468 ピット (第 32 図) 上記のほぼ一列に並ぶピット群の東、449 ピットと 450 ピットの間に位置する。 円形のピットである。直径 0.2 m、深さ 0.1 mをはかる。断面形は皿形である。遺物は出土していない。

439 土坑(第 32 図) 中央北端の X=-123,805、Y=-42,306 で検出した。円形土坑である。直径 0.8 m、深さ 0.15 mをはかる。断面形は皿形である。遺物は出土していない。

441 土坑・440 土坑 (第 32 図、写真図版 11) 互いに隣接する。441 土坑は円形土坑である。直径 0.6 m、深さ 0.4 mをはかる。断面形はU字形である。遺物は出土していない。440 土坑は円形土坑である。直径 0.4 m、深さ 0.15 mをはかる。断面形は椀形である。遺物は出土していない。

中央東部は遺構、包含層共に遺物がほとんど出土していないので、明確な時期は不明である。しかし、遺構(ピット)の大きさや形状から中世の遺構ではないかと推察する。明確な建物などは復元できなかったが、遺構の密集度やピットと溝の組み合わせという遺構の性格、棚田が形成されるシルト層ではなく平坦な丘陵地に立地するなどの条件から、耕作地ではなく集落などの性格が濃いと考える。

中央西部とは $Y = -42,327 \sim -42,355$ の区域を指す。北側の山裾が張り出してきて南に円孤を描くように延びる丘陵の山頂を平らに削った形になっている。中央東部より高く、この丘陵部において試掘調査が行われた際は、縄文土器が出土した。今回の調査では大形の土坑やピットなどを検出した。

411 土坑(第 34 図、写真図版 11) 北西部で検出した楕円形の土坑である。長径 2.5 m、短径 0.7 m、深 さ 0.2 mをはかる。断面形は皿形である。遺物は出土していない。

412 落込み(第 34 図) 調査区の中央にあり、X=-123,820 ラインを通る側溝に切られる。長辺 2.8 m、短辺 2.3 m、深さ 0.3 mの不整方形の土坑である。断面形は皿形である。遺物は出土していない。

413 土坑 (第 34 図、写真図版 11) 412 落込みの南にある。一辺 1.5 m、深さ 0.45 mの隅丸方形状の土 坑である。断面形は椀形である。遺物は出土していない。

414 土坑(第 34 図) 調査区の南端にある。長径 $1.3~\mathrm{m}$ 、短径 $0.4~\mathrm{m}$ 、深さ $0.35~\mathrm{m}$ をはかる。円形の土坑である。断面形は逆台形である。遺物は出土していない。

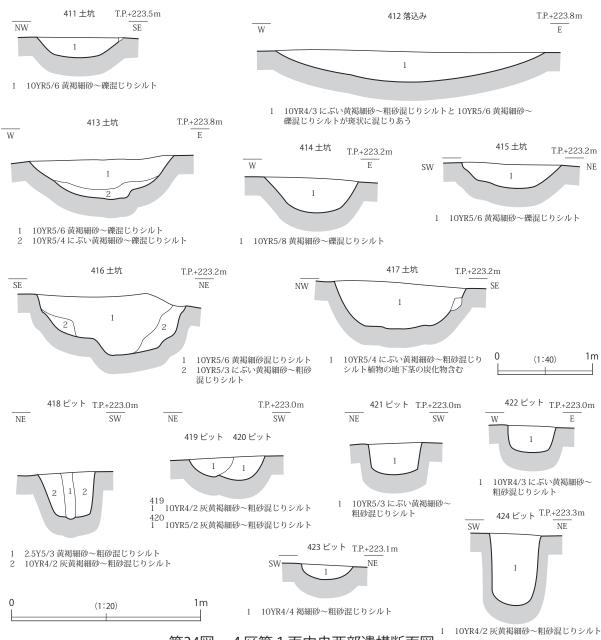
415 土坑(第 34 図) 調査区の南東端にある。楕円形の土坑である。長径 3.0 m、短径 1.0 m、深さ 0.2 mをはかる。断面形は皿形である。遺物は出土していない。

416 土坑 (第 34 図、写真図版 11) 調査区の北東にある。不整な方形の土坑である。長辺 2.7 m、短辺 1.5 m、深さ 0.6 mをはかる。断面形は椀形で、底面、側面の凹凸が著しい。遺物は出土していない。

417 土坑(第34図、写真図版11) 調査区の東端にある。不整な長円形の土坑である。長径3.4 m、短径1.4 m、深さ0.5 mをはかる。断面形は椀形である。遺物は出土していない。

418 ピット (第 34 図) 418 ピットから 423 ピットは中央西部の北東端で検出されたいずれも小形の円形 土坑である。418 ピットは直径 $0.3~\mathrm{m}$ 、深さ $0.25~\mathrm{m}$ をはかる。断面形は U字形で中心に直径 $0.05~\mathrm{m}$ の柱痕をもつ。遺物は出土していない。

419 ピット・420 ピット・421 ピット(第 34 図) 419 ピットと 420 ピットは切り合い関係をもつ。419 ピットは直径 $0.2 \, \mathrm{m}$ 、深さ $0.1 \, \mathrm{m}$ をはかる。断面形は椀形で、遺物は出土していない。420 ピットは直径 $0.3 \, \mathrm{m}$ 、深さ $0.1 \, \mathrm{m}$ をはかる。断面形は椀形である。遺物は出土していない。421 ピットは直径 $0.3 \, \mathrm{m}$ 、深さ $0.15 \, \mathrm{m}$



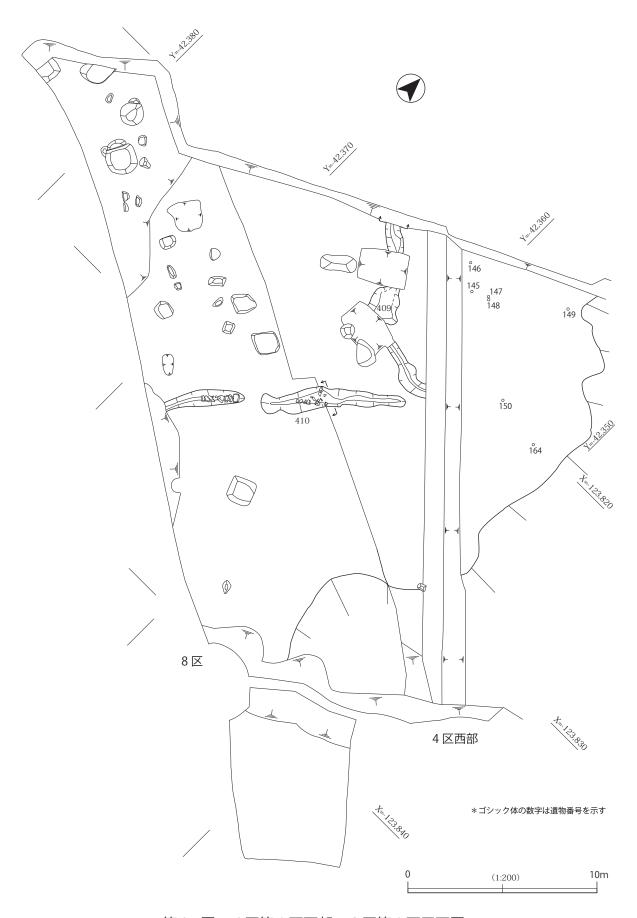
第34図 4区第1面中央西部遺構断面図

をはかる。断面形は逆台形である。遺物は出土していない。418から421ピットは一直線上に並ぶ。

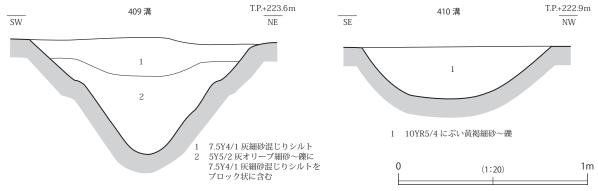
422 ピット・423 ピット(第 34 図) 422 ピットは直径 0.25~m、深さ 0.15~mをはかる。断面形は逆台形で、遺物は出土していない。 423 ピットは直径 0.25~m、深さ 0.08~mをはかる。断面形は皿形である。遺物は出土していない。 422・423 ピットは一列になり、 418 から 421 ピット列に 2~m離れて並行になる。

418 ピットから 421 ピットは約 1 mの間隔で北東-南西を長軸として一列に並び、421 ピットから直角の位置に 2 m離れて 423 ピットが、さらに直角に北東 1 m強の位置に 422 ピットが並び「コ」形を示す。柱痕が確認できるもの (418 ピット) や切り合い関係をもつもの (419・418 ピット) もあり、何らかの構造物があったと考えられる。ただし、北東側でピットを確認できず、柱間隔も建物とするには狭い。大形の土坑群のある丘陵部より低い平坦部に立地し、中央東部でみられたピットや土坑、溝などの遺構群に関連すると考える。

424 ピット(第 34 図) 417 土坑の北西隅に位置する。小形の円形土坑である。直径 $0.3~\mathrm{m}$ 、深さ $0.35~\mathrm{m}$ をはかる。断面形はU字形である。遺物は出土していない。



第35図 4区第1面西部・8区第1面平面図



第36図 4区第1面西部遺構断面図

4区第1面西部と8区の第1面は、4区の中央西部の丘陵から急激に谷となって下降する、谷に堆積した 3層灰色シルト層の最上面である。ほぼ直角に接する溝2条を検出した(第35図、写真図版9)。

また、丘陵部の裾すぐにあたる X = -123,820 以東、 $Y = -42,350 \sim -42,360$ の間で宋銭 6 枚(第 66 図 $145 \sim 150$ 、写真図版 46)と石鏃 1 点(第 67 図 164、写真図版 43)が出土した。

409 溝(第 36 図、写真図版 11) 正方位から 45 度角度を振って、北西から南東に伸びる溝である。 2 つ の撹乱に切られるが、撹乱付近で角度を変えておおむね東に延びる。現存長約 9.0~m、幅 $1.0\sim1.5~m$ 、深さ 0.6~mをはかる。断面形はV字形を呈する。

410溝(第36図、写真図版11) 南西から北東の東西方向に延びる溝である。現存長おおむね13.0 m、幅1.0 m、深さ0.25 mをはかる。断面形は椀形を呈する。410溝からは土師器杯が出土した(第64図101)。410溝は409溝と直角に位置することや規模や形状が似ることから、両者は相関性があると考えられる。この区域が明確な水田とは決定できないが、水路などの耕作に伴う遺構と考える。

この第1面は層中から出土した宋銭などにより、中世前半期、12世紀から 14世紀半ばの年代が与えられる。 第2項 4区第2面・8区第4面(第37~39図、写真図版9~11)

4区中央東部、中央西部とも第1面の3層を掘削したところ、ほぼ地山を検出した。

中央東部の北側は山裾に沿って、孤を描くように段がつき、下段でピットを数基検出した(第 38 図)。中央西部も山頂部はほぼ平らとなり、溝状の遺構などが検出される。 4 区の西部から 8 区にかけては西へとさらに低くなり足跡なども部分的にみられるが、山から滑落した自然石や礫が広範囲に検出された。

4 区第 2 面の遺構 (第 39 図、写真図版 9・10)

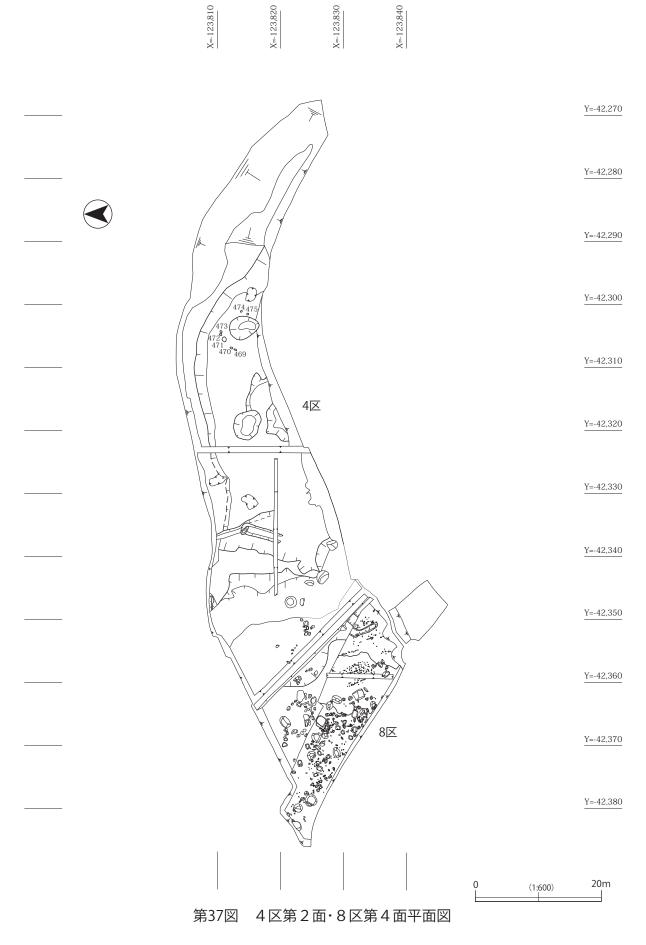
4区の中央東部では上述の北側の段地形のほか、大形の土坑や落込みを検出したが、自然地形と判断した。 遺構としては、大形のくぼみを囲むように並ぶ 469 から 475 のピットがある。

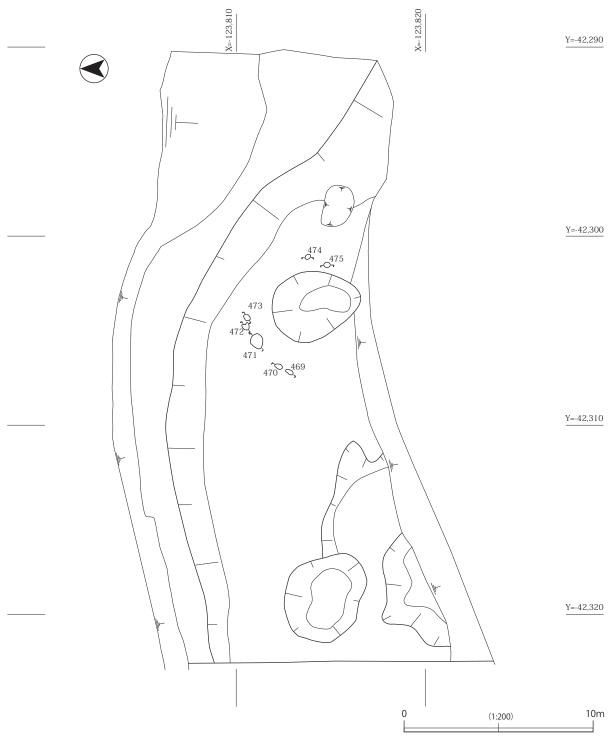
469 ピット (第 39 図) 469 ピットは最西のピットで、X = -123,813、Y = -42,307 付近に位置する。 楕円形のピットである。長径 $0.4~\mathrm{m}$ 、短径 $0.3~\mathrm{m}$ 、深さ $0.15~\mathrm{m}$ をはかる。断面形は逆台形である。遺物は出土していない。

470 ピット(第39 図) 469 ピットの北東にある。楕円形のピットである。長径 0.5 m、短径 0.4 m、深さ 0.1 mをはかる。断面形は皿形である。遺物は出土していない。

471 ピット(第39図) 470 ピットの北東にある。不整円形の大形ピットである。長径 0.8 m、短径 0.5 m、深さ 0.2 mをはかる。断面形は椀形である。遺物は出土していない。

472 ピット・473 ピット(第 39 図) 471 ピットの北東にある隣接するピットである。472 ピットは不整円形のごく小形のピットである。直径 $0.35~\mathrm{m}$ 、深さ $0.1~\mathrm{m}$ をはかる。断面形は椀形である。473 ピットも不





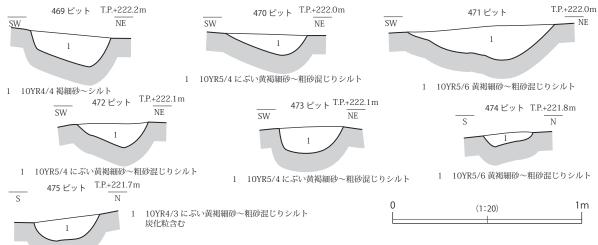
第38図 4区第2面中央東部平面図

整円形のごく小形のピットである。直径 $0.3~\mathrm{m}$ 、深さ $0.1~\mathrm{m}$ をはかる。断面形は椀形である。いずれも遺物は出土していない。

474 ピット (第 39 図) 調査区の東端にある。円形のごく小形のピットである。直径 $0.25~\mathrm{m}$ 、深さ $0.05~\mathrm{m}$ をはかる。断面形は皿形である。遺物は出土していない。

475 ピット(第 39 図) 474 ピットの南西にある。ごく小形の円形ピットである。直径 $0.35~\mathrm{m}$ 、深さ $0.1~\mathrm{m}$ をはかる。断面形は椀形である。遺物は出土していない。

4区は北側の山裾部分では縄文時代早期末、前期、晩期などの土器が破片であるが複数出土している(第



第39図 4区第2面中央東部遺構断面図

63 図、写真図版 35)。縄文時代の土器の出土は 1 ・ 2 区を除いてはこの 4 区に限られる。遺構は検出されていないが、おそらく 4 区北側の山などの高い区域に縄文時代の生活痕跡があったと考えられる。

また、主に4区の中央東部で検出された遺構群は明確な時期決定はできないが、中世の集落などに関連する遺構と考えられる。1・2区で縄文時代の遺構を検出した以外は、5区より南西では谷部分に形成される棚田などの生産遺構がほとんどであるのを考慮すると、4区が、これより北に生産遺構に伴う居住域が広がっていたことを示す、貴重な資料である。

第3項 5区第1面・6区第1面・13区第2面(第40~42図、写真図版12・14・ 15・29)

4区の南側に並行して位置する 5 区と 6 区は、調査の工程上 2 つに分割されたが、 4 区と 7 区の東側の山に挟まれた谷にあたる、一連の区域として捉えられる。また、 13 区は 6 区と 7 区に挟まれ、谷地形の続きである(第 6 図参照)。 $5 \cdot 6 \cdot 13$ 区とも機械掘削後、 3 面にわたって調査を行った。そこで、当項では対応する 5 区第 1 面、 6 区第 1 面、 13 区第 2 面を 1 つの平面図とした(第 40 図)。

5区の第1面と6区の第1面はいずれも機械掘削で盛土等を除去し、3層上面を検出した遺構面である。 13区は機械掘削以後も西側を若干掘削して第2面とし、5区、6区の第1面にそろえた。

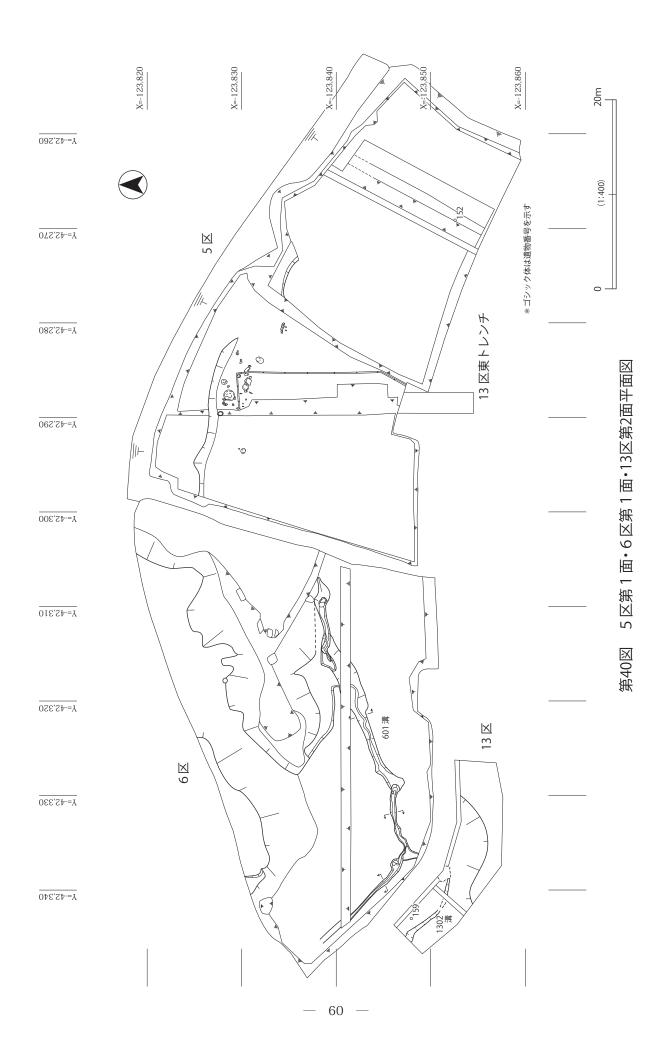
第1面の標高は、5区ではY = -42,290より西北側でT.P. + 220.5 m $\sim + 220.8$ m、南西隅でT.P. + 219.9 m、X = -123,840、Y = -42,270付近でT.P. + 219.2 m、X = -123,840、Y = -42,280付近でT.P. + 218.9 m、北東隅のX = -123,850、Y = -42,260付近でT.P. + 218.5 m、南東隅でT.P. + 218.3 mである。

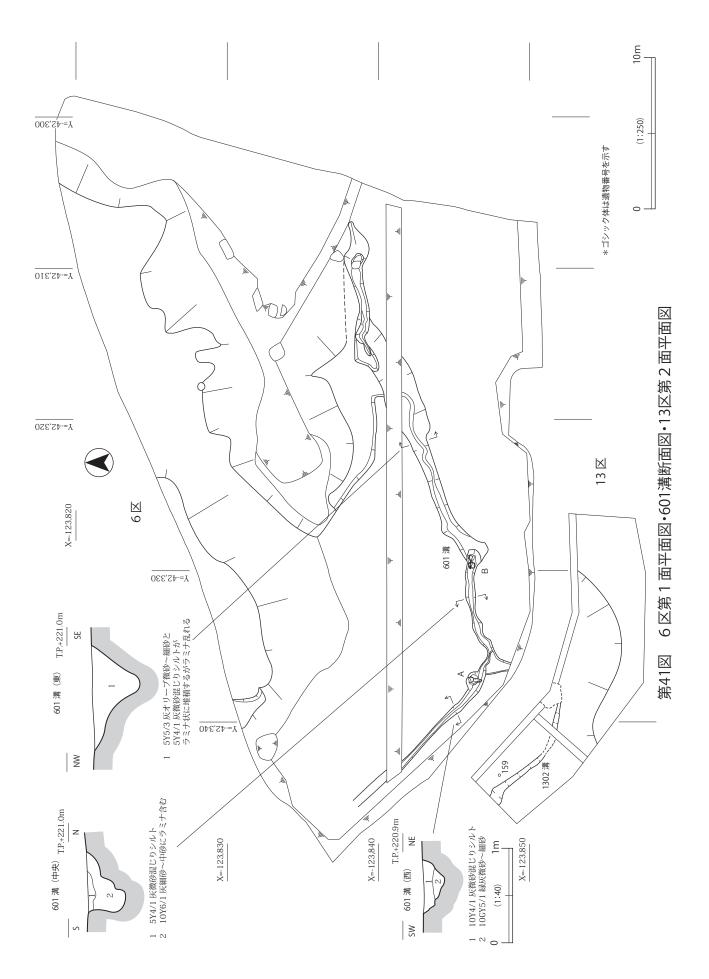
6区では、第1面の標高は西北 601 溝の始点辺りで T.P. + 221.2 m、601 溝と東西アゼが交差する X = -123,840、Y = -42,320 付近で T.P. + 220.7 m、5区との境界にあたる南西隅で T.P. + 220.0 m、地山から 3層に変わる Y = -42,330 ~ -42,320 ラインで T.P. + 220.7 m~ + 221.0 mである。

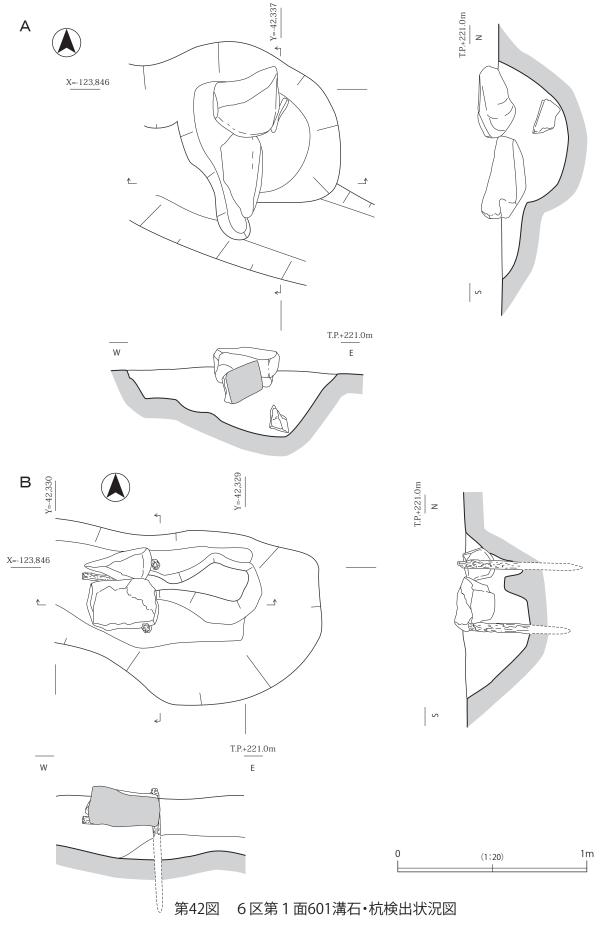
13 区は西端の 1302 溝付近で T.P. + 221.5 m、中央の X = - 123,855、Y = - 42,335 付近で T.P. + 221.6 m、東側の X = - 123,855、Y = - 42,330 付近で T.P. + 221.6 mである。

5区の西半から6区全域の北から3分の1ほどでは、4区から延びてくる地山が露出しており遺構は検出されない。それより南では褐灰色シルト層の3層が厚く堆積する。北から南へと傾斜する。13区はやはり、南東は張り出してきた地山が占め、南東から北西に低くなる。

6区の南西部で601 溝を、13区北西部で1302 溝を検出した。601 溝と1302 溝はつながる可能性が高い。







5区では地山から3層への境界で、自然石や杭などが検出され、その中には配列したようにみえるものもあった。畔などは検出できていないが、これらは耕作に伴う施設と考える。

また、5区の南や6区601溝、13区の西北など複数地点で、銅銭が出土した(第40図)。いずれも宋銭で11世紀初鋳のものを含む。

6区第1面の遺構(第41 図、写真図版 15)

601 溝(第 41・42 図、写真図版 15) 601 溝は調査区外から続いており、調査区の南端、X=-123,849、Y=-42,336 で現れて、1 mほど北に延びてから二股に分かれる溝である。西に延びる溝は地形に沿って北上し、10 数m先で途切れるが、実際は調査区外まで延びていたかも知れない。幅 0.4 m、深さ 0.25 mで断面はV字形を呈する。途中で石を2、3 個並べて溝の幅が広がる箇所がある(第 41・42 図 A)。

もう一方の溝は東に 7、 8 m延びたところで、両脇に杭を打ち込み、石を並べた箇所(第 41・42 図 B)で一度屈曲し、やや幅を広げて北西へと延びていく。全長約 25 mで、幅は $0.6 \sim 1.1$ m、深さは $0.4 \sim 0.5$ mである。断面は V字形を呈する。 A、 B の部分は幅が 1.0 m程度となり、水勢を調節する水利施設と考えられる。二股の溝は緩やかであるが、調査区を方形に区画することから、溝周辺は水田域と考える。足跡も水田面でかたまって検出できた。

13 区の 1302 溝は、幅 $0.4 \, \text{m}$ 、全長 $8 \, \text{m}$ ほどで北西から東に延びる。道路や土坑に遮られるが、 $601 \, \text{溝の西側と約 } 5 \, \text{m}$ 間隔で並行なので、 $601 \, \text{溝の南端に続く溝である可能性があろう。調査区西壁において溝両肩の位置に杭が認められた。$

第4項 5区第3面・6区第3面(第43~46図、写真図版13・16・17)

5区、6区とも第1面調査後、東西、南北に側溝を設け確認すると、第1面の地表面から2~3m下で3層が堆積することが分かった(第10・46図)。断面観察で3層の途中には何層かの砂層が間層としてあり、足跡の踏み込みが認められた。つまり、何時期か機能面があったことになる。これを手がかりとして、第2面、第3面を調査した。第2面、第3面ともに第1面と似た様相を呈する。複数の遺構を検出し、空撮を行った5区第3面、6区第3面について記述する。

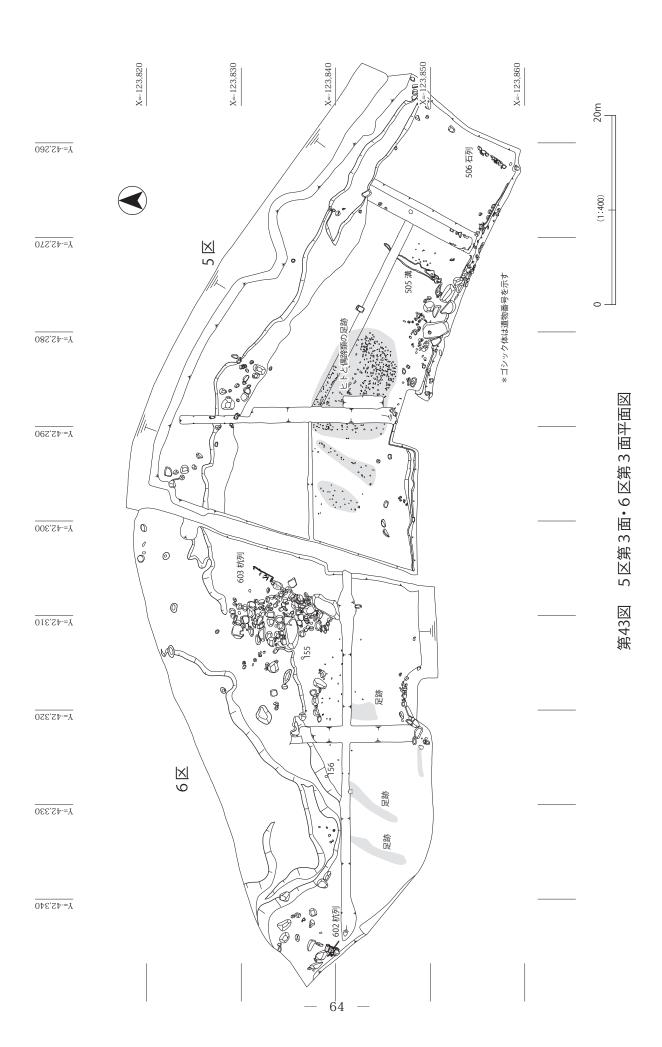
5区では3層を掘り下げることにより、北側の地山の露出はより広範囲に広がり、明瞭となる。東西方向にテラス状に段がつく。それより南では3層のシルト層が広がり、特に南西部では広範囲で足跡が認められた(第43図)。足跡は人以外にも牛などの偶蹄類の足跡がある。南東部では、正方位とは45度の角度だが、調査区の東辺に平行に、南北方向の505溝や506石列を検出した。足跡も南北の列にみえるところもあり、南北を意識した区画割などがあったと推測できる。

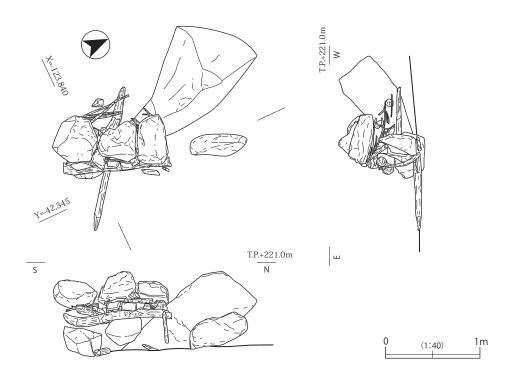
標高は北西隅で T.P. + 219.0 m、南西隅で T.P. + 219.3 m、足跡を検出した中央付近で T.P. + 218.2 m \sim + 218.6 m、北東隅で T.P. + 218.0 m、北西隅で T.P. + 218.0 mと、北から南に、西から東に低くなる。

6 区は北側の地山の張り出しが Y=-42,315 より西になるが、もっとも張り出した部分は X=-123,840 付近まで迫る。西端で 602 杭列を、北東部で 603 杭列を検出した。 6 区の南半では 5 区と同じく、南北の列状に足跡を検出した。第 1 面と同様、数地点で宋銭が出土しており、15 世紀までのものである。 6 区の第 1 面から第 3 面は 11 世紀後半から 15 世紀頃と捉えられる。

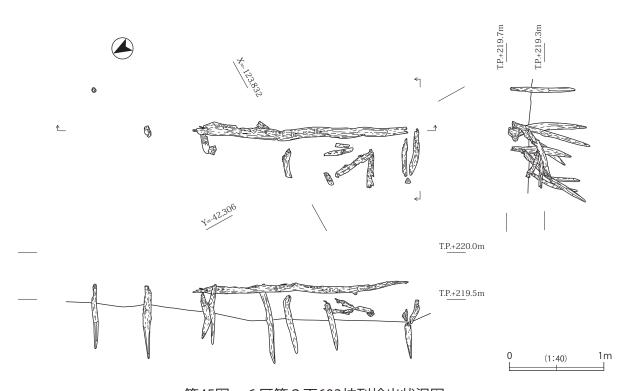
6区第3面の標高は、地山から下降する北西隅で T.P. + 220.0 m、南西隅で T.P. + 220.0 m、中央付近で T.P. + 219.3 m、北東隅で T.P. + 219.3 m、北西隅で T.P. + 219.1 mと、 5区より比高差は小さいが、北から南に、西から東に低くなる。

6 区第 3 面の遺構(第 44・45 図、写真図版 17)

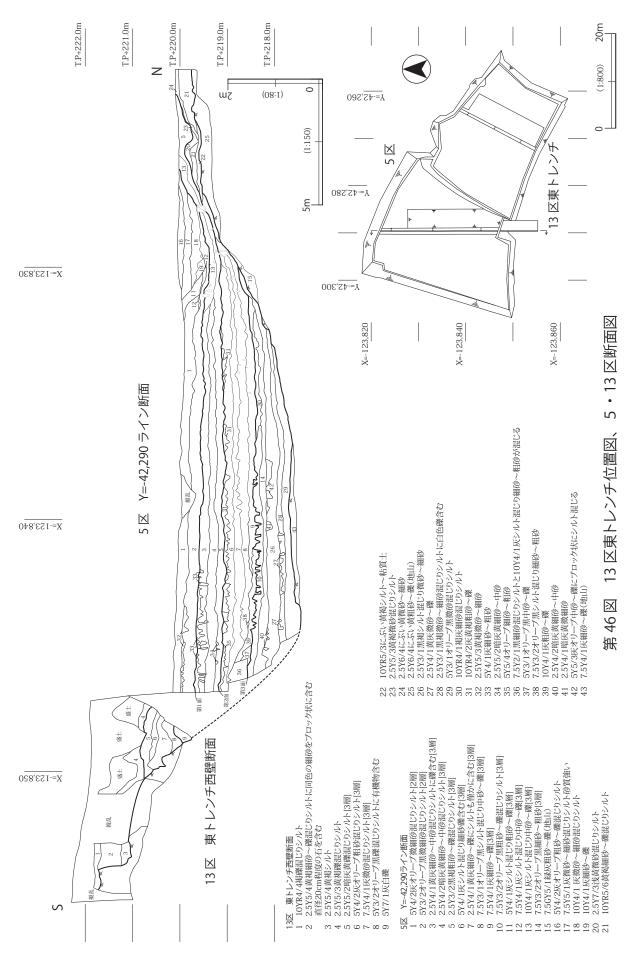




第44図 6区第3面602杭列検出状況図



第45図 6区第3面603杭列検出状況図



602 杭列(第 44 図、写真図版 17) 調査区の西端、X = -123,840、Y = -42,345 付近で検出した。人頭大の自然石を 3 列 2 段に並べ、段と段の間には隙間を埋めるように細かい礫などが並べられる。石に平行な横杭と、それに直交するような杭が地面に突き立てられている。横木の間には細かな木の枝などもみられる。

601 溝中の杭列のように、明確な溝に伴っておらず、杭列も不完全だが、石と木を組み合わせて水勢を調節する機能をもたせようとした、水利施設と考えてよいだろう。

603 杭列(第 45 図、写真図版 17) 調査区の北東部、X=-123,832、Y=-42,306 付近で検出した。 こちらもかつては石が存在していたかと思われるが、調査の課程で取り除いてしまったものもあり、南に平坦に加工された石が残るのみである。南北方向に少なくとも 9 本の杭が打ち込まれている。杭は残存長 0.5 ~ 0.8 m、直径 0.1 m未満である。杭と杭の間隔は約 0.5 mである。縦杭に対して横にも材を組んでいたのか、直径 0.1 m、長さ 2.2 mの材を検出した。603 杭列は堰状の機能をもつ杭列と考えてよいだろう。

5区の Y = -42,290 ラインで断面観察用のアゼを設定して、トレンチとして地山までの掘削を行った。しかし、南端については、谷からの上がりを確認できなかったため、13 区を調査した際に Y = -42,290 ラインの南延長線上にトレンチを設けて追加確認することとなった。これを 13 区東トレンチと名づけた。(第 $40\cdot46$ 図)。

13 区の東トレンチは、現地表は T.P. + 222.0 mを超えているが、南の山から延びてくる山裾にあたるため、盛土約 1 mを掘削すると、X=- 123,850 辺りまでは地山が露出した。この山裾が西に広がっていき、13 区トレンチ東南部を占める地山につながると予想される。

それより北では、約1 mの厚さで3層の堆積が認められ、急激に地山が下降し、T.P. + 219.7 mで地山となることが判明した。この3層の堆積は、踏み込んで残る砂層の間層によって何層かに分層可能で、層界は5区の第1面から第3面に対応すると考えられる。つまり、X=-123,850 辺りが5区からの谷と、そこに埋積した3層の収束点だといえる。

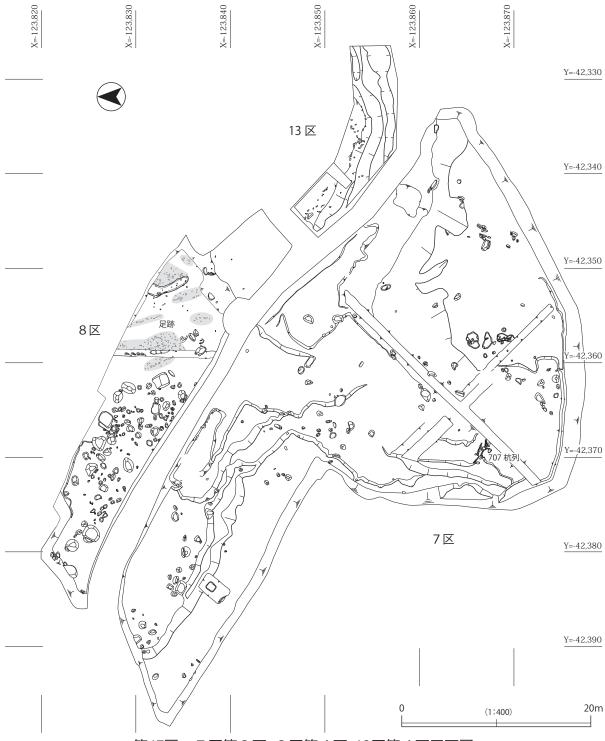
5区、6区は全調査区のなかでも最も低い谷部分にあたり、谷底は T.P. + 217.5 m前後になることや、その低い部分に 3 層が 3 m以上にわたって堆積することが確認できた。堆積は一挙に起こったのではなく、長い時間の経過があったと思われ、その途中の段階では低くて水が集まりやすい地形を活かして、棚田などの耕作地としての利用がなされていたと考えられる。

出土遺物から確認できる限りでは、古代末から中世に耕作地として利用され、その後も継続してか断絶があったかは不明だが、近代以降も地形を利用しての造成が行われ、耕作地としての利用が現代まで続いたと考えられる。

第 5 項 7 区第 3 面・8 区第 4 面・13 区第 4 面(第 47・48 図、写真図版 $18 \sim 20$) 中央部で最も西に位置するのが 7 区であり、 7 区と 6 区ないし 7 区と 4 区とに挟まれた道路の付け替え部分に相当するのが、13 区、 8 区である(第 6 図)。

7区は東半が半長円状で、その西半に平行四辺形か台形がついたような形状である。盛土等を機械で掘削した。機械掘削終了面を第1面とし、その後3層が堆積している部分の掘削を行って第2面とした。中心で深い谷筋を検出したためトレンチで深さを確認した後、可能な限り谷筋に埋積した3層を掘削した。谷筋では地山まで掘削を行えなかったが、両端は地山が露出した。この状態を第3面とし、空撮を行った。アゼ、トレンチの軸線は東半部分で正方位に対して45度振った位置に設定した(第47図)。

8区は第1面から第4面まで存在し、すべて3層に属する。足跡などによる踏み込みが認められる面が耕作地として機能していたと判断し、これを鍵層として分層し、調査した。機械掘削終了面が第1面で、第1



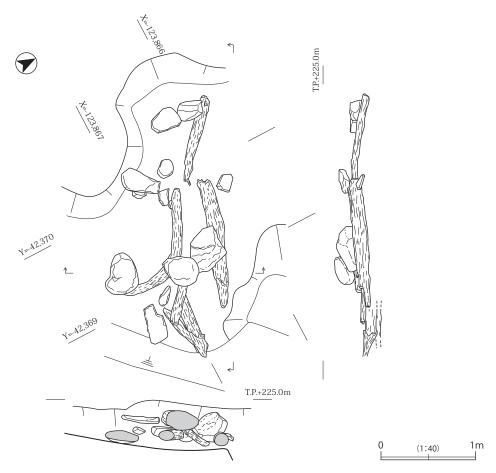
第47図 7区第3面・8区第4面・13区第4面平面図

面は4区と遺構(溝)がつながるため、4区第1面とあわせて掲載した(第35図)。

最終遺構面の第4面については、第37図でも掲載したが、つながりを示すためここでも掲載する(第47図)。 第4面で空撮を行った。

8 区第 4 面は西から東へかなりの傾斜をもって低くなる。 8 区第 4 面の標高は、西端では T.P. + 223.6m 前後であるが、Y=-42,355 辺りでは T.P. + 221.6 m前後となり、東端にくると T.P. + 220.3 m前後となる。 Y=-42,360 以南では、溝状の窪みのほか人もしくは偶蹄類の足跡を広範囲に検出した。

13区の第2面については、5区と遺構(溝)がつながるため、5区・6区第1面にあわせて記述した(第



第48図 7区第3面707杭列検出状況図

 $40\cdot41$ 図)。すべて地山が露出した最終遺構面は第 4 面で、これをこの項で掲載した(第 47 図)。第 4 面では、第 2 面からさらに地山の露出が進み、南側の地山部分と円の中に残る部分との段差が激しくなる。南辺の地山が露出した最も高いところでは、T.P.+221.6 m $\sim+221.7$ mであるが、北辺の最も低いところでは、T.P.+221.0 m $\sim+221.2$ m $\sim+221.2$

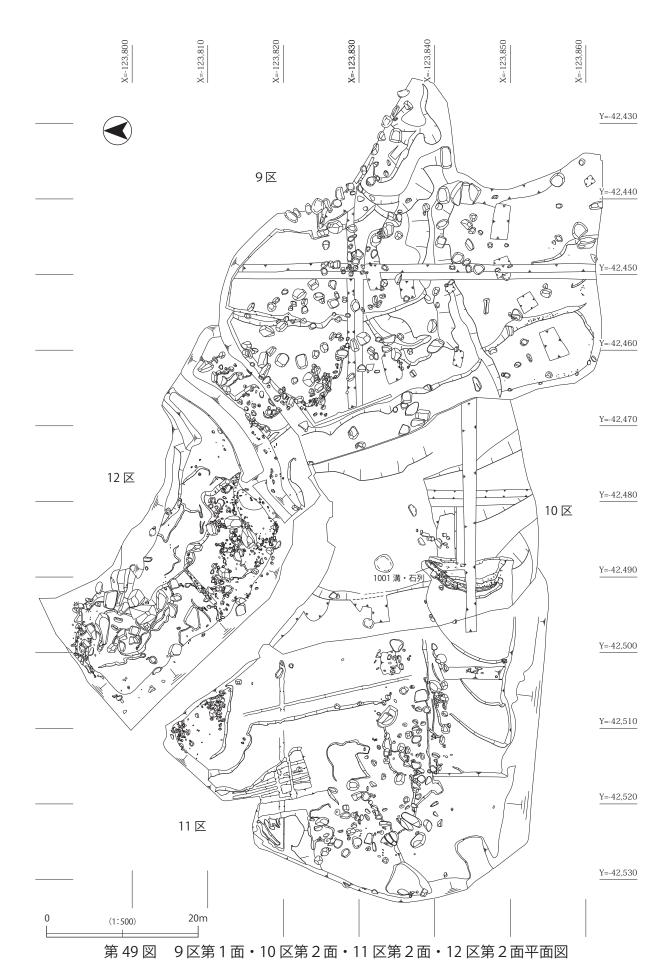
7区第3面の遺構(第48図、写真図版18・19)

7区は前述のように、東側が半長円形の頭で、西側が長方形の胴という、おたまじゃくしのような形状をとる調査区である。半長円の頂点から 45 度の角度で直線距離 15 mほどの範囲が谷筋で、最も 3 層が深く堆積する。ここに軸線(アゼ)を設定した。谷筋は南西から北東に低くなり、北東には幅を増して広がっていくが、西側は軸線(アゼ)にほぼ平行に落ちて広がらず、長方形の部分では段状になった地山が露出する。西側の長方形部は近現代の棚田の形状が残っており、東西に長い長方形の段で 2 つに分かれていたが、盛土、2 層を掘削すると 3 層の堆積はわずかであった。

東部、谷筋と地山の境界付近では不整形の土坑数基などを検出した。また、谷筋でも最上部の X=-123,866、 Y=-42,370 付近で石と杭を組み合わせた 707 杭列を検出した。

7 区は地山が露出している北西部が T.P. + 225.7 m、南西部が T.P. + 224.4 m、北東分が T.P. + 226.8 m、南東部が T.P. + 225.5 mである。南西から北東へのアゼ部でみると、最高部で T.P. + 226.8 m、最低部で T.P. + 222.7 mと比高差は約 4 mにも及ぶ(第 10 図)。これはすべて 3 層の堆積である。

707 杭列(第 48 図、写真図版 19-2) $X=-123,865 \sim -123,867$ 、 $Y=-42,368 \sim -42,371$ で検出された。直径 $0.1 \sim 0.2$ m、長さ 1.0 m ~ 1.3 mの自然木を数本、横木として底面に並べ、あるいは交差さ



— 70 —

せて列を構築していたようである。使用している材は、6区の601 溝杭列や603 杭列のように、先端を尖らせるなどの加工は行われておらず、自然木のまま使用してある。材の上や材と材の間には補強のためか、人頭大の自然石が積まれている。

明確に配置されておらず、素材の木や石も自然のままであるので、人為的遺構であるかの判断が難しい。 しかし、他にはなくここにだけかたまってみられることや、谷筋の中心、水流の通り道に直交することから、 やはり水勢を調節するための水利施設と判断した。よって、7区第3面、8区第4面、13区第4面は畦畔な どの明確な遺構は検出されなかったが、谷に堆積した土を使用して耕作が行われていたと考えるのが妥当だ ろう。

7区は2層に含まれる遺物は明確に近世のものである。3層に含まれる遺物は、若干古い時期の瓦器も含むが、おおむね13世紀~14世紀のものになる(第65図)。よって、中世前半期に機能していた遺構面と考えられる。

第3節 西部 (9~12区)の遺構

第1項 9区第1面・10区第2面・11区第2面・12区第2面(第49~53図、写真図版21・23・24・26・27)

9 区から 12 区は調査区全体中では西部に位置する(第 6 図)。主に $Y=-42,430 \sim -42,530$ の東西 110 mの距離に、東から西に 9 区、10 区、11 区と 3 つの調査区が並び、3 つの区のさらに北に 12 区が位置する(第 49 図)。12 区は一部に 8 区や 13 区と同様の道路の付け替え部分を含む。また、11 区、12 区 の西端は、カーブを描きつつも東西付け替え道路と交差する南北道路によって区切られる。南北幅は $X=-123,790 \sim -123,860$ の約 70 mである。

9区以外は第1面が機械掘削終了面で、第2面を対応する遺構面として合成平面図を示した(第49図)。 第2面は北から南、西から東に傾斜し、標高は最も高い11区西端ではT.P. + 240.4 m、最も低い9区東端ではT.P. + 232.0 mとその比高差は約8 mにもおよぶ(第11図)。12区や9区の北側や11区の中央部は機械掘削を終了した時点で地山が露出する。11区や10区で顕著だが、北端と南端に東西に伸びる2つの深い谷筋が認められる。この谷部分で厚く堆積した3層を数回に分けて調査し、上層から順番に第2面から第4面とした。

10区・11区の南側の谷筋では、3層を順次掘削することによって、南東を要として扇形に広がる棚田数枚や、 溝や暗渠などの耕作関連遺構を検出した。12区では、北側の山裾が張り出してきて北半は地山が露出する。 よって、3層の検出は地形に沿って南側約半分にとどまる。

9区では10区東端から延長する現行の棚田の造成時の段がそのまま残り、機械掘削後も北西部は一段高くなる。上段部は2層を掘削するとほぼ地山だが、下段部では11区の北端や12区でみられる谷筋と同一かは不明だが西から東へ進むと下降し、3層の堆積がみられる。9区の東半は北から南に伸びる谷筋に3層が堆積する。また、この西部域は西側、北側、南側それぞれを山で囲まれるため、山頂部から滑落した自然の巨石が数多く検出され、下方にいくほど多くみられるのが特徴である。

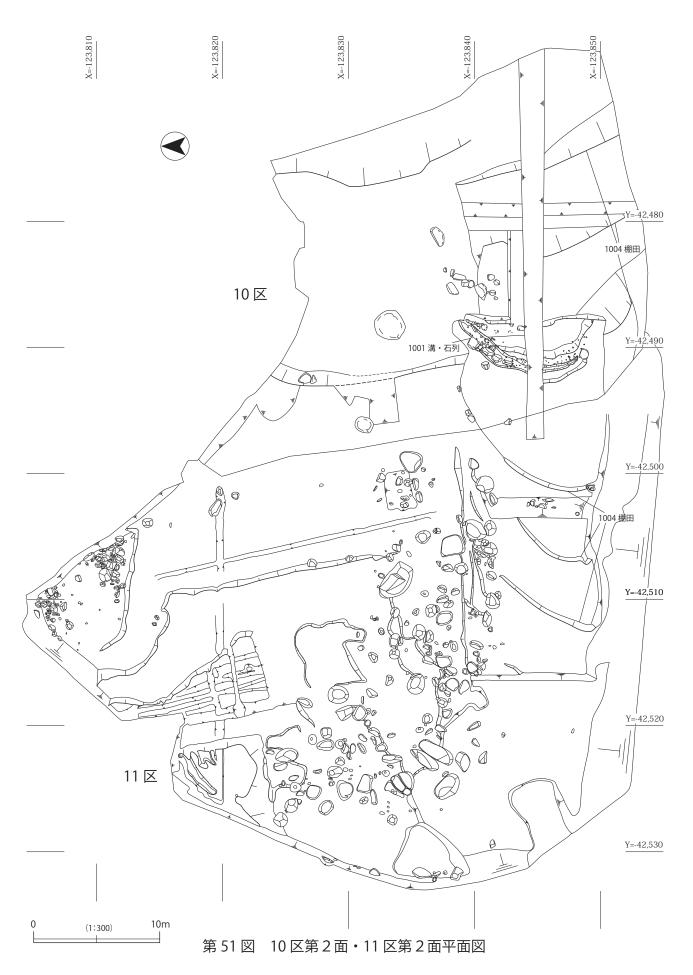
西部の当該遺構面は、9区の上段部では縄文時代早期の有舌尖頭器や弥生土器、須恵器など、比較的古い 時期の遺物がみられた。しかし、それ以外は中世の土器が主で12~15世紀の年代が与えられる。



9区第1面の遺構(第50図、写真図版21)

9区は北側中央のみが一部突き出し、それ以外は南北に長い平行四辺形の形状をなす。北側が曲線的なのは、 北側にカーブを描く道路があるためである。北西辺は 12 区と、西辺は 10 区と接する。第 1 面標高は、南東端で T.P. +223.5 m、北東端で T.P. +232.4 m、10 区との境界付近で T.P. +236.0 mである。

北西部約4分の1は、10区から継続する近現代に造成された棚田の段がそのまま段状に残る。当初はこれ



より東や南へ続く緩やかな傾斜の地形だったと推測されるが、後世に人工的に削平されたと考えられる。上 段部では2層の堆積が厚かったが、それ以外では盛土を除去するとすぐに3層の堆積が始まる。下段部は西 から東に、南から北へ低くなる自然の段地形をとるものの、段は明確でない。この区域に広く3層が堆積し ていた。

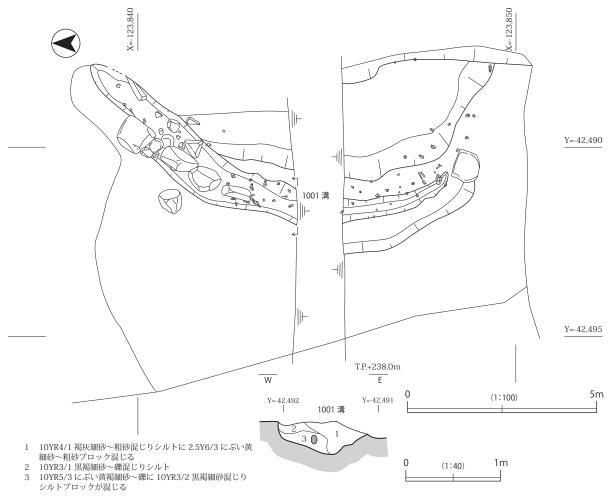
また、11 区からの傾斜で落ちてきた自然石がここで集積したとみられ、多数の自然石が検出された。石は 人頭大から畳ほどの大きさまで様々である。石の上面を平坦に加工したり、ノミ状工具痕がみられるものが あるが、これは近現代の棚田造成時に盛土してから平らにするため施されたものと考える。

10 区第 2 面の遺構 (第 51 ~ 53 図、写真図版 23・24)・**11 区第 2 面の遺構** (第 51 図、写真図版 26・27)

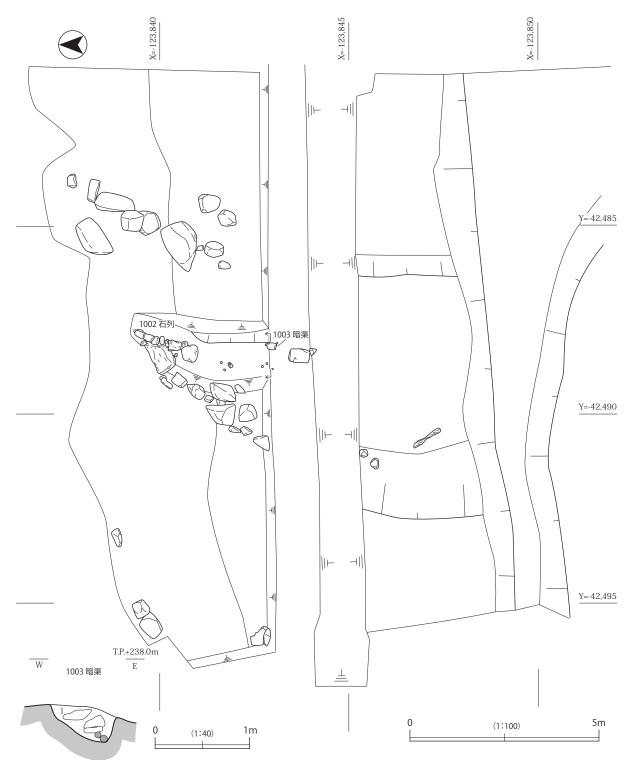
10区の第2面と11区の第2面は調査区をまたがって連続する遺構(1004棚田)を検出したので、各々第2面が対応すると判明した。

11 区は X=-123,825 以北、Y=-42,515 以西では近現代の棚田の段が残り、盛土を除去すると竹管をつないで樋にした暗渠が東西南北に巡らされていた。また、Y=-42,515 以西の南側部分では機械掘削より下層は脆弱な粘質土となり、地山も検出できない状態になっていた。溜池などがあったか、西側の道路造成時に大きく撹拌されたためとみられる。よって、調査は Y=-42,515 以東で行うこととした。

 $X=-123,810\sim-123,840$ の間は盛土と 2 層を除去すると、ほぼ地山となった。棚田の段は消滅したが、西から東へという地形の傾斜はそのまま残る。 X=-123,810 より北 7 、 8 m幅と X=-123,840 より南



第52図 10区第2面1001溝・石列平・断面図



1 10YR4/4 褐細砂〜粗砂混じりシルト

第53図 10区第3面平面図・1003暗渠断面図

約 10 m幅に、西から東への深い谷筋が入る。 3 層上面の高さは、中央では T.P. + 239.7 m、西端では T.P. + 239.2 m、北端では T.P. + 238.9 mである。

11 区の北側の谷は、褐灰色シルト層が堆積し、南の地山面より $0.4 \sim 0.5$ m低くなる。谷の下降し始めた地点で、調査区より東に延びていくと予想されるが、道路を隔てた 12 区の南側にシルト層の堆積が認められるので、これが谷の続きとなるのであろう。中央の地山が露出した部分は、そのままほぼ平行に 10 区に続き、11 区から 10 区へと下降していく。

3層上面の高さは、10 区の西端では T.P. +237.7 m、北東端では T.P. +236.2 m、南東では T.P. +236.0 mである。11 区の南側の谷もほぼ同じ幅のまま 10 区へと、西から東に下降していく。10 区の東端、 Y=-42,480 以南では谷はやや広がる。3 層上面の高さは、最も高い Y=-42,515 地点で T.P. +239.8 m、10 区と 11 区の境界で T.P. +237.6 m、10 区の東端で T.P. +236.0 mである。

1004 棚田(第 51 図、写真図版 23) 南側の谷部分の調査区範囲内で、南東隅を要とする扇形の段が 6、7 段確認された。段と段の間隔は規則的で 5 mが多数であり、 $Y=-42,490 \sim -42,500$ では 10m となっているのは、調査区境で 1 段とんだ可能性が高い。段と段の比高差は $0.1 \sim 0.2$ m程度である。段の向きは正方位でなく、調査区の自然形状にあわせた結果、やや角度を振って南東を起点としていると推測できる。

段の下方、Y = -42,490 では段のカーブに沿って、1001 溝とその中に配列された石列や杭列を検出した(第52 図)。形状、水利施設をもつことからも、これらの段遺構は棚田と判断し、1004 棚田と呼称する。

11 区の棚田の上段部で、黒色土器 A 類椀や瓦器椀が出土している(第 69 図 191、192)。瓦器椀の年代から棚田は 13 世紀初め以降と考える。同じ第 2 面でも、地山部分上の包含層では、13 世紀以降の青磁碗などの陶磁器が多く出土している(第 69 図)。地山部分は南の棚田部分より長期間存続していたか、棚田廃絶後に造成が行われた際に、新しい時期の遺物が混入したと考えられる。

1001 溝(第 52 図、写真図版 23) 棚田の 5 段目から 6 段目に落ちる $X=-123,840 \sim -123,850$ 、Y=-42,490 付近で検出した。段のカーブに沿って東を中心として、南北に孤を描くように延びる溝である。全長 11.0 m、最大幅 0.9 m、深さ 0.3 mをはかる。断面は逆台形で、埋土は上層の土(2 層)に粘土ブロックを含み、人為的な埋め戻しがあったことが分かる。溝の中には礫や自然石があり北側の石は配列しているようにもみえるが、それ以外は不明である。溝の中や周辺には木杭が突き立っていた。また、杭と杭の間に横木とみられる木もみられた。1001 溝は、畔と畔の間に設けられた、排水の機能を兼ね備えた溝だったと判断する。

10 区第3面の遺構(第53図、写真図版24)

11 区は第 2 面で調査を終了した。それに続く 10 区は南側の谷部分が急激に深くなっていき、 3 層が約 3 m堆積する。断面観察からも数時期にわたって棚田の形成が確認された。あるいは、足跡の踏み込みによって生じる砂層が残る機能面が認められたため、第 4 面まで調査を行った。しかしながら、掘削を繰り返したのは南谷部分に限定されるため、第 3 面はその部分のみの図示にとどめた。

第2面の1001溝とほぼ同じ位置で、1002石列と1003暗渠を検出した。

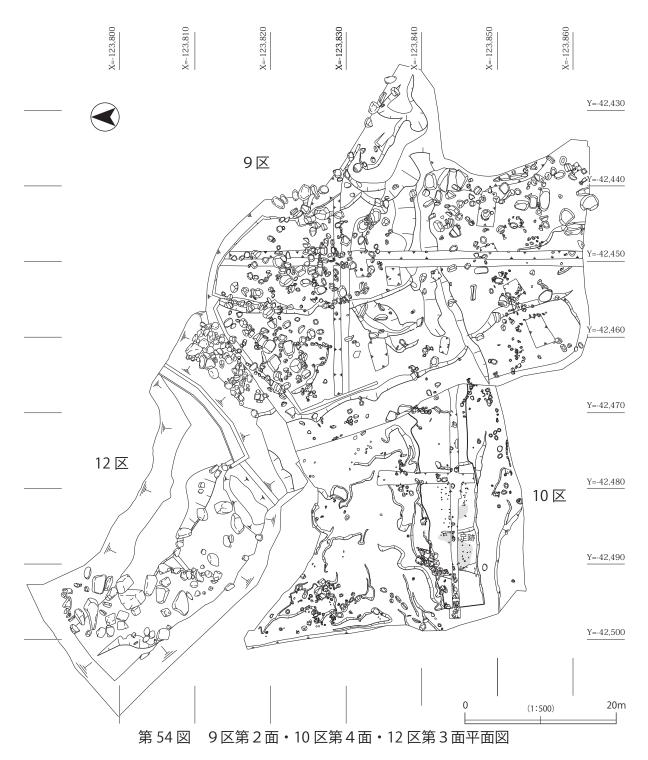
1002 石列・1003 暗渠(第 53 図) $X = -123,840 \sim -123,843$ 、 $Y = -42,487 \sim -42,490$ 付近で検出した。1001 溝と同じく段のカーブに沿って、円弧を描くように石が配列されるのが 1002 石列である。長さは 1001 溝の北半分ほど、約 5 mである。石は人頭大ほどの石を並べた後、隙間や下方に小石や礫を敷き並べているようである。

1002 石列の東側は段をなし、段の落ちで第2面1001溝の名残のくぼみか、あるいはその下層に作られた溝を検出した。溝の最下層には細い木が並べられ暗渠を構築していた。

10区の第3面も第2面ほど明確ではないが、西から東に下降する段をもち、棚田を形成していたと思われる。また、棚田の平面部分にはところどころで足跡がかたまってみられた。

12 区第 2 面の遺構 (第 49 図)

12 区は 11 区と道路を挟んで北に位置し、東辺は 9 区の北西部と接する。北側の山の山裾がおよそ半分のところまで迫り、地山が露出していた。また、道路や用水路の造成により、大きく撹乱を受けていた。調査



区の南半でみられた3層は西から東へ下降し、11区の北端で検出した谷の続きと思われる。青磁や須恵器が出土した。

第 2 項 9 区第 2 面 · 10 区第 4 面 · 12 区第 3 面 (第 54 ~ 56 図、写真図版 22 · 25 · 28)

11 区は第2面が最終遺構面だが、それ以外の区では第49図の遺構面以降、9区は第2面、10区は第4面、12区は第3面まで調査を行った。地山までを検出し、遺構面として捉え一つの平面図にまとめた(第54図)。地山を検出した面という点では11区の第2面も対応することになるが、南西部にある棚田遺構の連続性を表現するため、第49図にまとめた。



11 区や 12 区の西側から東に低くなる地形をとる。10 区の南半、12 区の南半に谷が走り、9 区に入ると それが合流したように、X=-123,840 以南や Y=-42,455 以西の段上に高い部分を残しながら、3 層が 一面に広がって堆積する。10 区の南半で棚田の名残を検出した以外は、顕著な遺構は検出できなかった。

9 区第 2 面の遺構 (第 55 図、写真図版 22)

上述のように X=-123,840 以南は自然地形を活かして、段状に高くなる。さらに、Y=-42,455 以西の部分がその上に棚田が造営されていたようで、東西幅 $5\sim9$ mのテラス状に段を形成する。この高い部分



第56図 10区第4面平面図

には2層が堆積し、近世の陶磁器などが多く含まれていた(第69図)。

9区第2面の標高は、上段北西部では T.P. + 234.6 m、南西部では T.P. + 234.5 mあるが、北端 Y = -42,460 あたりでは T.P. + 232.3 mとなり、中央部では T.P. + 232.2 mである。北東部では T.P. + 231.7 m に、東端では T.P. + 232.9 mに、南東部になると T.P. + 231.6 mになる。

段の下部、X=-123,840 以北では 3 層が一面に広がったように堆積するが、厚さは一定でなく、3 層を掘削していくと、10 区の北半に続く中央部分は地山が早くから露出し、X=-123,830 位から北側では 3 層が 1 m以上堆積する谷となる(第 11 図参照)。

南北方向でも Y = $-42,455 \sim -42,470$ でみられたテラス状の段の次に、Y = $-42,455 \sim -42,440$ あたりにも比高差 $0.1 \sim 0.2$ mの段が認められる。これも近現代以前の、棚田の名残と考えられる。

9区では棚田の段以外は自然地形の傾斜や窪みが認められたのみで、顕著な遺構は検出していない。しかし、 小石、礫から、長さ2、3mの巨石と呼べるほどの自然石が多数検出された。特に低いところに密集してお り、これは9区より高い12・11・10区か、さらにその上から落ちてきた石が9区に自然と集まったためと 考えられる。大きな石の中には、上面にノミなどの加工痕が残されているか、平たく切断されたものもあった。 これは後世棚田を造成する際に、盛土をかぶせ平坦面を作る際に、石を除去する代わりに飛び出る部分を切断したものと思われる。

出土遺物は同じ上段部からは、2層で近世の陶磁器が出土していたのが、3層では弥生土器や須恵器などが出土し、古代・中世の土器が少ないのが特徴である(第69図)。対して、下段部では中世の土器や、砥石、開元通寳や紹聖元寳などの10世紀から11世紀初鋳の銅銭が含まれる(第70・71図)。よって、9区第2面は11世紀以降の遺構面と思われ、他の調査区、例えば5・6区の第3面よりやや古いと推測できる。

なお、包含層中から縄文時代早期の有舌尖頭器が 1 点出土した(第 71 図 210)。上からの流れ込みであろうが、 $1 \sim 4$ 区で出土した縄文土器と同時期か、先行する集団のものである。 9 区の南側や 11 区の東側に縄文時代早期から人が住んでいたことを示唆するものである。縄文土器は出土していない。

10 区第4面の遺構(第56図、写真図版25)

10区は第3面と同じく北半分は第2面掘削時に地山まで到達しており、遺構面として第4面を確認したのは南半の谷筋の部分のみとなる。

この谷部分で第2面や第3面とほぼ同じ位置にやはり段が確認され、少なくとも4、5枚の棚田があることが分かった。段の上段数段には人の足跡も確認できた。

段は西から東に低くなる。段と段の比高差は 0.1 m前後で、最上段では T.P. + 236.4 mあるが、中段の Y = -42,485 あたりになると T.P. + 235.8 m前後となり、最下段の Y = -42,470 あたりになると T.P. + 235.2 m前後になる。

地山から谷への境界では上から滑落してきたような自然石がみられたが、第2面や第3面のような人為的に配された石列や溝などの遺構はみられなかった。また、11 区、10 区から下降してくる棚田の続きは9 区の最終面までいたっても確認できなかった。ただし、9 区の西端、Y=-42,460 辺りでは、自然地形としても南北方向に大きな段がついており、ここまでは棚田が連続していた可能性はある。

第4面の遺物は9区に近い下段部から多く出土している(第69図)。近世の染付磁器は混入と考えると、 白磁碗や緑釉陶器なので古代末から中世前半の遺構面と考えられる。

12 区第3 面の遺構 (第54 図、写真図版28)

3層の掘削を進めると、北側の山裾はより中心まで延びてきて X=-123,810 を越えた辺りまでは、地山が露出する。傾斜はよりきつくなり、北から南、西から東にかなりの勾配をもって傾斜する。西端で T.P. + 239.0 m、中央で T.P. + 237.5 m、南東隅で T.P. + 236.0 m、東端中央で T.P. + 234.0 m、北東隅、9区との接点では T.P. + 231.2 mである。山裾近くでは長さ 3、4 mの巨石もみられるが、3 層の堆積が残る部分では拳大や人頭大の石が南北の列に並ぶところも見受けられる。これは棚田などの段や縁部の石と考えられ、耕作地として利用されたことを示すものだろう。

12 区は3 層掘削中に須恵器などの比較的古い時期の土器が若干出土している(第 69 図)。ただし、12 区は東西南北とも後世の道路や用水路造成工事の際に大きく撹拌を受けて、包含層でも上層の土は除去されており、比較的下層の土やそれに含まれる遺物が残っていたためとも考えられる。他の調査区と同様、第 3 面は主に中世に機能した遺構面だろう。

第4章 調查成果(遺物)

第1節 1・2区の遺物(第57・58 図、写真図版 30~37)

1・2・11 は機械掘削中に出土した。

1は1区で出土した陶器製のミニチュア擂鉢である。ロクロ成形される。復元口径 6.0 cmの小片であるが、 片口や内面の擂目が確認でき、備前などの当時広く普及していた擂鉢を模倣した製品と思われる。 2 は 2 区 耕土層で出土した、陶器碗底部である。胎土や色調から唐津系陶器であろう。 11 は 2 区耕土層から出土した、 瓦質土器羽釜の口縁部から鍔部である。 鍔部から上の口縁部が短く、内傾する。機械掘削した耕土層(1 層) に含まれる遺物は中世後半から近世のものである。

3から10、12、13は2区の第1面から第3面、2層から出土した遺物である。

3は白磁碗底部である。底部から体部が外に向かって直線的に開く。4は陶器おろし皿底部である。内面 底部に4列のおろし目が確認できる。全体に緑灰色の釉薬で施釉され、内面見込みに鉄釉で文様が描かれる がわずかしか残っていない。

5 は陶器碗底部である。すべてロクロ成形される。全面浅黄色の釉薬で施釉されるが、高台は露胎で成形 時の粘土の削りカスがつくなど、やや粗雑なつくりである。

6 は灰釉陶器底部である。胎土は須恵器より軟質で灰黄色を呈し、精良である。高台と底部の境目は明瞭でなく、断面三角形の高台がつく。

7 は陶器皿底部である。素地は淡赤橙色を呈し、淡緑色の釉薬で内外面とも施釉される。胎土や釉薬の色調から伊賀や信楽など東海系陶器と思われる。底部外面にはヘラケズリが認められる。

8は須恵器杯底部である。胎土は精良で暗青色を呈する。断面が平行四辺形の高台がつく。

9は瓦器椀である。口径が小さく、器高が低く、外面、内面見込みのミガキもみられないことから、和泉型 $\mathbb{N}-1\sim2$ 型式、13世紀前半の年代が与えられる。10は土師器皿である。底部から口縁部は緩やかにたちあがり、端部は丸くつまみだす。12は土師器甕である。口縁部は体部から直角に近い角度で屈曲し、口縁端部は上につまみあげる。内外面ともタテハケメの後にナデを施す。

13 は須恵器のこね鉢□縁部である。いわゆる東播系須恵器で、□縁部の肥厚具合から第Ⅲ期1段階、13世紀初めから前半のものと考えられる。

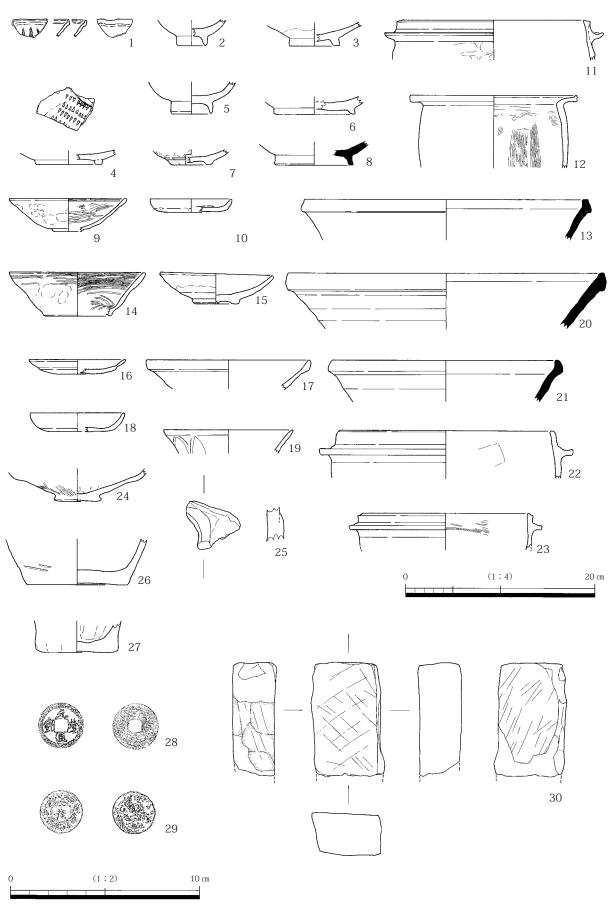
以上の土器は主に2区の西側下段部、2層が厚く堆積し、上面に鋤溝などの耕作遺構が認められた範囲から出土した。よって、2区の2層は13世紀から近世までの間に堆積した包含層といえる。

14から23は2区の3層下部、第4面から第5面で出土した。

14 は瓦器椀である。口径、器高ともかなり大きく、椀より鉢と呼んだほうがいいかもしれない。口縁部から底部にかけて直線的であり、底部で急激にすぼまる器形をとる。形骸化した高台を貼り付けた痕が残る。内面は体部上半 2分の 1 位までと、見込みにもミガキが認められる。外面は口縁部にのみミガキを施す。和泉型 \mathbf{III} -2型式相当か。

15 は陶器皿である。口径 12 cm弱で、底部は厚く、削り出し高台である。にぶい黄色の釉薬を流しかける。 唐津系陶器であろう。

16・18 は土師器皿である。16 は体部から口縁部が緩やかにたちあがる。16 と 18 は口径がほぼ同じで、



第57図 1・2区出土遺物実測図

16 は口縁部を斜めにつまみあげる。18 は器高が深く、底部から垂直に体部がたちあがる。

17 は白磁碗口縁部で、白磁碗Ⅳ類である。いわゆる玉縁口縁だが、さほど肥厚しない。もう一片白磁碗口 縁部が出土している(写真図版 36-4)。

19 は青磁碗である。端反口縁で体部外面に陽刻で鎬蓮弁文を施す、龍泉窯系の輸入磁器である。

20・21 は須恵器こね鉢である。東播系須恵器で、2点とも口縁端部が丸くおさまり、20 はやや肥厚する。 Ⅱ-2段階、12世紀末から13世紀初め頃の時期が与えられる。

22・23 は瓦質土器羽釜である。22 は口縁部がやや内傾し、体部は外に膨れ気味である。23 は口縁部がほ ぼ直立し、体部はすぼまる器形をとる。内面にはヨコ方向のハケメの痕跡が残る。

24・26は1区西側下段部、3層から出土した。

24 は弥生土器の底部である。底部から急激に広がる体部下半をもち、中期から後期の壺の一部と思われる。 外面にはハケメの後ナデを施し、内面には工具痕が残る。

25は2区の3層(第4~5面間)から出土した。小形品(ミニチュア)土師質土器竃の庇の一部と思われる。 26 は弥生土器甕底部である。長石、石英等を含み胎土が粗い。調整不明瞭だが、弥生時代中期から後期の ものか。27 も弥生土器底部である。内面に粘土の絞り痕が残る。弥生時代中期から後期のものか。3層下部、 第4~5面間から出土した。

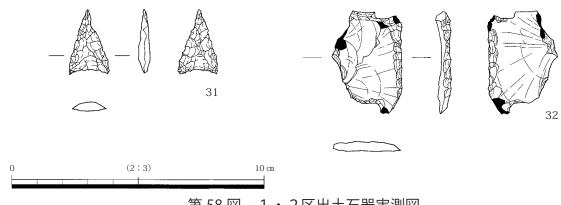
28 は 2 区の 2 層、第 1 ~ 2 面間より出土した。北宋銭で行書体の元豊通寳(初鋳 1078 年)である(写真 図版 46)。元豊通寳は皇宋通寳に次いで多く出土する渡来銭である。

29 は1区の機械掘削中に出土した。一銭青銅貨である(写真図版 46)。錆や腐食が激しいが、表面は「一 銭」の文字の周りを草花文が巡り、裏面には桐文が描かれる。一銭貨幣は青銅貨、銅貨、黄銅貨、アルミ貨、 錫貨とあわせて7種発行されているが、この桐文青銅貨は大正5~13年、昭和2年、昭和4~13年の鋳造 が確認されている。しかし、29は磨滅のため鋳造年は不明である(写真図版 46)。

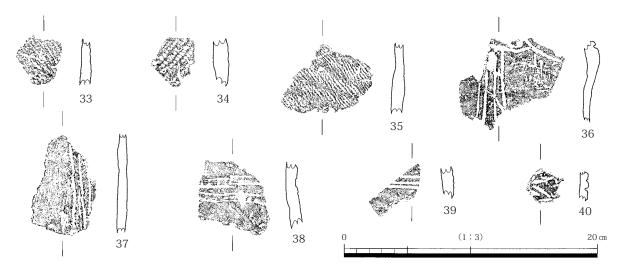
30は1区の北側で機械掘削中、2層から出土した。長方形の砂岩製石製品で、途中から欠損する。表裏、 側面4面共に擦痕があり、砥石と考えられる。

31 は 1 区の第 3 面 41 土坑から出土した。チャート製の平基無茎石鏃である(写真図版 43)。長さ 2.4 cm、 最大幅 1.6 cmをはかる。先端は細いが鋭利ではないのは、磨滅によるか。チャート製の石器も縄文時代に特 有のものである。石材中に赤鉄鉱を含有しているため赤色がかってみえる。

32は2区の第1面〜第2面間、2層より出土した。サヌカイトの石器未製品状のものである(写真図版



第58図 1・2区出土石器実測図



第59図 1区遺構出土縄文土器実測図

44)。長辺の一方向にのみ細かく打ち欠き、刃部調整を施した痕跡が認められることから、スクレイパーなどの製作段階の未製品の可能性がある。ただし、このままで使用されていたとも想定できる。

33 から 40 は 1 区の遺構から出土した縄文土器である (第59 図、写真図版33)。

33 は第3面の49土坑から出土した。深鉢もしくは浅鉢の胴部片と考えられる。右下がりの縄文を施す。

34 は第3面52ピットから出土した。深鉢もしくは浅鉢の胴部片と考えられる。左下がりの縄文を施す。

35 は第3面の53土坑から出土した。深鉢もしくは浅鉢の胴部片と考えられる。右下がりの縄文を施す。 縄文時代早期末から前期初頭のものであるが、器壁が厚いことや胎土の砂粒の含有状態が早期末より前期に 近い特徴をもつ。

36 から 40 は1区第3面71 ピットから出土した。いずれも深鉢もしくは浅鉢の口縁部である。

36 は深鉢口縁部と思われる。4から6個の突起状山形口縁をもつ深鉢の口縁部分の1つにあたると考えられる。口縁端部は欠損し外に膨らむが、胴部に移るに従いすぼまる。外面は口縁部に沿って波状の沈線を、その下の胴部に4条の垂下沈線をもつ、縄文時代早期から前期のものである。

37 も胴部の破片で36 と同様、外面に不均等でいびつな垂下沈線があり、3条みてとれる。縄文時代早期である。

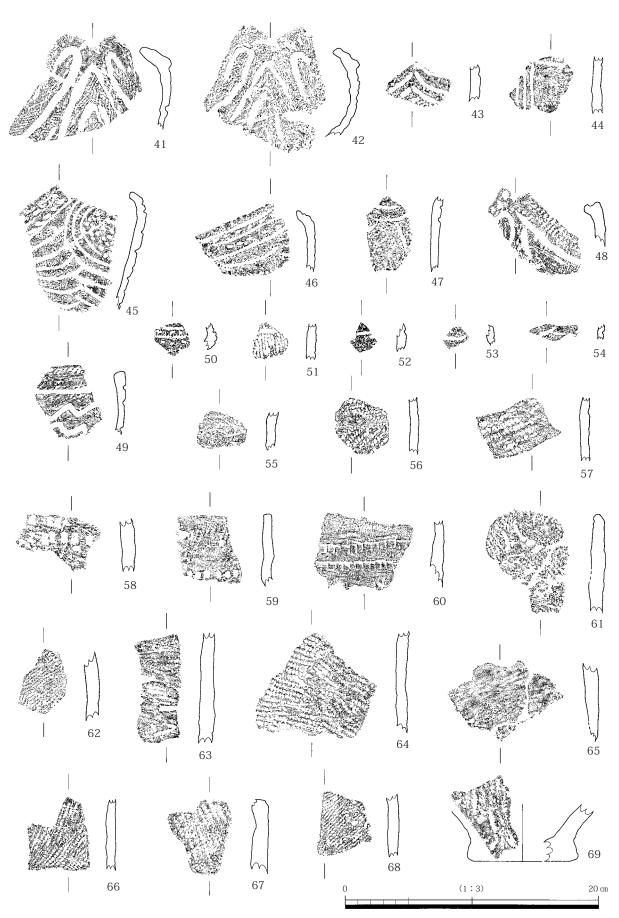
38 は外面に、半裁竹管による 2 段の平行な押し引き沈線をもつ胴部の破片である。縄文時代早期末から前期初頭になる。 1 区の包含層から出土した土器に同様のものがある(第60 図60)。

39、40も同様の小破片であり、39は水平な沈線が3条、40は横位の、波状あるいは花弁状の文様が2帯みられる。縄文時代中期か。1区の第3面の遺構から出土した縄文土器は、縄文時代早期末から前期初頭を主とすると言える。

41 から 69 は 1 区の包含層中から出土した縄文土器である (第 60 図、写真図版 33・34)。

41 と 42 は正確な出土位置等は不明であるが、同一個体の可能性が高い。縄文時代中期末の北白川 C 式土器で、深鉢の突起状山形口縁部である。口縁端部が斜め内側に折り曲げられ、41 の胴部は垂直に近く、42 の胴部は内側へ湾曲しながら延びていく。撚糸縄文の後、口縁部は突起にそって 1 条の曲線状の沈線が入る。外面は太い沈線で山形の線が 2 条入る。器壁が薄く、滑らかに仕上げられている。

43 は口縁部片で、上端は欠損する。外面に山形の沈線を3条ないし4条施す。縄文時代中期末の北白川C 式土器である。



第60図 1区包含層出土縄文土器実測図

44 は深鉢で、第 59 図 36 と同様に胴部外面に 1 条の横位沈線とその下に 3 条の垂下沈線をもつ。縄文時代早期か前期の土器である。

45・46 は深鉢口縁部で、口縁端部は内側に短く折り曲げられる。45 は波状口縁をもつ深鉢で、外面は口縁部と胴部の間に多重沈線による連孤文を巡らし、楕円形の区画内と口縁端部の3条の沈線の間には細かな刺突文がみられる。縄文時代中期でもやや古いものとなる。

46 は口縁端部に水平な沈線が3条施され、1本目と2本目、2本目と3本目の間に刺突文が認められる。 その下にはわずかに連孤文がみられる。 $45 \cdot 46$ とも下段部、3層よりの出土である。45 と 46 は同一個体の可能性が高い。50 も $45 \cdot 46$ と同一個体の破片と考えられる。

47 は 41・42 と同じく縄文時代中期末、北白川 C 式土器深鉢の突起状山形口縁部と思われる。 2条の平行な沈線の下に「ハ」の字状の沈線がみてとれる。

48 は 41・42 と同様の深鉢山形口縁の一部と思われる。口縁先端が凹み、縄文施文後に、端部に沿った太い曲線沈線が入る。41 から 43、45、46 同様、縄文時代中期末、北白川 C 式の土器である。上段 3 層から出土した。

49 は口縁部片で、端部隆帯に左下がりの刻み目文を施し、その下には 1 条の水平な沈線と 2 条の直線的な波状沈線を巡らす。縄文時代中期の土器だが沈線の入れ方などに、41、42、 $45 \sim 48$ などと比較してやや新しくなる要素をもつ。

51 から 54 も縄文時代中期末の深鉢の口縁部の破片である。ごく小片だが、口縁端付近に水平な直線もしくは波状の沈線がみてとれる。

55 から 57 は縄文時代中期土器の胴部片である。撚糸縄文を施す。48 を除き、41 から 55 までは下段 3 層から出土した。また、49 と 56、57 は第 3 面の下層から出土した。

58から68は縄文時代早期末から前期初頭の土器である。

58から60は口縁部片である。58・59は下段部、3層より出土した。いずれも口縁部と胴部の境にあたるところに押し引き文をもつ。縄文施文後に58は押し引き文を2段に施す。59は右下がりに縄文を施した後、口縁端部から4cm下の口縁部と胴部の境界になる屈曲点直下に押し引き文をもつ。58・59は縄文時代早期中葉の粟津SZ式か。粟津SZ式土器は滋賀県の粟津貝塚などに出土例をもつが、大阪全域をみても出土点数が少ない。

60 は 2 層下部より出土した。平行な押し引き沈線を 2 段にもつ。58・59 の押し引き刺突文が丸いのと比べて、直線的なのが特徴である。これも縄文時代早期末から前期初頭の土器である。第 59 図 38 に似る。試掘調査でも縄文時代早期末とみられる押し引き沈線の土器が出土している。

62から 68 は胴部片である。中期の土器と比べると早期末から前期の土器は器壁が厚く、胎土に角閃石などが含まれ、赤褐色から黄褐色を帯びるのが特徴である。多くは左下がり斜め方向の縄文がみられる。61・63・64 は器壁が厚く、早期末から前期初頭と思われる。ただし、64 は角閃石が含まれていないことから、早期でも前期に近い時期になると思われる。

69 は深鉢底部である。底部から胴部は大きく開く。前期の土器である。第3面の下層から出土した。

3層の下層からは前期の土器が出土するが、その上層は早期末から前期の土器と中期末の土器が出土するなど、各時期の土器が混在している。1区包含層に含まれる縄文土器は、層の上下関係と土器の時期区分が必ずしも一致していない。かなりの長期間にわたって地山の直上で機能していた遺構面があったと考えられる。

第 61 図 70 から第 62 図 81 は 2 区の 215 土坑から一括出土した縄文土器である(写真図版 30 \sim 32)。 いずれも縄文時代中期末、北白川 C 式の深鉢と考えられる。

口縁部、あるいは口縁部から胴部、と器形を一定程度に復元できたのは 70、71、78 と 79、80、81 である。 70 はもう一連の口縁部帯を接合復元したが、図化せず写真の掲載のみにとどめた(写真図版 32)。78 と 79 は同一個体の可能性が高い。

72から77は口縁部の文様体の破片であり、一定程度に復元可能な5個体のいずれかに属する可能性もある。ただし、接合点がみつけられなかったため、文様の特徴的なものを抽出し、図化した。他の胴部片にも接合不能なものがあったが、ほとんどは81の一部と思われる。従って、215 土坑から出土した土器は、口縁部付近から胴部下半位までほぼそろった81の個体と、主に胴部の78、79・80、口縁部の70、71となる(第61・62図)。いずれの個体も底部は存在せず、復元しても完形にはならなかった。これにより215 土坑には完形の土器が埋納されたか、あるいはそのまま投棄されたのではないと判断できる。これはこの土坑の性格を考える上で興味深い。以下、個別に記載する。

70 は深鉢口縁部である (第 61 図、写真図版 32)。口径 40.4 cm、残存高 7.5 cmをはかる。内外面ともに灰色味を帯びた黄色を呈し、口縁端部はまっすぐで、胴部は緩やかに内湾する。口縁部と胴部を隆帯で区分する。口縁部外面は縄文を施した後、太い沈線で水平線と楕円形になる区画文をめぐらす。楕円形の区画の下にはさらに沈線がめぐり、連孤文になる可能性が高い。内面にはユビオサエが残る。

71 は口縁部が反り気味である(第 61 図、写真図版 32)。外面は口縁端部隆帯の下に文様を巡らす。文様の構成は 70 に似るが、水平線、半円状の区画帯とがあり、区画帯の下に 3 条の連孤文が認められる。 70・71 とも沈線の下には左下がりの縄文を施す。縄文の撚りは L R である。

72 も 71 と同位置、同様の文様の口縁部片である。 2 条の円もしくは半円状の区画帯の下に連孤文が認められる。

73から77は楕円形区画帯の破片である。いずれも2条の沈線に囲まれた刺突文がみられる。刺突文の文様は施工具を垂直に突き立ててつけたため円に近いものと横に引いているため文様が流れるものがある。楕円形の区画にも縦長と横長の2種類あったと推察できる。

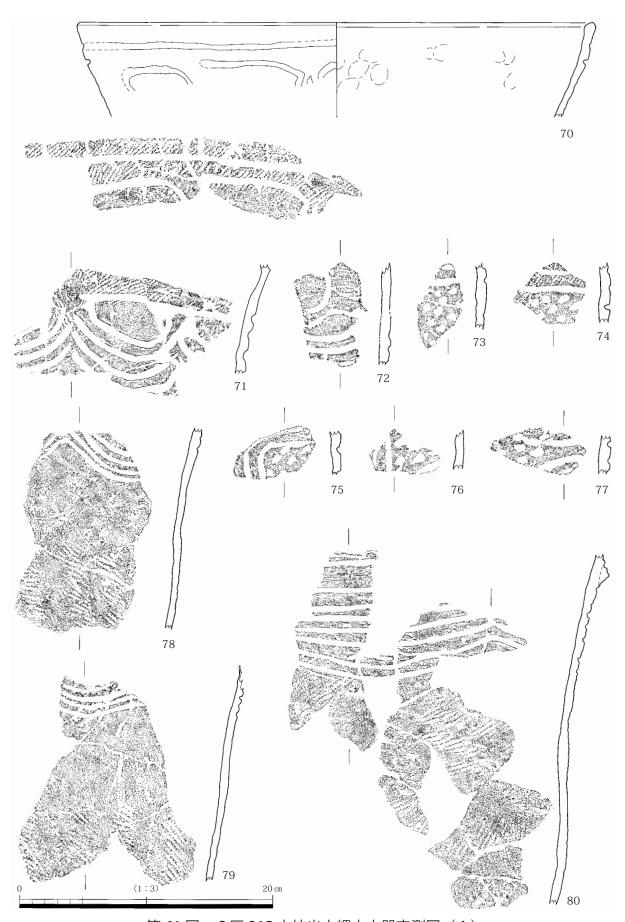
78 と 79 は深鉢の口縁部下部から胴部の部分である。いずれもにぶい黄橙色を呈し、器壁が 0.8 cmと薄い。 4条の連孤文をめぐらす。胴部は右下がりの縄文を施す。79 は右端に他の部分と異なる、縦方向の縄文が認められる。

80 は口縁部付近から体部下半まで残存するが、口縁端部と底部は欠損する。口縁部は隆帯を施し、少なくとも8条の平行な直線もしくは曲線の沈線がみられる。体部は左下がりの縄文を施す。縄文の撚りはLRである。

81 は 215 土坑出土土器中、もっとも残存状況がよくほぼ器形を復元できる個体だが、口縁端部と底部は欠損する。残存部最大径 41.2 cm、残存高 45.1 cmをはかる。口縁部には 7 条から 8 条の沈線を巡らす。沈線は横位で一周を 3 、4 分割する波状文の連続が主であるが、下方は長方形の方形区画や曲線を折り曲げて下の線を続けて描くところもみられる。胴部は左下がりの縄文で、縄文の撚りは L R である。内面はユビオサエのあとがみられる。従来の星田式と呼ばれていた土器である。

82 から 86、88 から 90、92、96、97 は 2 区の包含層より出土した縄文土器である(第 63 図)。82 から 84、90 が 2 層から、85、86、88、89、92、96、97 が 3 層から出土した。

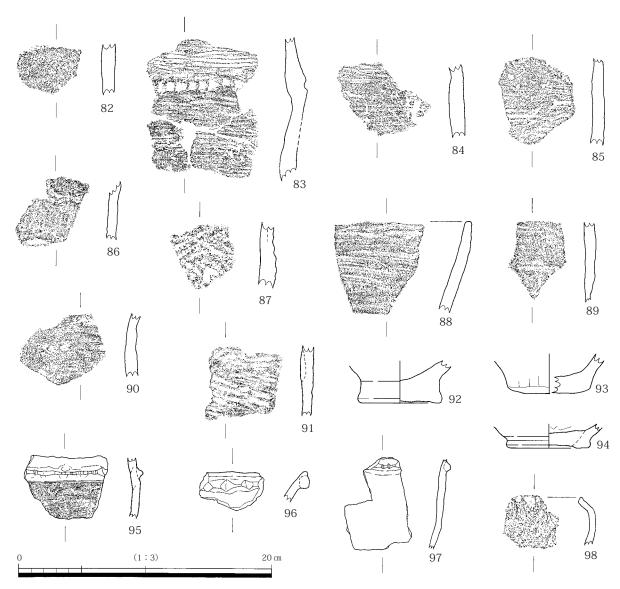
87、91、93、94、95、98は4区から出土した。



第61図 2区215土坑出土縄文土器実測図(1)



第62図 2区215土坑出土縄文土器実測図(2)



第63図 2・4区包含層出土縄文土器実測図

88・89 は縄文時代中期末から後期の口縁部片と胴部片である。

83 は口縁部付近から胴部の破片で、境界が「く」の字に屈曲し、境界線上には半裁竹管側面による押し引き文が施される。器壁が厚く、赤褐色を呈する。縄文時代早期末から前期初頭のものだろう。

84 から 87 も胴部片である。87 は縄文を施す。82 から 87 が縄文時代早期末から前期初頭の土器である。

88から91も胴部片である。角閃石の含有率がわずかで、縄文時代中期末か後期の土器である。

92から94は深鉢の底部である。92は2区3層、93・94は4区2層からの出土である。いずれも前期の土器である。

95 から 97 は縄文時代晩期の土器である。95 は胴部片で、貼付け突帯文に刻み目をもつ。 4 区の 2 層、第 $1\sim 2$ 面間から出土した。96 は口縁部で幅 0.8 cmの貼付け突帯に刻み目をもつ。97 は貼付け突帯文に刻み目を施す。96・97 は 2 区の 3 層、第 4 面~第 5 面より出土した。

98 は口縁部片である。口縁部に刻み目突帯をもち、器壁が薄い。縄文時代前期、北白川下層Ⅲ式にあたると考えられる。

第2節 3~8・13区の遺物(第64~68図、写真図版36~39)

99から126は3区から6区で出土した土器である。

99・100 は 4 区 3 層より出土した瓦器椀である。99 は口径 12.9 cm、器高 3.5 cmをはかる。和泉型Ⅲ-3型式である。外面口縁部と体部の境目に工具痕が残る。100 は 4 区の 3 層下層から出土した。99 より新しく、終末期の瓦器椀だろう。

101 は土師器杯、102 は土師器皿である。101 は第2面 410 溝から出土した。底部から体部が朝顔形に大きく開く器形をとる。

103 は土師器甕の口縁部から体部である。古墳時代以降の甕である。外面はハケメのちナデである。内面もナデであるが、調整がやや雑で粘土紐の継ぎ目痕が残る。

105・106 は 3 層より出土した。105 は東播系須恵器こね鉢である。口縁部は大きく折り返し、端部は丸みを帯びる。第 Ⅱ 期第 2 段階、12 世紀末から 13 世紀初めのものか。106 は瓦質土器羽釜である。口縁部が大きく内傾する。4 区に含まれる遺物は、弥生土器などを除くと主として 13 世紀代の年代が与えられる。

104 は3区山頂部付近の地山の風化した土層から出土した。陶器皿である。浅く、平たく、皿よりは盤に近い器形をとる。淡緑色の釉薬で内外面とも施釉され、胎土が緻密なことから京都産の緑釉陶器で、10世紀代のものと思われる。3区からの出土遺物はこれ1点のみである。

107 から 113 は 5 区、3 層から出土した。107 は瓦器椀である。法量が小さくて高台がなく、ミガキもみられないことから和泉型IV型式終末期の瓦器椀である。108 は瓦器皿である。厚みがあり、ミガキも内面見込みまでみられることから和泉型 II 型式初め段階、12 世紀初めのものである。

109・110 は土師器皿である。口縁部をつまみあげ、ヨコナデを施す。12 世紀後半から13 世紀のものか。 111 は陶器甕口縁部片である。胎土・色調から備前焼と思われる。112 は土師質羽釜、113 は瓦質土器羽釜である。112 は鍔部より少し上に穿孔をもつ。焼成から土師質土器としたが、器形は瓦質土器であり、焼成不良品の可能性が高い。112・113 とも直立する口縁部と段状の鍔部をもつ。

114 から 126 は 6 区 3 層より出土した。114、116 から 118 は瓦器椀である。114 はミガキが判別しがたいが、口径 15.4 cmと大きく、和泉型 I 型式の瓦器椀であろう。118 も内面見込みまでミガキが入り、高台が四角形で張り出すことから同時期のものである。117 はそれよりやや口径が小さくなる和泉型III-3型式段階のものである。115 は土師器椀である。

119 は青磁碗底部である。高台、底部とも厚いのが特徴である。

120 から 122 は土師器皿である。120 は底部から口縁部のたちあがりが直線的である。いずれも口径 8.0 \sim 9.0 cm、器高 1.2 cm程度である。

123 は瓦質土器の甕口縁部である。頸部から口縁部への屈曲が著しい。

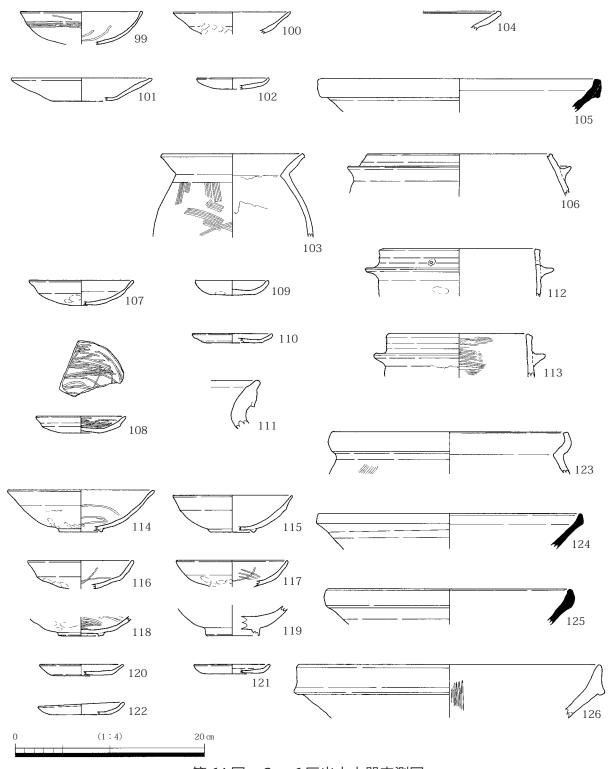
 $124 \cdot 125$ は東播系須恵器こね鉢である。124 の口縁は断面三角形を呈する。125 は口縁部がやや肥厚する。いずれも 12 世紀末から 13 世紀前半のものである。

126 は陶器擂鉢である。7条か8条で1対の擂目をもつ。口縁の折り返しが厚い。備前焼である。

127 から 144 は 7、8、13 区から出土した土器である(第65 図、写真図版 38・39)。

127 から 138 が 7 区から出土した。

127 は磁器碗である。国産の染付磁器で、口径 10.0 cm、器高 5.5 cmをはかる。体部外面にかすかに圏線が 絵付けされる。128 は陶器甕口縁部である。口縁部は段をもって折り返し、外側にむかって開き気味である。

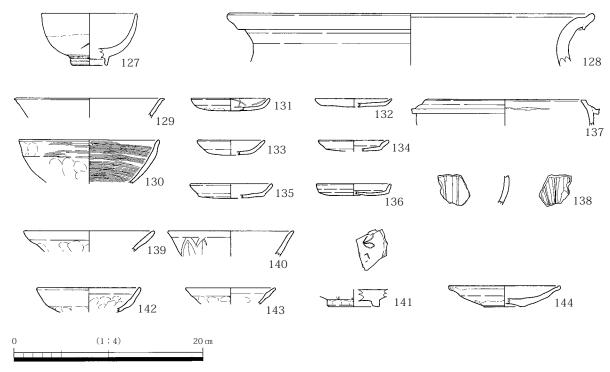


第64図 3~6区出土土器実測図

備前焼である。127・128は2層からの出土であり、近世の遺物と思われる。

129 は 2 層ないしは 3 層で出土した。白磁碗口縁部である(白磁碗Ⅵ類かⅨ類か)。138 は青磁碗である。 口縁部の細片だが、龍泉窯系の鎬連弁文碗である。

130 は瓦器椀である。口径 14.8 cm、器高 4.6 cmをはかる大形の瓦器椀で、内面の見込み近くまでミガキが等間隔に密に描かれる。外面は口縁部にのみミガキが認められる。ミガキの幅は細い。口縁部内面の沈線は



第 65 図 7・8・13 区出土土器実測

みられず、楠葉型 II-3型式、I2世紀中頃から後半のものである。

131 から 136 は土師器皿である。 3 層の上層から下層まで層の上下にわたって出土する。ただし、法量は 口径 $8.0 \sim 8.5$ cm、器高 1.5 cm程度におさまり、上層と下層でも大きな時期差はないといえる。 13 世紀代の ものである。 137 は瓦質土器羽釜である。口縁部と鍔部の間隔が短く口縁部が大きく内湾する。

139から141が8区、142から144が13区から出土した。

139は土師器杯である。体部外面には強くユビオサエが残り、口縁部は外に大きく開く。

140 は青磁碗の口縁部である。体部外面に鎬蓮弁文をもつ。141 は青磁碗の底部である。底部が厚く、高台には縦方向のケズリ工具痕がみられる。見込みには花弁状の文様が施される。

142 は瓦器椀である。口径が 10.7 cmと小さく、ほとんどいぶし焼もされない。終末期のものだろう。143 は土師器杯である。口縁部に強いヨコナデが入る。

144 は陶器皿である。ロクロ形成で、見込みには重ね焼の砂目が残る。灰白色の釉薬が内面と外面口縁部に流しかけられる。144 は近世の国産陶器、おそらく唐津焼であろう。撹乱ぎわの出土であり混入と考えられる。8区と13区の遺物は、144以外は12世紀から14世紀、中世前半期の年代が与えられる。

第66 図では4区から8区、13 区で出土した遺物を示した。145 から150 は4区の西部、3層上部より出土した銅銭ですべて渡来銭である。出土位置は第35 図に示し、法量等の詳細は表6にまとめた。

145 は明銭の洪武通寳(初鋳 1368 年)である。無背である。146 は北宋銭の皇宋通寳(初鋳 1038 年)である。一部欠損する。同種銭には真書と篆書があるが、これは真書である。皇宋通寳は日本に最も多く渡来する北宋銭である。147 は北宋銭の元豊通寳(初鋳 1078 年)である。同種銭には隷書、行書、篆書があるが、これは篆書である。148 は北宋銭の治平元寳(初鋳 1064 年)で真書である。英宗の即位により治平と改元され、治平元寳と治平通寳が鋳された。149 は北宋銭の皇宋通寳(初鋳 1038 年)である。真書である。150 は北宋銭の元豊通寳(初鋳 1078 年)である。行書である。4 区の銅銭は初鋳期が 11 世紀後半から 14 世紀後半

におさまる。

151・152 は 5 区から出土した。151 は 2 層、152 は 3 層からの出土である。151 は南宋銭の紹定通寳(初鋳 1228 年)である。背文は「三」である。152 は北宋銭の元豊通寳(初鋳 1078 年)である。行書である。5 区の銅銭は初鋳期が 11 世紀後半から 13 世紀前半におさまる。

153 から 156 は 6 区から出土した。153 は第 1 面 601 溝、154 は盛土層、155・156 は 3 層、第 1 \sim 2 面からの出土である。

153 は北宋銭の熈寧元寳(初鋳 1068 年)である。真書である。154 は北宋銭の熈寧元寳(初鋳 1068 年)である。真書である。155 は北宋銭の太平通寳(初鋳 976 年)である。真書である。156 は明銭の永楽通寳(初鋳 1408 年)である。真書である。6 区の銅銭は初鋳期が 10 世紀、11 世紀、15 世紀と時期が混在する。

157 は7区の3層中部から出土した。北宋銭の嘉祐通寳(初鋳1056年)である。篆書である。

158 は8区の第2面から出土した。北宋銭の皇宋通寳(初鋳1038年)である。篆書である。

159 は 13 区の 3 層 (第 2 ~ 3 面間) から出土した。不明瞭で、○○○寳と読み取れる。

160 は8区の耕土層(1層)もしくは2層から出土した。一銭銅貨である。直径27 mmをはかる。銅に錫と 亜鉛がわずかに混じる銅貨である。表面には「一銭」、明治の字の周りを菊花と草文が巡り、裏面には中央に 竜の鋳刻と時計回りに「大日本 明治十年 NES 1」の鋳造年銘がある。一銭貨は7種あり、竜鋳刻の一銭銅貨は明治6年から21年まで存在する。

161 は 6 区の 3 層上部、第 $1 \sim 2$ 面間と機械掘削で出土した、木製品の曲物底板である(写真図版 42)。 底板の中央部分で 2 枚に分かれて出土したが、 2 枚の側面に木釘の接合痕がみられることから、出土時の割れではなく割れたものを補修して使っていたことが分かる。左右の両端部分は欠損する。片面には黒漆が塗布された痕が残るが、もう片面には漆の痕跡がない。また、円周側縁に底板と側板を接合する木釘痕が残る。よって、黒漆が外面にのみ塗布された容器の底板と判断できる。さらに、漆を塗布した面にのみ斜めの刃物痕が複数みられ、容器としての役割を終えた後に、俎板に利用された転用品と判断できる。

162 は用途不明の金属製品である。 7区の3層上部から中部で出土した。残存長 12.5 cm、幅 2.8 cm、厚さ 0.4 cmをはかり、両端は欠損する。上部が幅広く、下部が先細りになる。鉄製と思われる。上端が折り曲げられているのは、後からの圧力による。

163 は土錘である。7 区の2 層から出土した。長さ 4.1 cm、最大幅 1.4 cm、厚さ 1.6 cm、重さ 7.2 g の紡錘形で、中心に直径 0.4 cmの孔を穿つ。ナデで仕上げられている。

164 から 169 は 4 区および 13 区で出土した石器である (第 67・68 図、写真図版 $43 \sim 45$)。

164 は凸基有茎石鏃である。 4 区の第1面、 3 層上部から出土した。長さ 4.8 cm、最大幅 2.0 cm、厚さ 0.8 cmをはかる。左右に細かな刃部調整を施す。サヌカイト製である。弥生時代前期から中期のものである。

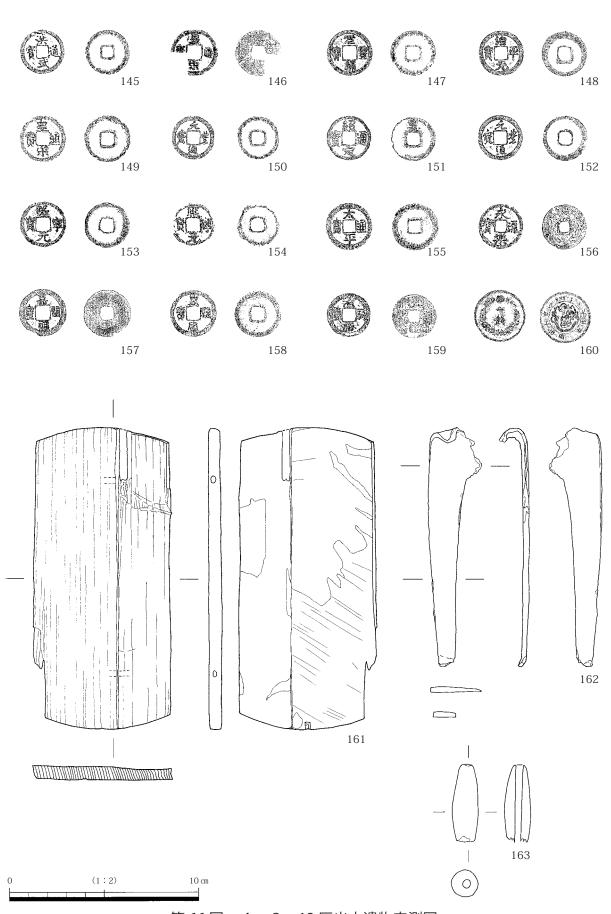
165 は 4 区の 2 層、第 1 \sim 2 面間で出土した。サヌカイト製の凹基無茎石鏃である。縄文時代早期のものである。先端を欠損する。

166 は 13 区中央部の 3 層上部から出土した。サヌカイトの剥片である。 1 面は大きく石を剥離した 3 面ないし 4 面がみてとれるが、他面の大部分は自然面をそのまま残す。形状からはスクレイパーの未製品か。

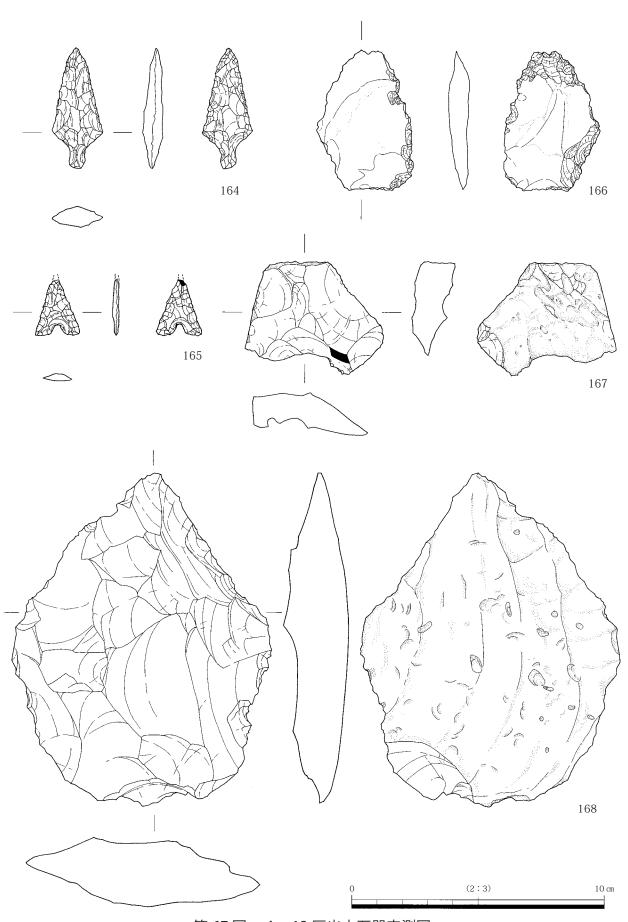
167は4区の2層で出土した。サヌカイトの剥片である。

168 は 4 区中央部の 2 層から出土した。サヌカイトの石核である。片面は風化自然面を残し、他面は大きく打ち欠かれる。

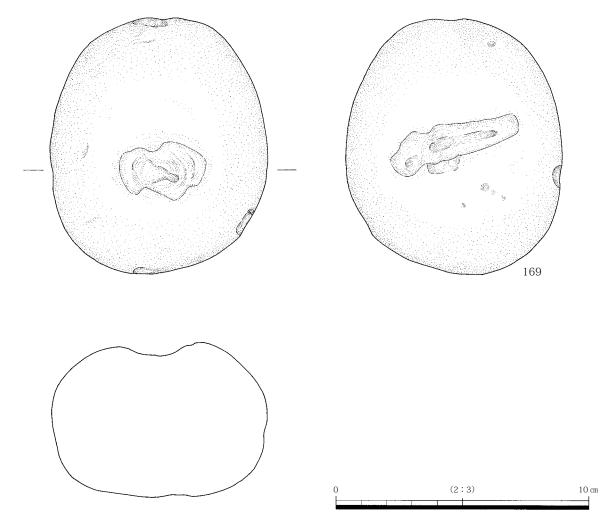
169 も 4 区中央部の 2 層から出土した。砲丸状の石を磨いており、磨石とした。長さ 10.2 cm、最大径 8.6



第66図 4~8・13区出土遺物実測図



第67図 4・13区出土石器実測図



第68図 4区出土石器実測図

cmのやや長円形を呈する。中央には使用によると思われるくぼみがみられる。

第3節 9~12区の遺物(第69~71図、写真図版40~43)

170から178は9区からの出土である。

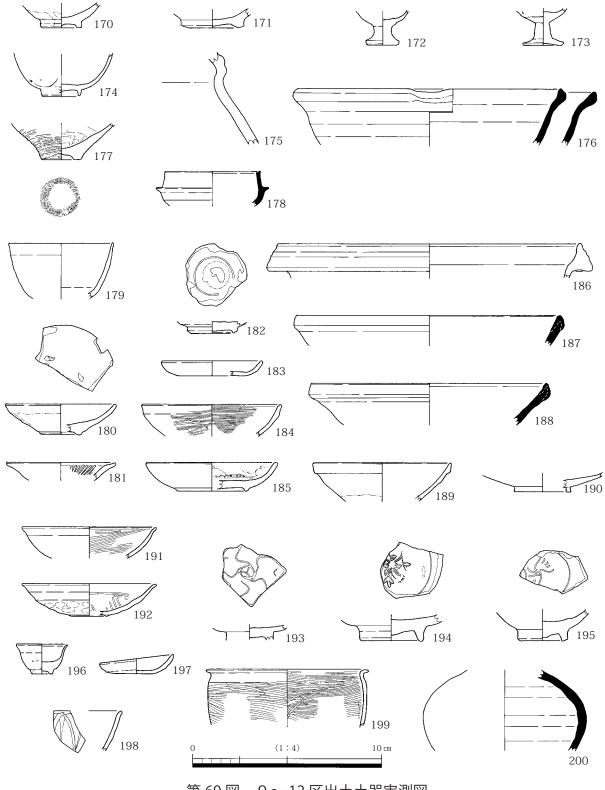
170 は盛土層より出土した。陶器碗の底部である。削り出しの高台をもち常滑、瀬戸など東海系陶器と思われる。

171 は白磁碗の底部である。断面台形の高台をもつ。2層から出土した。

172・173 は陶器と磁器のミニチュア高杯である。どちらも体部下半から脚部が残り、ほぼ同じ法量である。172 は陶器製で、素地は赤橙色の土師質である。底部には回転糸切痕が残る。2・3 層からの出土である。173 は染付磁器で、体部下半と脚部と底部の境界に手描きの細い圏線がみられる。3 層から出土した。

174 は染付磁器碗で、口縁部は欠損するが、それ以外は完存する。残存最大径が 10.5 cm、残存高が 4.5 cm の深い碗器形をとる。体部外面下半に草花文だろうか、曲線状の文様が描かれる。内面見込みには重ね焼痕が残る。側溝トレンチからの出土であるので、2層か3層いずれかからの出土である。

175 は陶器甕の頸部から体部である。常滑焼の甕と思われる。 3 層からの出土である。176 は東播系須恵器こね鉢である。片口部分が残る。口縁端部は肥厚せず、比較的古い段階($11\sim12$ 世紀)のものである。



9~12区出土土器実測図 第 69 図

いずれも3層からの出土である。

177 は弥生土器甕の底部である。体部下半にタタキが残り、底部には、土器成形時に木の葉を敷いた葉脈 痕が残る。弥生時代後期の土器である。178 は須恵器杯身である。口縁部は内傾し、かえりは水平に横にの びる。TK 47型式で5世紀後半から末である。いずれも3層からの出土である。

179 から 190 は 10 区からの出土である。

179 は青磁もしくは白磁の碗である。底部と高台を欠損する。口径 11.0 cm、残存高 5.9 cmを測る。口径に 比して深い器高をとる。 3 層上部からの出土である。

180 は陶器皿である。削り出しの蛇の目高台をもち、朝顔形の浅い椀器形をとる。内面見込みには重ね焼の砂目が 2 点残る。器形、胎土から唐津焼 $\Pi-1$ 期、17 世紀前半のものであろう。

181 は陶器皿である。底部を欠損する。口縁端部は端反で、内面は菊花状の陰刻文が刻まれる。内外面ともにオリーブ黄色の釉薬で施釉されるので、瀬戸系の陶器と思われる。180・181 とも 3 層上部からの出土である。

182 は青磁碗の底部である。削り出し高台で、内面見込みには重ね焼した結果、釉薬の剥がれた箇所がみられる。

183 は土師器皿である。 3 層上部から中部で出土した。 184 は瓦器椀である。口径 14.6 cm、器高 3.4 cmをはかる。口縁部内面に沈線をもち、内面のミガキが密で、外面はやや疎らになる。楠葉型 I-3型式、12 世紀初めの瓦器椀である。 3 層中部から下部から出土した。

185 は染付磁器皿である。内面口縁部には草花文が、口縁部と見込みの境には二重圏線が描かれる。内面見込みにはおそらく5弁の花文が描かれる。底部は蛇の目高台で釉剥げである。地山の直上から出土した。

186 は機械掘削で比較的上層から出土した。陶器擂鉢である。備前焼と思われる。187・188 は東播系須恵器こね鉢である。 3 層上部、第 $1\sim2$ 面間から出土した。

189 は白磁碗である。口縁部を折り返す玉縁口縁の白磁碗Ⅳ類である。

190 は緑釉陶器皿である。胎土はきわめて精良で器壁も薄く、高台も断面四角形の貼付けの輪高台である。 10 世紀前半と思われる。

191 から 197、199 は 11 区から出土した。193 以外はいずれも 3 層より出土した。191 は黒色土器 A 類 椀である。口径 14.2 cm、器高 3.3 cmをはかる。図化していないが、10 区よりもう 1 点黒色土器 A 類椀が出土している(写真図版 40-6)。192 は瓦器椀である。口径 14.2 cm、器高 3.4 cmで、191 とほぼ同じ法量である。高台がほとんど形骸化して、和泉型 $\Pi-3$ 型式、13 世紀初め頃の時期を示す。

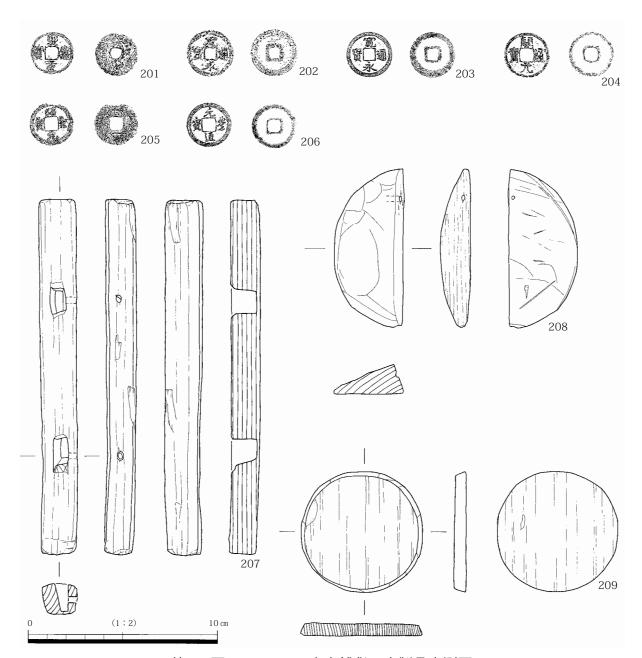
193から195は青磁碗である。いずれも底部の破片である。193は削り出し高台で、内面見込みに陰刻で雷文か、不均等な放射状にのびる曲線の文様をもつ。龍泉窯系の青磁と思われる。194は削り出し高台で、見込みには花文が刻まれる。龍泉窯系の青磁碗IV類である。高台裏は鉄釉が蛇の目状にかかる。195も削り出し高台で、見込みには花文もしくは雷文をもつ。龍泉窯系の青磁である。194がやや大きく、時期的にも新しくなる。

196 は陶器の盃である。ほぼ完形である。灰白色の釉薬が施されるが、外面体部下半から高台は無釉である。 おそらく 唐津焼である。

197 は土師器皿である。ほぼ完形である。左右で高さが極端に違い、いびつな器形をとる。199 は黒色土器 B 類の甕である。口径 16.3 cmをはかる。口縁部はヨコナデによりくぼみ、端部は短くつまみあげる。内面にはハケメを、外面にはミガキを密に施し、器壁は薄く仕上げられている。

198、200 は 12 区から出土した。198 は青磁碗の口縁部片である。龍泉窯鎬蓮弁文碗である。 2 層より出土した。

200 は須恵器壺である。体部上半のみで、口縁部から頸部および底部を欠損する。体部最大径が約 17.0 cm で、横に膨らみ、下半はすぼまる断面楕円形状の形をとる。外面はなめらかだが、内面には回転ロクロナデの段が残る。



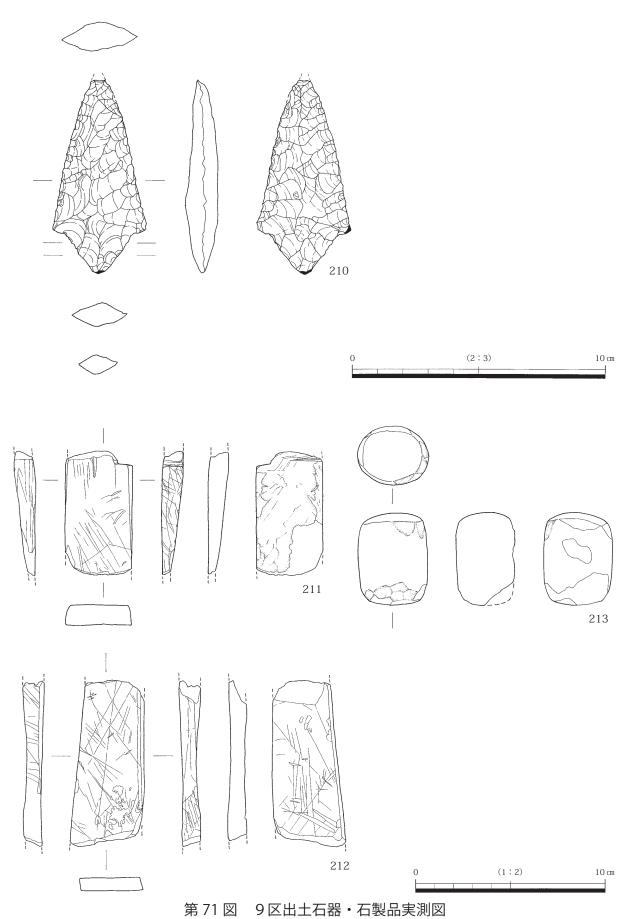
第70図 9~12区出土銭貨・木製品実測図

201 から 205 は 9 区から出土した銅銭である (第70 図、写真図版 46)。

201 は 2 層から出土した。北宋銭の熈寧元寶(初鋳 1068 年)である。篆書である。202 は 2 層から出土 した。寛永通寶(初鋳 1636 年)である。203 は第 1 面上面から出土した。寛永通寶(初鋳 1636 年)である。 202・203 とも無背で、書体から 1668 年以降に鋳造された新寛永と思われる。

204 は 3 層から出土した。南唐銭の開元通寳(初鋳 960 年)である。真書である。205 は 3 層から出土した。 北宋銭の紹聖元寳(初鋳 1094 年)である。行書である。206 は 11 区の 3 層から出土した。北宋銭の元豊通 寳(初鋳 1078 年)である。行書である。出土銭貨の詳細は表 6 にまとめた。

207 から 209 は木製品である(第 70 図、写真図版 42)。207 は 9 区の 2 層から出土した。何らかの部材の一部と考えられる角材状製品である。残存長 20 cm弱、幅、厚みが約 2.0 cmの角材で、 1 面に長さ 2 cm、深さ 1.5 cm程度のほぞ穴を上下 2 箇所穿つ。ほぞ穴に別の角材を組みあわせて使っていたと思われる。この面を表面とすると側面 1 面には木釘が表面の穴とほぼ同じ位置に 2 箇所みられる。



208・209 は 11 区の 3 層より出土した。 208 は円形の板で約 2 分の 1 が残る。直径 8.4 cmの円形に復元できるが、平らではなく中央が最も高く周縁が最も低い断面凸レンズ形をとる。 表面には木を削った加工痕が広く残り、特に周縁は薄くそいで、側板を装着するためかと推定できる加工が施される。

209 も円形の板でほぼ完存する。直径 6.4 cmと 208 よりやや小さい。208 と違ってほぼ平らであるが、上底と下底では下底がやや大きい。曲物底板かと考えられるが、側面に木釘穴が認められない。

210 は9区の3層を除去して地山を検出中に出土した。3層中からの出土だが、9区より南の丘陵から谷に向かって流入したと思われる。サヌカイト製の有舌尖頭器である(第71 図、写真図版 43)。完形で、長さ7.7 cm、最大幅3.7 cm、厚さ1.3 cmをはかる。舌部のつくりだしが明らかになっており、縄文時代早期のものである。有舌尖頭器は縄文時代草創期から早期前半にみられ、槍先に使用したと思われる。身部から茎部へはわずかに内湾しながら移行する。左側縁は両面から、右側縁は片面から縁辺調整をしている。茨木市の塚原 B 地点遺跡や高槻市の群家川西遺跡から、同様の有舌尖頭器が出土している。

211 から 213 は 9 区の 3 層から出土した石製品である (第71 図、写真図版 45)。

211 は砥石で長方形の板状だが、上下端とも欠損する。残存長 6.6 cm、幅 3.5 cm、厚さ 1.1 cmと手に握れるほどの大きさで、目の細かい砂岩なので仕上げ用の砥石と思われる。表面や、2 側面には細かい擦痕が多数残る。

212 は砥石で長方形の板状だが、上端が欠損する。残存長 8.7 cm、幅 3.6 cm、厚さ 1.0 cmと小さく、目の細かい砂岩なので、仕上げ用の砥石と思われる。法量は 213 に類似する。表裏面、側面の 4 面すべてに細かい擦痕が多数残る。

213 は小さな円柱状の製品である。長さ 4.9 cm、幅 3.6 cm、厚さ 3.1 cmをはかる。目の詰まった石を上下は縁をつくるよう加工し、磨いて成形したと考えられる。ところどころに剥離がみられる。握るにはやや小さいが、叩き石として使用としたと考える。薦網の錘(石錘)とも考えられるがその場合は中心に紐を結束する為のくびれや、使用による擦痕が認められるはずだが、見当たらないので、この用途は推測の域をでない。

<参考文献>

泉拓良・家根祥多 1985 「第3部 考察編 第1章 北白川追分町遺跡出土の縄文土器1 中期末縄文土器の分析 」『京都大学埋蔵文化財調査報告Ⅲ-北白川追分町縄文遺跡の調査-』 京都大学埋蔵文化財センター

伊藤栄二 2000 「第12節 栗栖山南墳墓群出土石器の検討」『栗栖山南墳墓群』 (財)大阪府文化財調査研究 センター 井上智博 2008 『讃良郡条甲遺跡VI』 (財) 大阪府文化財センター

岡田憲一 2008 「編年研究の現状と課題④」『縄文時代の考古学 2 歴史のものさし 縄文時代研究の編年体系』 同成社 新海正博他編 2003 『粟生間谷遺跡 - 旧石器・縄紋時代編 - 』(財)大阪府文化財センター

鈴木道之助 1981 『図録石器の基礎知識Ⅲ 縄文』 柏書房

中世土器研究会編 1995 『概説 中世の土器・陶磁器』 真陽社

森屋美佐子・合田幸美他編 1992 『小阪遺跡-近畿自動車道松原泉大津線建設に伴う発掘調査報告書-』 大阪府教育委員会・ (財) 大阪文化財センター

横田賢次郎・森田勉 1978 「太宰府出土の中国陶磁について」『九州歴史資料館研究論集4』

第5章 総括

第1節 千提寺南遺跡における土地利用

これまで第3・4章で千提寺南遺跡の調査成果を大まかに3つの区域に分けてみてきた。そこで、この章 では全体を通して、検出した遺構・遺物から千提寺南遺跡の特徴や性格、どういった土地利用をされてきた かをみていきたい。

前述のように、各区によって2面から5面と、調査した遺構面数が異なる。また、遺構面の呼称も調査順 にそのつど与えているので、隣接する調査区の対応する遺構面でも名称が異なる。一例を示せば、対応する 遺構面が1区第3面と2区第5面となっている。

そこで、各区の遺構面の対応関係をまとめた(表9)。遺構面の呼称は基本的には調査時のままである(4 区のみ、東部、中央部、西部と1つの区を3つに細分したため、区の中でも遺構面数が異なる。本書掲載時 に4区西部の第4面を第2面として表記した)。対応する遺構面は、隣接する区同士、大きな区域では遺構の つながり具合と層位によりおおよそ判断できたが、それより離れた区域同士になると明確には判断しがたい。

また、表示した遺構面の時期についても、耕土や2層が近世を主体とし、3層が古代末から中世、堆積を 除去した地山上の遺構面が縄文時代というおおまかな区別はできる。が、出土遺物が少ないことや、3層の 堆積が厚いが、その層の上下に明確な時期差がみられないことなどから、厳密な時期決定はできなかった。

表 9 調査区遺構面対応表

東	部				中	央	部					西	部	
1区	2区	3区	4 区東部	4区中央	4 区西部	8区	5区	6区	7区	13区	9区	10区	11区	12区
			~中央東	西部										
			部											
第1面	第1・2面	第1面							第1面	第1面		第1面	第1面	第1面
中世~近世	中世~近世	近世							中世~近世	中世~近世		近世	近世	近世
	鋤溝、溝													
第2面	第3面			第1面	第1面	第1面	第1面	第1面	第2面	第2面	第1面	第2面	第2面	第2面
縄文~近世			中世	中世	中世	中世~近世	中世	中世	中世	中世	中世~近世	中世	中世	中世以前
鋤溝、土坑	229 石列		溝、ピット	土坑	410 溝、銭	410 溝	銭	杭列		1302 溝		1004棚田	1004 棚田	
		ļ	、土坑					601 溝				1001 石列		
	第3面下面				(第2面	第2面								
	縄文~中世				中世)	中世								
	215 土坑他													
		ļ			/# a =					# a =			1	
					(第3面	第3面中世	第2面中世	第2面中世		第3面中世		第3面中世		
					中世)	中世	土坑	中世		中世		棚田、1002		
							工机					石列		
	第4面(第	ł	 第2面	↓ <i> 第2面</i>	! <i>第 2 (4)</i>	第4面	第3面	第3面	第3面	第4面	第2面	第4面	ł	第3面
	4 面下面)		▶中世以前				中世以降	中世以降	中世以前	中世以前	中世	中世		中世以前
	縄文~中世		ピット、土	ピット、土	中世	1	石列、溝	足跡、溝	707 杭列					
	?			ı坑	i			、602 · 603						
			!	!	!	!		杭列						
]	第3面	[:									•	
			中世以前											
第3面	第5面													
縄文	縄文~中世													
土坑、ピッ														
٢	土坑、ピッ													
第4面	٢	I												
縄文	1													
	1													
71 ピット	l .													

太字が掲載遺構面、斜字は空撮面

各区の主要遺構面を調査前の地形図に組み込んで、1つの図にまとめた(第72図)。薄いアミフセの部分が谷にあたり、3層が厚く堆積していた。それ以外は地山が露出した状態の遺構面の平面図が主である。また、縄文時代の遺物が遺構・包含層に限らず複数出土した区域を破線で囲って表した。

これをみると、調査区が谷部をのぞいて元来山と山の間の比較的平坦な地域だったことがよく分かる。また、3層の堆積が山裾の伸びてくる狭い範囲に限られることも一目瞭然である。調査対象外となっている箇所は地形に沿って棚田が形成されており、1区から13区も調査前はそうであった。近現代の棚田は調査区全域で形成されていたが、遺構面でみられる中世以前の棚田は部分的に限られる。しかしながら、棚田1枚の区画や形状は近現代の棚田とほとんど相違ない。中世やそれ以前からの生産地としての土地利用があり、後世になると整地してその範囲を広げていったといえる。

現代の棚田の水利状況を総合調査において調査し、図示したものがある。この図の水利の方向(青い矢印で示してあるもの)だけを抽出し、千提寺南遺跡の調査区と重ね合わせてみた(第73回)。その際、水利に関連すると思われる遺構(溝や杭列など)のみを図上におとした。

すると、図中の水の流れは現代の棚田に即したものであるにも関わらず、調査で検出した中世の水利遺構とぴったりと合致する。道路など調査区外から調査区内に取水する箇所に、603 杭列や 707 杭列などの水勢を調節するための遺構がみられるのである。また、229 石列や 10・11 区の棚田の位置も現代のそれと寸分違わないことが分かる。つまり、地形の形状や高低を利用して耕作地を作った結果、中世以降現代まで連続して、ほぼ同じ位置に棚田が形成され、取水、排水施設が作られてきたといえる。

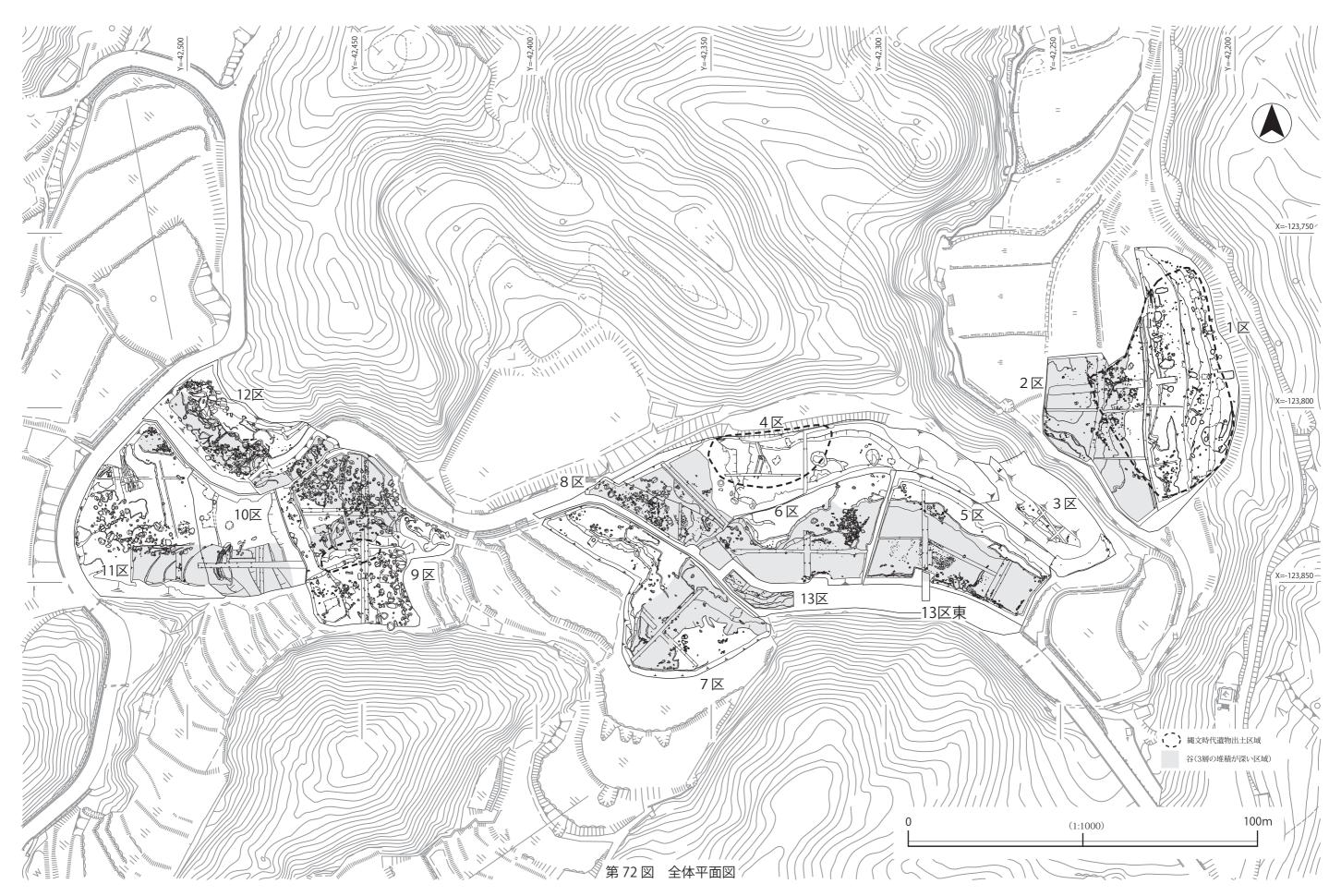
耕作遺構の時期決定は難しいが、出土した瓦器や陶磁器、宋銭の年代から、東部の $1\cdot 2$ 区よりは中央部(3 ~ 8 区、13区)がやや新しく、西部の $9\sim 12$ 区はそれよりさらに新しい印象を受ける。つまり、調査区全域が一斉に耕作地として土地利用されていたのではなく、東から西へと移動したとも考えられる。それぞれの耕作域に対応する生活区域が同時併行していたのではなく、時期を違えて移動していたとも推測できる。

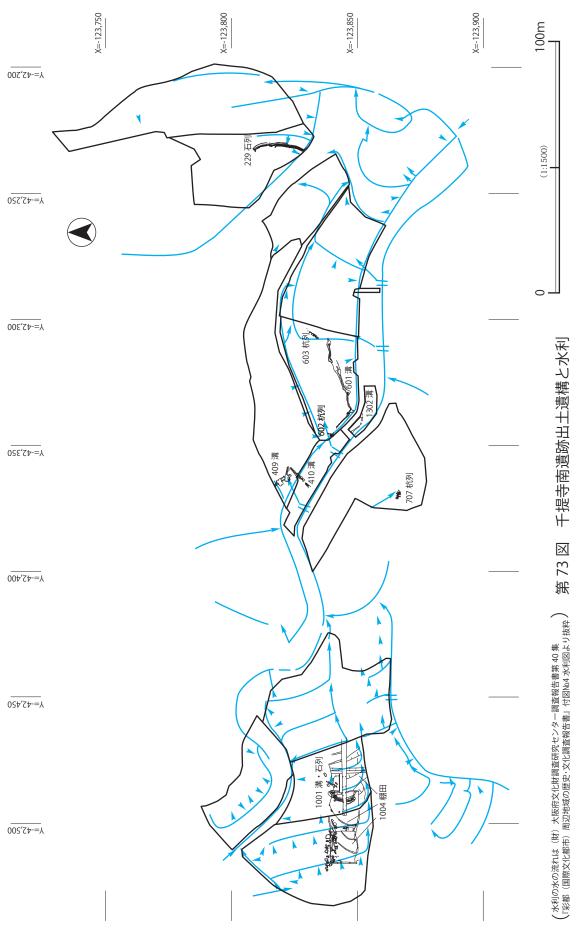
しかし、3層が累層的に堆積し、各区によって検出した遺構面が異なっていたり、銅銭などは使用時期に幅があるので、小地区毎に断絶があったのではなく、連続的に耕作地として利用され、近代以降には盛土や造成によってよりその面積を広げたと考えられる。ただし、今回の調査地では耕作地ばかりで住居址の検出には至らなかった。より離れた地域に当該期の住居域は求められるのだろうか。

縄文時代の遺構・遺物がみられるのは1区全域と2区の北東部、4区の中央北側、9区の一部に限られる。いずれも山に隣接した丘陵地の高いところである。丘陵地を選んで縄文時代の生活区域が形成されていたと考えられる。

ただし、1・2 区では溝や土坑などの遺構が多数検出され、遺物も土坑中に縄文時代中期末の遺物がまとまってみられるが、前期や晩期の土器も出土している。 4 区ではやや古く、縄文時代早期末から前期初頭の土器が主である。 9 区にいたっては、縄文時代早期の石器が出土したが、土器は皆無で遺構も検出されていない。また、土器があることから生活区域と考えるが、検出された遺構は土坑や溝であり明確な住居址などではない。本来の住居区域は隣接する山のもっと高いところにあったと考えるのが妥当だろうか。より高い地域での遺構、遺物の有無等は今後の確認調査などの結果を待ちたい。なお、11 区や 12 区に比較的近い、千提寺西遺跡の浄土墓地区では、山の山頂部に近世以降集落の土葬墓が形成されていたが、そのために削土等があったのか縄文時代の遺構、遺物は検出されていない。

縄文時代より後、古代末、中世までは、わずかに弥生土器や古墳時代の須恵器が出土するのみである。この間は千提寺南遺跡においては、人が積極的に利用する環境になかったといえる。





- 107 **-**

第2節 千提寺南遺跡出土縄文土器の評価

第1項 215 土坑出土縄文土器について

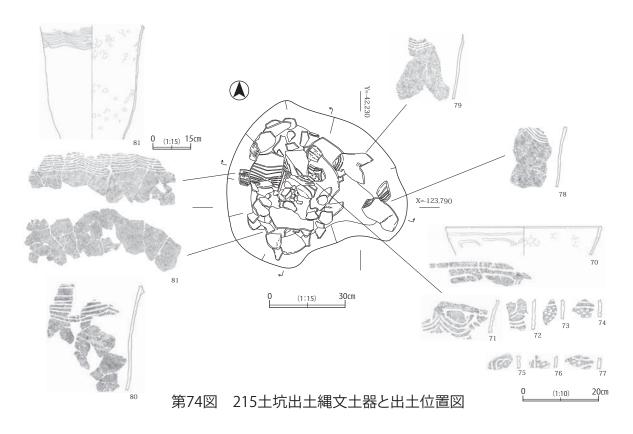
第4章で述べたように、2区の215土坑から数個体の縄文土器深鉢がまとまって出土した。

215 土坑は 2 区の第 3 面で検出した。位置は 2 区の北東部、X=-123,790、Y=-42,230 付近で、地山から急激に下降する谷の始まり部分にあたる。周辺には他にも土坑数基が検出されている(第 $12\cdot 16$ 図)。 215 土坑は長径 0.7 mで長円形の南東部が抉れたような、不整円形の土坑である(第 18 図、写真図版 7)。 検出時の深さは 0.15 mだが、同位置の上層包含層からも 215 土坑の遺物と接合する土器が出土しているので上層は削られ、実際はこれより深かったと思われる。

出土状況図に示した様に、土器がやや西側にかたよって、破片の状態で多数出土した。破片は数cm大のものも、口縁部から胴部へと続いて数十cm大のものもあった。土坑内には焼土や炭化物は認められなかった。

この土坑から複数個体の縄文土器が出土し、あらためて出土状況を図に示した(第74図)。文様のある口縁部が中心に集まっているように見受けられるので、直立正置していた土器が中に倒れこんだ推測が一応は成り立つ。可能性がある79と78は同一個体の可能性が高いので、近い場所にあるのも納得できる。

ところが、これらの土器を復元したところ、最低 5 個体あることが確認出来た(第 61・62 図、写真図版 $30\sim32$)。加えて、遺物を接合してみると、最も器形を復元できた 81 でも口縁部から胴部下半までしか 残っておらず、他のものも口縁部から胴部上半と、底部は全く出土していない。つまり、完形ではない土器 が 215 土坑に入っていたと考えられる。また、口縁部と胴部の間に巡らされた波状文あるいは連孤文と口縁 上端との間の区画帯が、70 や 71 のような半円状のものの他、72 から 77 のような刺突文で表現された文様 帯の破片も出土している。これらは 70 や 71 の一部になる可能性も否定できないが、70 や 71 との接合点が みつけられず、また、これに接合する体部もなかった。つまり、完形の土器が埋納後破損したのでなく、破



片の状態で215 土坑に入れられたと考えられる。

また、215 土坑周辺の他の土坑から遺物は出土していない。これらのことから、215 土坑は意図的に土器を埋納した土坑でも、土器棺などの性格をもった土坑ではない、と考えるほうが妥当だろう。それでは、215 土坑は土器を廃棄するための土坑、あるいは破損した土器を埋めた土坑だったのか。これも全くバラバラの状態で埋まっていたのではないため、一概に言えない。出土した土器はすべて胴部下半や底部がないので絶対的でないが、残存する部位には煤や炭化物の付着は認められず、使用した痕跡がなかった。

なお、215 土坑から出土した縄文土器は、いずれも縄文時代中期末の北白川 C 式に相当する深鉢である。 時期的にも揃った、きわめて良好な一括資料と言えるだろう。 2 区からは遺構、包含層共に縄文時代早期末から前期初頭、あるいは前期、晩期など様々な時期の縄文土器が出土している。また、同じ縄文時代中期末の北白川 C 式土器は 1 ・ 2 区から数点出土している(第 60 図、写真図版 23)。ただし、出土位置が不明確なものや遺構に伴わないものばかりで、215 土坑との関連を認めるのは難しい。

215 土坑のみが一括性のある土器を検出した土坑として他の土坑と区別されるが、遺構の性格や機能は現状において、不確定といわざるを得ないだろう。

第2項 千提寺南遺跡出土縄文土器の時期細分と特徴

大阪府下における縄文土器の出土量は、東日本に比べるとさほど多くない。良好でまとまったあり方を示す縄文土器資料はなおさらである。それは大阪府下の大規模発掘が河内平野の低湿地部に集中していたことや、縄文時代の遺跡は大阪平野をとりまく山地周辺で発見されることも関係していよう。北河内や生駒山麓を中心とする地域などで、比較的好データの縄文遺跡が知られていたが、山間部でも北摂山地は報告資料も少ない。これまで今回の調査地近隣では、試掘や採取による資料しかなかった(第75図)。千提寺南遺跡からほど近い茨木市の泉原の大中第1地点、大中第2地点、堂の前地点や佐保の田中代地点で縄文土器が免山篤氏によって採取され、資料として紹介されている(『粟生間谷遺跡』2003 大阪府文化財調査研究センター)。

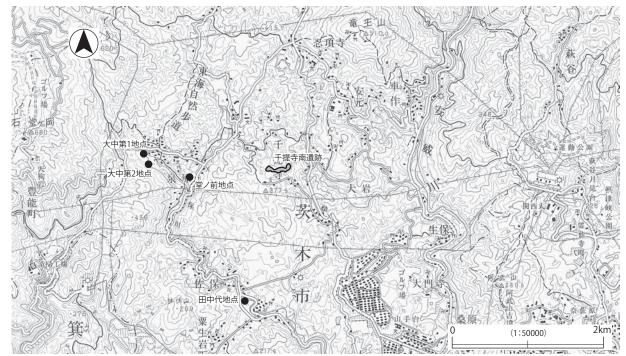
今回の新名神高速道路建設に伴って、箕面市、茨木市、高槻市という大阪府北部の北摂津地域で大規模な 発掘調査が行われた。それらの調査によって、当地域の縄文時代遺跡の解明が進むこととなった。この項で は出土した縄文土器の特徴や時期的な変遷を、近隣で出土した資料と対比して総括したい(第76回)。

千提寺南遺跡周辺では、縄文時代早期後半、高山寺式の体部小片が田中代地点や大中地点から確認されているのが最も古い。次いで、堂ノ前地点や田中代地点で押し引き刺突文の穂谷式の体部片が、堂ノ前地点では黄島式の体部片が出土している。綾杉押型文であり、千提寺南遺跡のとは時期幅を考慮すべきでやや異なる。

千提寺南遺跡出土資料では縄文時代早期末から前期初めの土器がまとまって出土している(58・59・83・61・63 など)。胴部は厚く、角閃石を含み赤がかってみえるのが特徴である。角閃石が少なくなるので前期に近いものもある(64)。また、口縁部で垂下沈線を3条もつもの(36・37・44)も早期から前期と時期幅を考慮すべきものでやや新しくなる。

縄文時代前期では前期後葉の北白川下層Ⅲ式の口縁部片が1点出土している(98)。また、底部片が数点出土する(69、92~94)。堂ノ前地点でも前期の破片が出土している。

やや時期的な断絶があって、縄文時代中期末は前述の 215 土坑から北白川 C 式深鉢の一括資料があげられる (70~81)。他にも 1 区や 2 区の包含層などからも北白川 C 式の土器が出土しており、沈線の入れ方にや や新しい様相をもつものもある (49)。胴部は前期に比べると薄くなり胎土も細かくなって、黄褐色から茶褐色を呈するものが多い。北白川 C 式の土器は、田中代地点や大中地点でもみられる。いずれも多重沈線による重弧文状の文様や波状沈線をもつ。



(国土地理院50,000分の1地図「京都西南部」を使用)

第75図 国際文化公園都市試掘地点及び免山氏遺物採集地点(センター報告書第84集図144をもとに作成)

千提寺南遺跡では、縄文時代後期においては口縁部片などがみられる(88~91)。田中代地点では後期初頭の深鉢口縁部や中津式、北白川上層式の破片が出土している。口縁部などでは、千提寺南遺跡の土器とよく似る資料がみられる。

続いて千提寺南遺跡では、縄文時代晩期において突帯文土器の口縁部等が3点出土している(95~97)。

縄文時代晩期の土器を保留にするならば、周辺の遺跡から採集された縄文土器は細片ながら、千提寺南遺跡のものと似た様相、似た時期を示すことが分かった。つまりは、この周辺一帯の普遍的状況を千提寺南遺跡でもほぼ示していることが解明できた。また、前期と中期末の間などに一部断絶はあるものの、早期末という早い段階からほぼ継続して人間の生活痕跡が確認できた。今後、住居跡などの遺構が発見されれば、より遺跡の解明につながるであろう。なお、田中代地点ではサヌカイト製の石鏃が、堂ノ前地点では平基無茎式石鏃や尖頭器が、大中地点でもチャート製の平基無茎式石鏃などが出土している。石器においても同様の状況を示しているといえるだろう。

〈註〉縄文土器の時期細分については、河本純一(公益財団法人大阪府文化財センター)の教示を得た。

〈参考文献〉

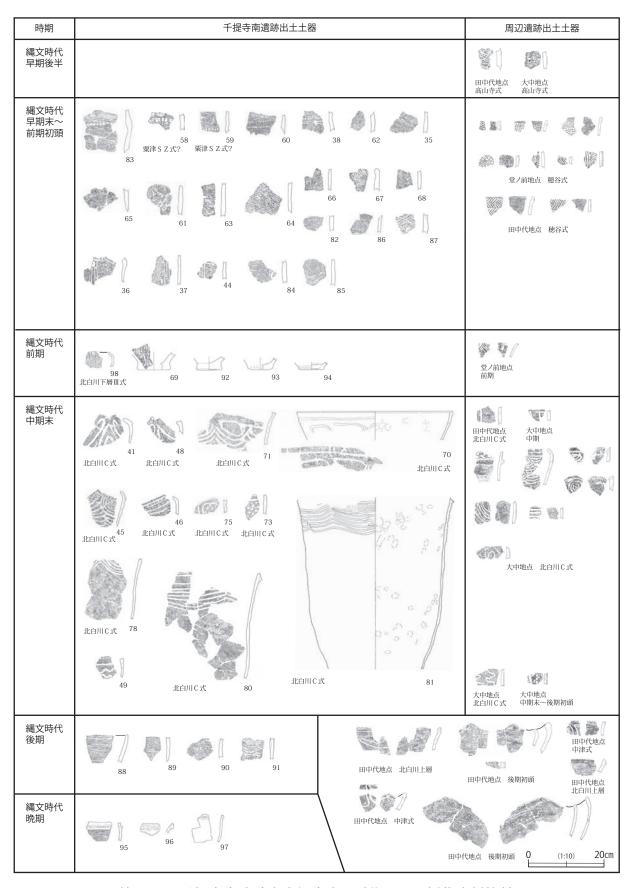
井口直司 2012 『縄文土器ガイドブック』 (株) 新泉社

泉拓良他編 1985 『京都大学埋蔵文化財調査報告Ⅲ-北白川追分町縄文遺跡の調査-』 京都大学埋蔵文化財センター 井上智博 2008 『(財) 大阪府文化財センター調査報告書第 173 集 讃良郡条里遺跡Ⅵ』(財)大阪府文化財センター

新海正博他編 2003 「第 12 章 試掘・免山氏資料」『(財) 大阪府文化財センター調査報告書第 84 集 粟生間谷遺跡―旧石器・縄紋時代編―』(財)大阪府文化財センター

免山篤 1999 「第8章 考古資料よりみた清渓周辺」『彩都(国際文化公園都市)周辺地域の歴史・文化総合調査報告書』(財) 大阪府文化財調査研究センター

森屋美佐子・合田幸美他編 1992 『小阪遺跡 - 近畿自動車道松原泉大津線建設に伴う発掘調査報告書 - 』 大阪府教育委員会・ (財) 大阪文化財センター



第76図 千提寺南遺跡出土縄文土器時期区分と採集資料比較

表 1 縄文土器観察表

() は復元径、〔 〕は残存長を表す

衣		4		·										() 6	は復元径、〔〕は残存長を表す
図版 番号	挿図 番号	遺物 番号	調査区	出土位置	器種	長さ (cm)	幅 (cm)	厚さ (cm)	口径 (cm)	器高 (cm)	底径 (cm)	胎土	焼成	色調	備考
-	59	33	1	第3面 49土坑	縄文土器	(3.8)	(3.7)	0.8				相 径2mm以下の長石、径1mm以下 の雲母、赤色粒を含む	良	外:7.5YR5/6 明褐色 内:10YR6/4 にぶい黄橙色	
-	59	34	1	第3面 52ピット	縄文土器	(3.9)	(3.3)	1.2				密 微細の雲母、径 2 mm 以下の赤色粒 を含む	良	外:5YR5/6 明赤褐色 内:7.5YR5/6 明褐色	
33	59	35	1	第3面 53土坑	縄文土器	(5.4)	(6.9)	1.1				密 径 1 mm 程の雲母を少し含む	良	外:5YR4/4 にぶ赤褐色 内:2.5Y4/4 にぶい赤褐色	早期末~前期初
33	59	36	1	第3面 71 ピット 上位(上面)	縄文土器	(6.3)	(7.8)	1.2				密 径 2 mm 以下の長石、赤色粒、径 3.5mm 以下の石英、微細の雲母を含 む	良	外:10YR6/4 にぶい黄橙色 内:10YR6/4 にぶい黄橙色	早期~前期
33	59	37	1	第3面 71 ピット 上位(上面)	縄文土器	(7.8)	(5.0)	0.8				密 径3mm以下の長石、チャート、径 2mm以下の雲母を含む	良	外:7.5YR7/3 にぶい黄橙色 内:10YR8/4 浅黄橙色	早期
33	59	38	1	第3面 71ピット 付近	縄文土器	(5.2)	(5.6)	1.0				密 径1~4mm 大の雲母を含む	良	外:5YR5/4 にぶい赤褐色 内:5YR4/2 灰褐色	早期末~前期初
-	59	39	1	第3面 71 ピット 上位(上面)	縄文土器	(2.5)	(3.0)	1.0				密 径 2 mm 以下の石英、微細の雲母、 径 3 mm 以下の赤色粒を含む	良	外:10YR6/4 にぶい黄橙色 内:10YR5/3 にぶい黄褐色	
-	59	40	1	第3面 71ピット 上位 (上面)	縄文土器	(2.3)	(2.6)	0.8				密 径2mm 以下の石英、径1mm 以下 の雲母を含む	良	外:10YR7/3 にぷい黄橙色 内:7.5YR6/6 橙色	
34	60	41	1	機械掘削	縄文土器	(5.9)	(5.7)	1.0				密 微細〜径7mm 程の長石、チャート ?を含む		外:10YR8/3 浅黄橙~ N4/0 灰色 内:10YR7/4 にぶい黄橙色	中期末、北白川C式
34	60	42	1	機械掘削	縄文土器	(7.8)	(7.1)	1.1				密 微細〜径3mm 程の長石を含む	良	外:2.5Y8/3 浅黄色 内:10YR6/4 にぶい黄橙色	中期末、北白川C式
34	60	43	1	下段3層	縄文土器	(3.7)	(5.1)	0.8				密 微細〜径3mm の長石、径1〜2 mm の石英を多く含む	良	外:10YR6/4 にぷい黄橙色 内:10YR6/6 明黄褐色	中期末、北白川C式
34	60	44	1	下段3層	縄文土器	(4.4)	(4.7)	0.9				密 微細〜径3mm の長石、径1〜2 mm の石英を含む	良	外:10YR5/6 黄褐色 内:10YR7/4 にぶい黄橙色	
34	60	45	1	下段3層	縄文土器	(9.5)	(7.0)	0.8				密 微細〜径2mmの長石、径2〜5 mmの石英を多く含む、径3mmの 雲母を含む	良	外:10YR6/6 明黄褐色 内:10YR8/3 浅黄橙色	中期末、北白川C式
34	60	46	1	下段3層	縄文土器	(5.8)	(7.3)	0.8				密 微細〜径3mmの長石を含む、微細 〜径4mmの石英を多く含む	良	外:10YR6/6 明黄褐色 内:10YR7/4 にぶい黄橙色	中期末、北白川C式
34	60	47	1	下段3層	縄文土器	(5.9)	(3.6)	0.7				密 微細〜径 3 mm の長石を多く含む、 径 1 〜 3 mm の石英を含む	良	外:10YR6/4 にぶい黄橙色 内:10YR7/3 にぶい黄橙色	中期末、北白川C式
34	60	48	1	上段3層	縄文土器	(5.4)	(6.7)	1.2				密 径3mm以下の長石、微細の角閃石、 径2.5mm以下の雲母を含む	良	外:7.5YR7/6 橙色 内:7.5YR7/6 橙色	中期末、北白川C式
34	60	49	1	第3面下層 — 5~10cm	縄文土器	(5.9)	(4.9)	0.9				密 径 1 ~ 3 mm 大の長石を含む、微細 の角閃石をわずかに含む	良	外: 2.5Y6/4 にぶい黄色 内: 10YR6/4 にぶい黄橙色	中期、やや新しい
-	60	50	1	下段3層	縄文土器	(2.6)	(2.8)	0.8				密 微細の長石、径2mm の石英を含む	良	外: 10YR7/4 にぶい黄橙色 内: 10YR7/3 にぶい黄橙色	中期末、北白川C式
_	60	51	1	下段3層	縄文土器	(3.0)	(2.9)	0.7				密 径 1 mm の長石を含む	良	外:10YR5/1 褐灰色 内:10YR4/1 褐灰色	中期末
-	60	52	1	下段3層	縄文土器	(2.4)	(2.3)	0.7				密 微細〜径 1 mm の長石、径 1 〜 2 mm の石英を含む	良	外:10YR5/6 黄褐色 内:10YR7/6 明黄褐色	中期末、北白川C式
_	60	53	1	下段3層	縄文土器	(1.8)	(2.2)	0.6				密 微細〜径1mmの長石、径1mmの 石英を含む	良	外:10YR6/6 明黄褐色 内:10YR7/6 明黄褐色	中期末、北白川C式
-	60	54	1	下段3層	縄文土器	(1.5)	(4.2)	0.5				密 微細〜径1mmの長石、径1mmの 石英を含む	良	外:10YR6/6 明黄褐色 内:10YR7/4 にぶい黄橙色	中期末、北白川C式
-	60	55	1	下段3層	縄文土器	(3.4)	(4.0)	0.8				密 微細の長石、微細~1mmの石英を 含む、微細の雲母を少し含む	良	外:7.5YR7/6 橙色 内:7.5YR6/6 橙色	中期
34	60	56	1	− 5 ~ 10cm	縄文土器	(4.2)	(4.3)	0.7				密 径 1 ~ 3 mm の礫を少し含む	良	外: 2.5Y6/3 にぶい黄色 内: 2.5Y5/3 黄褐色	中期
_	60	57	1	第3面下層 - 5~10cm	縄文土器	(5.0)	(6.4)	0.8				密 微細~2mm 大の礫を含む	良	外:10YR6/6 明黄褐色 内:2.5Y6/3 にぶい黄色	中期
34	60	58	1	下段3層	縄文土器	(4.2)	(6.0)	1.1				密 径 3 mm 以下の石英、径 2 mm 以下 の角閃石を含む	良	外:5YR5/6 明赤褐色 内:7.5YR4/4 褐色	早期末~前期初
34	60	59	1	下段3層	縄文土器	(5.8)	(5.2)	0.8				密 径 1 ~ 2 mm 程の礫を少し含む	良	外: 5YR4/4 にぶい赤褐色 内: 5YR4/2 灰褐色	早期末~前期初
34	60	60	1	下段 2 - 1、2 - 2 層畔取りはずし	縄文土器	(6.4)	(7.1)	0.9				密 微細の長石、雲母を含む	良	外:5YR4/6 赤褐色 内:5YR5/6 赤褐色	早期末~前期初
_	60	61	1	下段3層	縄文土器	(7.8)	(6.7)	1.2				密	良	外:7.5YR5/6 明褐色 内:7.5YR5/4 にぶい褐色	早期末
_	60	62	1	下段3層	縄文土器	(5.2)	(3.6)	1.1				密 微細の長石を含む、微細の雲母を少 し含む	良	外:5YR5/6 明赤褐色 内:5YR5/6 明赤褐色	早期末~前期初

	ir.	Lange	-m-t-					_ ·		nn-t-		Υ		() (は復元径、〔 〕は残存長を表す -
図版 番号	挿図 番号	遺物 番号	調査区	出土位置	器種	長さ (cm)	幅 (cm)	厚さ (cm)	口径 (cm)	器高 (cm)	底径 (cm)	胎土	焼成	色調	備考
34	60	63	1	下段3層	縄文土器	(8.5)	(3.7)	1.3				密 微細~1 mm 程度の雲母を少し含む	良	外:5YR4/4 にぶい赤褐色 内:5YR4/4 にぶい赤褐色	早期末~前期初
34	60	64	1	第3面	縄文土器	(8.4)	(8.8)	0.9				密 径4mm 以下の石英を含む	良	外: 5YR4/4 にぶい赤褐色 内: 5YR5/4 にぶい赤褐色	早期末~前期初
34	60	65	1	第3面	縄文土器	(5.8)	(9.0)	1.1				密 径3mm以下の石英、径4mm以下 の角閃石、微細の雲母を含む	良	外:5YR5/6 明赤褐色 内:7.5YR5/6 明褐色	早期末~前期初
-	60	66	1	第3面	縄文土器	(5.8)	(5.0)	0.8				密 径 1 mm 程の礫を含む	良	外:7.5YR6/4 にぶい橙色 内:5YR5/6 明赤褐色	早期末~前期初
34	60	67	1	第3面下層	縄文土器	(6.3)	(5.1)	1.3				密 径3mm以下の長石、径2.5mm以 下の角閃石、径2mm以下の雲母を 含む	良	外:7.5YR6/4 にぶい橙色 内:10YR6/4 にぶい黄橙色	早期末~前期初
34	60	68	1	第3面下層 第3面-20cm	縄文土器	(5.2)	(4.2)	0.9				密 径3mm以下の角閃石、微細の赤色 粒を含む	良	外:5YR4/6 赤褐色 内:5YR5/6 明赤褐色	早期末~前期初
33	60	69	1	第3面下層	縄文土器					(4.5)	(8.7)	密(気泡痕有り) 径 1 mm 大の雲母、径 1 ~ 2 mm 大 の礫をわずかに含む	良	外:2.5YR5/6 明赤褐色 内:2.5Y4/2 暗灰黄色	前期
32	61	70	2	第3面 215 土坑	縄文土器 深鉢				(40.4)	(7.5)		密 微細〜径2mm 程度の石粒を含む	良	外:2.5Y5/1 黄灰色 内:2.5Y5/2 暗灰黄色	中期末、北白川C式
32	-	-	2	第3面 215 土坑	縄文土器深鉢							密 微細〜径 2 mm 程度の石粒を含む	良	外:2.5Y5/1 黄灰色 内:2.5Y5/2 暗灰黄色	
32	61	71	2	第3面 215 土坑	縄文土器	(8.9)	(17.5)	0.8				密	良	外:10YR5/1 褐灰色	中期末、北白川C式
					深鉢							微細〜径 3 mm 程の長石を含む 密		内: 10YR6/3 にぶい黄橙色 外: 10YR5/2 灰黄褐色	
32	61	72	2	第3面 215 土坑	縄文土器	(8.1)	(5.2)	0.9				微細〜径4mm程の長石、雲母、黒 色粒を含む	良	内:10YR6/3 にぶい黄橙色	中期末、北白川C式
32	-	_	2	第3面 215 土坑	縄文土器							密 微細~径3mm 程の長石を含む	良	外:10YR5/1 褐灰色 内:10YR6/3 にぶい黄橙色	
32	-	-	2	第3面 215 土坑	縄文土器							密 微細〜径3mm 程の長石を含む	良	外:10YR5/1 褐灰色 内:10YR6/3 にぶい黄橙色	
33	61	73	2	第3面 215 土坑	縄文土器	(5.4)	(3.5)	0.9				密 微細~2 mm 程の長石、石英?、雲 母、黒色粒を含む	良	外:10YR6/3 にぶい黄橙色 内:10YR6/3 にぶい黄橙色	中期末、北白川C式
33	61	74	2	第3面 215 土坑	縄文土器	(4.9)	(5.4)	0.8				密 微細~径3 mm 程の長石、雲母、黒 色粒を含む	良	外:10YR6/3 にぶい黄橙色 内:10YR6/3 にぶい黄橙色	中期末、北白川C式
33	61	75	2	第3面 215 土坑	縄文土器	(3.5)	(5.8)	0.8				密 微細~径2mm程の長石、雲母、黒 色粒を含む	良	外:10YR7/3 にぶい黄橙色 内:10YR6/2 灰黄褐色	中期末、北白川C式
33	61	76	2	第3面 215 土坑	縄文土器	(3.3)	(5.6)	0.7				密 微細〜径4mm程の長石、雲母、黒 色粒を含む	良	外:10YR5/2 灰黄褐色 内:10YR6/3 にぶい黄橙色	中期末、北白川C式
33	61	77	2	第3面 215 土坑	縄文土器	(3.4)	(7.5)	0.9				密 微細〜径3mm程の長石、雲母、黒 色粒を含む	良	外:10YR7/3 にぶい黄橙色 内:10YR6/3 にぶい黄橙色	中期末、北白川C式
31	61	78	2	第3面 215 土坑	縄文土器 深鉢	(15.6)	(10.2)	0.8				密 微細〜径3mm程の長石、石英、雲 母、角閃石を含む	良	外:10YR6/3 にぶい黄橙色 内:10YR6/4 にぶい黄橙色	中期末、北白川C式
31	61	79	2	第3面 215 土坑	縄文土器 深鉢	(15.9)	(14.0)	0.7				密 微細〜径3mm程の長石、石英、雲 母を含む	良	外:10YR6/3 にぶい黄橙色 内:10YR6/4 にぶい黄橙色	中期末、北白川C式
31	61	80	2	第3面 215 土坑	縄文土器 深鉢	(20.5)	(18.3)	1.5				密 微細~6 mm 程の長石、石英、雲母、 黒色粒を含む	良	外:10YR6/3 にぶい黄橙色 内:10YR6/4 にぶい黄橙色	中期末、北白川C式
30	62	81	2	第3面 215 土坑	縄文土器 深鉢				(41.2)	(45.1)		圏 微細〜径4mm程の長石、雲母、黒 色粒を含む	良	外:10YR7/3 にぶい黄橙色 内:10YR6/4 にぶい黄橙色	中期末、北白川C式
_	63	82	2	2層 (第2~3面間)	縄文土器	(4.0)	(4.9)	1.1				密 径 1 mm の雲母、チャートを含む 密	良	外: 7.5YR4/6 褐色 内: 10YR4/2 灰黄褐色	
35	63	83	2	2層 (第2~3面間)	縄文土器	(11.5)	(8.8)	1.6				径1mm の長石、径微細の雲母を含む	良	外:7.5YR4/6 褐色 内:7.5YR5/4 にぶい褐色	早期末~前期初
35	63	84	2	2層 (第2~3面間)	縄文土器	(6.0)	(6.9)	1.2				密 微細~径1 mm の長石、微細の雲母 を含む	良	外:7.5YR4/4 褐色 内:10YR5/4 にぶい黄褐色	早期末~前期初
35	63	85	2	3層上部 (第3~4面間)	縄文土器	(7.0)	(6.0)	1.0				密 微細の雲母を含む	良	外:7.5YR4/4 褐色 内:7.5YR3/1 黒褐色	早期末~前期初
35	63	86	2	3層 (マンガン層除去面)	縄文土器	(5.2)	(4.7)	0.7				密 微細~径2mm の長石を含む	良	外:7.5YR4/4 褐色 内:7.5YR3/3 暗褐色	早期末~前期初
35	63	87	4	2層 (第1~2面間)	縄文土器	(5.3)	(5.7)	1.0				密 径 1 ~ 2 mm の石英を少し含む、径 3 ~ 5 mm 大の礫を含む	良	外:10YR4/4 褐色 内:10YR5/3 にぶい褐色	早期末~前期初
35	63	88	2	3層 (第4~5面間)	縄文土器	(7.6)	(7.1)	0.9				密 微細〜径8mm の長石、径1mm の 石英、微細の雲母を含む	良	外:10YR5/4 にぶい黄褐色 内:10YR5/4 にぶい黄褐色	中期末~後期
35	63	89	2	3層 (第4~5面間)	縄文土器	(6.5)	(4.6)	0.9				やや粗 微細〜径1mm の長石、微細〜径4 mm の石英を多く含む	良	外:10YR6/6 明黄褐〜 10YR3/1 黒 褐色 内:10YR6/4 にぶい黄橙色	中期末

() は復元径、[] は残存長を表す

図版	插図	遺物	調査			長さ	幅	厚さ	口径	器高	底径			()	NEATHER C) NOVERTICE SET
		番号	区	出土位置	器種	(cm)	(cm)	(cm)	(cm)	(cm)	(cm)	胎土	焼成	色調	備考
35	63	90	2	2層 (第2~3面間)	縄文土器	(5.3)	(6.9)	1.0	(CIII)	(CIII)		密 径 1 ~ 2 mm の長石を多く含む、径 1 mm の石英を含む	良	外:10YR5/3 にぶい黄褐色 内:10YR4/2 灰黄褐色	中期末
35	63	91	4	2層(マンガン含 む、 中央部1層目)	縄文土器	(5.8)	(6.1)	1.0				粗雲母、角閃石を含む	良	外:7.5YR6/6 橙〜 10YR4/3 にぶい 黄褐色 内:10YR4/3 にぶい黄褐色	中期
33	63	92	2	3層 (第4~5面間) (マンガン層除去面)	縄文土器 深鉢					(3.4)	(6.4)	やや相 微細〜径6mmの長石を含む、微細 〜径3mmの角閃石を多く含む	₽	外:7.5YR5/4 にぶい褐色 内:10YR5/4 にぶい黄褐色	前期
33	63	93	4	2層(マンガン含 む、中央部1層)	縄文土器					(4.2)	(8.8)	密 径 1 mm 大の石英、雲母を含む	良	外:5YR5/6 にぶい赤褐色 内:5YR4/4 にぶい赤褐色	前期
33	63	94	4	2層 (第1~2面間)	縄文土器					(2.2)	(8.0)	相 径1~5mm大の長石、石英、角閃 石、径1~2mm大の雲母、微細の 黒雲母を含む	良	外:10YR5/3 にぶい黄褐〜 7.5YR5/6 明褐色 内:10YR5/4 にぶい黄褐〜 10YR4/2 灰黄褐色	前期
35	63	95	4	2層 (第1~2面間)	縄文土器深鉢	(4.9)	(6.6)	1.1				密 微細〜径3mmの長石を含む、微細 の石英、雲母を少し含む、微細〜径 3mmの角閃石を多く含む	自	外:10YR6/4 にぶい黄橙色 内:10YR5/4 にぶい黄褐色	晚期
35	63	96	2	3層 (第4~5面間)	縄文土器	(3.0)	(5.0)	1.1				やや粗 径 1 ~ 2 mm の長石、径 1 ~ 2 mm の石英を含む	不良	外:10YR7/2 にぶい黄橙色 内:10YR8/2 灰白色	晩期
35	63	97	2	3層 (第4~5面間)	縄文土器	(7.3)	(5.0)	0.8				密 微細〜径3mmの長石を含む、微細 〜径2mmの石英を少し含む	艮	外:2.5Y5/3 黄褐色 内:2.5Y4/3 オリーブ褐色	晩期
35	63	98	4	2層 (第1~2面間)	縄文土器	(4.2)	(4.3)	0.5				密 径 1 ~ 3 mm 大の礫を含む	良	外:10YR5/4 黄褐色 内:10YR6/6 明黄褐色	前期か

表 2 土器観察表

□1	圣.	底径の	()	は復元径、	ſ	1	は残存径、	器高の	()	は残存を示す

衣∠		上位	餓 券	*1 X								」住、底住の()は復元住、[」は	/太子生、田内・2 (/ 16/太子とバリ
図版 番号	挿図 番号	遺物 番号	調査区	出土位置	器種	口径 (cm)	器高 (cm)	底径 (cm)	残存率	胎土	焼成	色調	備考
36	57	1	1	1層(南半) (機械掘削)	陶器 ミニチュア擂鉢	(約 6.0)	(1.9)		口縁極小	密	良	外:2.5YR4/6 赤褐色 内:2.5YR4/4 にぶい赤褐色	ロクロ形成
36	57	2	2	耕土層 (機械掘削)	陶器碗		(2.7)	(2.8)	1/4	密 微細の長石をわずかに含む	良	外:2.5Y7/4 浅黄色 内:2.5Y5/4 黄褐色	回転ロクロナデ形成
36	57	3	2	2層 (第1~2面間)	磁器(白磁) 碗		(2.5)	(5.4)	1/4	密	良	外:施釉 2.5Y8/2 灰白色 素地 2.5Y7/1 灰白色 色 内: 2.5Y8/2 灰白色	
36	57	4	2	2層 (第1面精査)	陶器 おろし皿		(1.6)	(7.0)	1/3	· · · · · · · · · · · · · · · · · · ·		外:2.5GY7/1 明オリーブ灰色 内:7.5GY8/1 明緑灰色	
36	57	5	2	2層 (第2~3面間)	陶器碗		(3.4)	4.2	1/2	密		外:2.5Y7/4 浅黄色 内:2.5Y7/4 浅黄色	内外面ともロクロナデ
36	57	6	2	2層 (第2~3面間)	灰釉陶器		(1.9)	(8.6)	高台 1/3	&	不良	外:2.5Y6/2 灰黄色 内:2.5Y7/1 灰白色	
36	57	7	2	2層 (第2~3面間)	陶器皿		(1.7)	(4.4)	高台 1/2	密		外:施釉 5Y6/3 オリーブ黄色 素地 10YR6/3 にぶい黄橙色 内:5Y4/3 暗オリーブ色	
36	57	8	2	2層 (第2~3面間)	須恵器 杯か		(2.5)	(8.4)	高台 1/4	<u></u>		外:N5/0 灰色 内:N5/0 灰色	高台部に工具痕有り
36	57	9	2	2層 (第2~3面間)	瓦器 椀	(12.4)	(3.5)	(3.2)	1/6	密		外:N4/0 灰色 内:N4/0 灰色	
36	-	-	2	2層 (第2~3面間)	磁器(白磁) 碗		(3.2)		?	密	良	外:2.5Y7/2 灰黄色(釉の発色が悪く黄色味 を帯びる) 内:2.5Y7/2 灰黄色	
-	57	10	2	2層 (第2~3面間)	土師器皿	(8.6)	(1.4)		1/3	密 微細の長石を少し含む		外:5YR6/4 にぶい橙色 内:2.5YR6/6 橙色	
_	57	11	2	耕土層 (機械掘削)	瓦質土器 羽釜	(9.2)	(4.2)		極小	密 径2mm以下の石英を含む	ı	外:10YR6/2 灰黄褐色 内:10YR5/2 灰黄褐色	
37	57	12	2	2層 (第2~3面間)	土師器 甕	(17.6)	(7.7)		口縁 1/7	密 微細の長石、径1mm の石英を少 し含む	良	外:7.5YR7/6 橙色 内:7.5YR6/6 橙色	
-	57	13	2	2層 (第2~3面間)	須恵器 鉢	(30.0)	(4.3)		口縁 1/10 以下	密	良	外:N6/0 灰色 内:7.5Y6/1 灰色	東播系こね鉢
36	57	14	2	3層 (第4~5面間)	瓦器 椀	(14.3)	(4.6)		1/4	密		外:N3/0 暗灰色 内:N3/0 暗灰色	
36	57	15	2	3層 (第4~5面間)	陶器皿	(11.9)	(3.4)	(4.9)	1/3	密	良	外:施釉 2.5Y6/4 にぶい黄色 素地 2.5Y7/2 灰黄色 内:2.5Y6/4 にぶい黄色	
-	57	16	2	3層(第4~5面間)	土師器	(10.0)	(1.5)		1/3	密 微細の長石、径2mmの石英を少 し含む	l (8	外:7.5YR7/4 にぶい橙色 内:7.5YR7/5 橙色	
36	57	17	2	3層 (第4~5面間)	磁器(白磁) 碗	(17.2)	(3.15)		口縁 1/10 以下	密		外: 5Y7/1 灰白色 内: 5Y7/1 灰白色	
-	57	18	2	3層 (第4~5面間)	土師器	(10.0)	(2.0)		1/7	密 微細〜径2mm の長石を少し含む、 径1mm の石英を含む	良	外:10YR8/3 浅黄橙色 内:10YR7/3 にぶい黄橙色	

図版	+#-F077	\sk #hm	细木			口径	ᅃᇂ	序忽			1	□径、底径の()は復元径、〔 〕は ┏	·残存径、器高の () は残存を示す T
番号	挿図 番号	遺物 番号	調査区	出土位置	器種	(cm)	器高 (cm)	底径 (cm)	残存率	胎土	焼成	色調	備考
36	57	19	2	3層 (第4~5面間)	磁器 (青磁)碗	(13.7)	(2.6)		口縁 1/10 以下	密		外:5GY6/1 オリーブ灰色 内:5GY6/1 オリーブ灰色	龍泉窯系鎬蓮弁文碗
37	57	20	2	3層	須恵器鉢	(33.4)	(6.0)		口縁 1/10 以下	密	良	外:N6/0 灰色 内:N6/0 灰色	東播系こね鉢
37	57	21	2	3層 (第4~5面間)	須恵器 鉢	(23.8)	(4.4)		口縁 1/10 以下	密	艮	外:10Y6/1 灰色 内:10Y6/1 灰色	東播系こね鉢
37	57	22	2	3層 (第4~5面間)	瓦質土器 羽釜	(22.5)	(5.0)		1/10	密 微細の長石、径1mmの石英を含 む、微細の赤色粒を少し含む		外:7.5YR7/3 にぶい橙色 内:7.5YR7/3 にぶい橙色	
37	57	23	2	3層 (第4~5面間)	瓦質土器 羽釜	(8.8)	(3.4)		口縁 1/6	· 密		外:N3/0 暗灰色 内:N3/0 暗灰色	
_	57	24	1	下段3層	弥生土器 壺		(3.5)	(5.0)	?	密 径 1 mm の石英を少し含む	良	外:5YR7/6 ~ 6/6 橙色 内:5YR6/4 にぶい橙色	内面に工具痕有り
37	57	25	2	3層 (第4~5面間)	土師質土器				?	密 微細〜径2mmの長石を少し含む、 径1mmの角閃石、径1〜2mm の赤色粒を含む	良	外:5YR5/6 明赤褐色 内:7.5YRS/6 明褐色	最大長 4.8cm、最大幅 5.0cm、最 大厚 1.7cm 竃のたき口(庇部分か)
37	57	26	1	下段3層	弥生土器 甕		(4.8)	10.7	?	粗 径 2 mm の長石、石英を含む	良	外:10YR7/6 ~ 6/6 明黄褐色 内:7.5YR6/6 橙色	
_	57	27	2	3層 (第4~5面間)	弥生土器		(2.5)	6.4	1/10 以下	密 微細〜径 1 mm の長石を含む、径 1 mm の石英を少し含む	l H	外:2.5Y8/2 灰白色 内:2.5Y8/1 灰白色	
37	64	99	4	3層 (第4面精査)	瓦器	(12.9)	(3.5)		1/6	æ		外:N4/0 灰色 内:N4/0 灰色	外面に工具痕有り
37	64	100	4	3層 (トレンチ下層)	瓦器棉	(12.4)	(2.4)		1/5	·	不良 (いぶし 焼不良)	外:5Y8/1 灰白色 内:5Y8/1 灰白色	
-	64	101	4	第1面 410溝	土師器 杯	(15.0)	(2.4)		1/10	密 径 1 mm の礫を少し含む	良	外:7.5YR8/1 灰白色 内:7.5YR8/1 灰白色	
_	64	102	4	3層 (トレンチ下層)	土師器	(7.6)	(1.2)		1/4	密	良	外:2.5YR6/6 橙色 内:7.5YR6/4 にぶい橙色	
37	64	103	4	2層 (第1~2面間)	土師器	(14.9)	(8.9)		口縁 1/9	密 径 1 ~ 3 mm 大の長石を含む、径 1 mm の雲母を少し含む	良	外:7.5YR6/6 橙色 内:10YR7/4 にぶい黄橙色	
36	64	104	3	黄褐色砂礫層	緑釉陶器皿		(2.1)		口縁 1/10	密 微細の長石をわずかに含む	良	外:2.5Y6/3 にぶい黄色 内:2.5Y6/2 灰黄色	内外面とも回転ロクロ形成
37	64	105		3層(第1〜4面間) 西部セクションベル ト	須恵器鉢	(29.6)	(3.6)		口縁 1/10	密	良	外:N5/0 灰色 内:N5/0 灰色	東播系こね鉢
37	64	106	4	3層 (第2~3面間)	瓦質土器 羽釜	(19.5)	(4.5)		1/10	密 径1mm 大の長石、石英をわずか に含む	良	外:N3/0 暗灰色 内:2.5Y7/2 灰黄色	
38	64	107	5	3層	瓦器椀	(11.0)	2.7		1/4	やや密 微細の長石、チャートをわずかに 含む	良	外:10YR8/1 灰白色 内:10YR8/1 灰白色	
39	64	108	5	3層 (第2~3面間)	瓦器 皿	(9.4)	(1.8)		1/4	密	良	外:N4/0 灰色 内:N4/0 灰色	
38	64	109	5	3層	土師器皿	(7.6)	1.6		1/2	密 微細の長石を含む		外:10YR6/1 褐灰色 内:2.5Y7/2 灰黄色	外面に工具痕有り
38	64	110	5	3層 (第2~3面間)	土師器	(8.4)	(1.0)		1/4	密微細の長石をわずかに含む	良	外:10YR4/2 灰黄褐色 内:10YR5/2 灰黄褐色	
38	64	111	5	3層	 陶器 甕		(4.2)		極小	やや粗 微細の長石、石英、角閃石を含む		外:5YR4/2 灰褐〜 2.5Y5/0 明赤褐色をベー スに、5YR4/2 灰褐色の煤を被ったような色 内:10YR7/1 灰白〜 2.5YR4/2 灰赤色	備前焼
38	64	112	5	3層	土師器(瓦質 土器の焼成不 良の可能性も)	(16.2)	(5.0)		1/10 以下	やや粗 径2mm以下の石英を含む	不良	外:10YR8/2 灰白色~ 5YR8/3 浅橙色 内:10YR8/2 灰白色~ 5YR8/3 浅橙色	
_	64	113	5	3層	瓦質土器 羽釜	(14.6)	(4.6)		1/10 以下	やや粗 径 2.5mm 以下の石英、径 2 mm 以 下のチャートを含む		外:10YR8/2 灰白色 内:10YR8/2 灰白色	
39	64	114	6	3層中〜下部 (Y = -42,315 ライ ン 側溝)	瓦器 椀	(15.4)	4.4	(4.5)	1/4	密 微細の長石を少し含む	良 (いぶし 焼不良)	外:N7/0 灰白色 内:N7/0 灰白色	
-	64	115	6	3層上部 (第1~2面間)	土師器 椀	(12.6)	3.9	(4.6)	1/10	密 微細〜径2mm の長石を含む		外:2.5Y8/2 灰白色 内:2.5Y8/2 灰白色	
38	64	116	6	3層 (第2~3面間)	瓦器	(11.1)	(3.0)		1/5	密	良	外:N4/0 灰色 内:N3/0 灰色	
-	64	117	6	3層上部 (第1~2面間)	瓦器	(11.8)	(2.8)		1/4	粗 径 9 mm 以下の石、径 2 mm 以下 の石英を含む		外:5Y8/1 灰白色 内:5Y8/1 灰白色	内面に工具痕有り
38	64	118	6	3層中〜下部 (X = -123,840 ライ ン、南の東西側溝)	瓦器棉		(1.8)	(4.8)	1/5	密	良	外:N3/0 暗灰色 内:N3/0 暗灰色	

口径、底径の () は復元径、〔 〕は残存径、器高の () は残存を示す

図版	挿図	遺物	調査			口径	器高	底径	_		<u>'</u>	□径、底径の()は復元径、〔 〕は ┃	
番号	番号	番号	区	出土位置	器種	(cm)	(cm)	(cm)	残存率	胎土	焼成	色調	備考
38	64	119	6	3層 (X = -123,845 ライ ン 側溝)	磁器(青磁)碗		(3.4)	(5.6)	1/10	密	やや不良	外:施釉 2.5GY7/1 明オリーブ灰色 素地 7.5YR8/2 灰白色 内:2.5GY7/1 明オリーブ灰色	
38	64	120	6	3層中部 (第2~3面間)	土師器	(9.0)	1.2		1/4	密 微細〜径2mmの長石を含む、径 1mmの石英を少し含む	良	外:2.5Y8/2 灰白色 内:10YR8/2 灰白色	
-	64	121	6	3層最下部 南北アゼ脇(Y = -42,315 ライン側溝)	土師器	(8.0)	1.0		1/4	やや密 径 0.5 ~ 1 mm 大の長石、石英、赤 色粒を少し含む		外:7.5YR5/1 褐灰~7.5YR7/2 明褐灰色 内:7.5YR4/2 灰褐~10YR6/2 灰黄褐色	
-	64	122	6	3層 (第2~3面間)	土師器	(9.1)	1.3		1/5	密 径 1 mm 程の礫を少し含む	良	外:2.5Y7/3 浅黄色 内:2.5Y7/2 灰黄色	
38	64	123	6	3層上部 (第1~2面間)	瓦質土器 甕	(12.9)	(4.4)		1/10 以下	密 精良	良	外:N3/0 暗灰色 内:N3/0 暗灰色	
38	64	124	6	3層中部	須恵器	(28.0)	(3.7)		1/10	密	良	外:N7/0 灰白~ N3/0 暗灰色	東播系こね鉢
38	64	125	6	(第2~3面間) 3層	動 須恵器	(25.0)	(3.8)		1/10	密	良	内:N5/0 灰色 外:5Y7/1 灰白~ 10Y6/1 灰色	東播系こね鉢
\vdash				(第2~3面間)	<u></u>				以下	径 3 mm 以下の長石を含む 密		内:5Y7/1 灰白色 外:10YR4/2 灰黄褐〜 5YR5/4 にぶい赤褐色	
38	64	126	6	3層上部	擂鉢	(32.0)	(5.7)		1/10	径2mm 以下の石英を含む	良	内:5YR5/4 にぶい赤褐色 外:10GY8/1 明緑灰色 染付5B5/1 青灰色	擂り目 (7~8条で1対か?)
39	65	127	7	2層	磁器 (染付) 碗 ————	(10.0)	5.5	(3.6)	1/5	密	良	口縁付近 2.5Y7/1 灰白色 内: 10Y8/1 灰白色	
39	65	128	7	2層	陶器甕	(38.6)	(5.5)		1/10	密 径2mm以下の長石、径3mm以 下の石英を含む	良	外:7.5YR4/2 灰褐〜 N7/0 灰白色 内:2.5YR4/3 にぶい赤褐色	備前焼
39	65	129	7	2層・3層 (南北トレンチ)	磁器(白磁)碗	(15.7)	(2.1)		1/10 以下	密	良	外:7.5Y8/1 灰白色 内:7.5Y8/1 灰白色	
38	65	130	7	第3面精査	瓦器 椀	(14.8)	(4.6)		1/10	œ	良	外:N4/0 灰色 内:N3/0 暗灰色	
-	65	131	7	2層・3層 (南北トレンチ)	土師器	(8.2)	(1.3)		1/4	密 径1mm以下の長石、径2mm以 下の赤色粒を含む	良	外:2.5YR6/4にぶい橙色 内:10YR7/3にぶい黄橙色	内面の見込みに、一部炭化した痕跡有り
_	65	132	7	3層上部〜中部 (北東 - 南西アゼ)	土師器	(8.0)	0.9		1/2	密 径 1 mm 以下の石英をわずかに含	良	外:2.5YR6/4 にぶい橙~ 5Y6/2 灰オリーブ 色 内:5YR6/3 にぶい橙色	
_	65	133	7	3層	土師器	(7.1)	1.6		1/3	· 密	良	外:2.5Y7/2 灰黄色	
	65	134	7	(南北トレンチ) 3層中部~下部	血 土師器	(6.6)	1.2		1/3	<u>e</u>	良	内: 2.5Y7/2 灰黄色 外: 2.5Y7/3 浅黄色	
					血 土師器				 	径 1 mm 以下の長石を含む		内: 2.5Y7/3 浅黄色 外: 2.5Y8/2 灰白色	体部と底部の境目に粘土紐の継ぎ目痕が
39	65	135	7	3層(側溝)		(8.6)	1.5		1/3	密 	良	内:10YR8/2 灰白色 外:10YR7/3 にぶい黄橙~10YR4/2 灰黄褐	残る
39	65	136	7	3層中部~下部	土師器 皿	(8.0)	1.3		1/2	歴 径 1 mm の長石を少し含む、径 1 mm の赤色粒を含む		色 内: 7.5YR7/4 にぶい橙~ 7.5YR4/1 褐灰色	
	65	137	7	3層中部	瓦質土器	(16.3)	(2.7)		口縁 1/10	500		外:N8/0 灰白色	
	03	137	,	3層中即	羽釜	(10.5)	(2.7)		以下	502	焼やや 不良)	内:10Y8/1 灰白色	
39	65	138	7	3層 (南北トレンチ精本)	磁器(青磁)碗		(3.2)		口縁極小	密	良	外:5GY7/1 明緑灰色 内:5GY7/1 明緑灰色	龍泉窯系鎬蓮弁文碗とみられる
_	65	139	8	査) 3層	土師器	(13.1)	(2.3)		1/7	œ	良	外:10YR5/1 褐灰色	
39	65	140	8	(第3~4面間) 3層	杯 磁器 (青磁)	(13.3)				径 1 mm の長石を少し含む 密		内:2.5Y7/2 灰黄色 外:2.5GY6/1 オリーブ灰色	龍泉窯系鎬蓮弁文碗
F			-	(第1~2面間) 3層	碗 磁器 (青磁)		,		<u> </u>			内:2.5GY6/1 オリーブ灰色 外:施釉 2.5GY5/1 オリーブ灰色 素地	1000
39	65	141	8	(第4~5面間)	碗		(1.9)	(5.5)	1/4	ee		N6/0 灰色 内:2.5GY5/1 オリーブ灰色	外面に鎬蓮弁文の痕跡がかすかに残る
				3層中部	瓦器					€	良 (いぶし	外:5Y7/1 灰白色	
38	65	142	13	(南北トレンチ)	椀	(10.7)	(2.6)		1/6	微細の長石、石英、黒色粒を含む	焼焼成	内: 5Y7/1 灰白色	
	65	143	13	3層上部~中部	土師器	(9.4)	(1.8)		1/6	<u>e</u>		外:2.5Y7/2 灰黄色	
				(南北トレンチ)	杯 陶器			(3.3)		微細の長石、雲母、黒色粒を含む 密		内: 2.5Y7/2 灰黄色 外: 施釉 白色 (土色帖になし) 素地	中来見は7.初かにからナル
39	65	144	13	南壁壁ぎわ撹乱部	Ш	(11.6)	2.2	(3.2)	1/4	一 微細の白色粒を含む		10YR5/3 にぶい黄褐色 内: 7.5YR6/3 にぶい褐色 外: 施釉 2.5Y5/3 黄褐色 素地 5YR5/3 にぶ	内面見込み部分に砂目有り
42	69	170	9	盛土層 (機械掘削)	陶器 碗		(2.6)	(4.2)	1/3	密		い赤褐色 内:5Y5/3 灰オリーブ色 付着物 N5/0 黒色	常滑など東海系陶器
41	69	171	9	2層	磁器 (白磁) 碗		(2.0)	(5.3)	1/2	密 微細の長石をわずかに含む	良	外:5Y7/1 灰白色 内:5Y7/2 灰白色	削り出し高台
40	69	172	9	2層・3層	陶器 ミニチュア高 杯		(3.7)	3.4	1/2	密	l H	外:10YR6/4 にぶい黄橙~7.5YR7/6 橙色 内:10YR6/4 にぶい黄橙色	回転糸切り
40	69	173	9	3層 (東西トレンチ)	磁器 (染付) ミニチュア高 杯		(3.9)	4.1	1/2	·	良	外: 施釉 10Y8/1 灰白色 素地 7.5YR8/3 浅 黄橙色 染付 10BG5/1 青灰色 内: 10Y8/1 灰白色	
42	69	174	9	2層・3層	磁器(染付)	(10.5)	(4.5)	3.8	1/3	密	良	外: 7.5GY8/1 明緑灰色 染付 5B5/1 青灰色内: 7.5GY8/1 明緑灰色	重ね焼痕有り
ш		ш		(南北トレンチ)	碗					<u>l</u>		・/.JUI./ I 明線灰巴	<u> </u>

口径、底径の () は復元径、[] は残存径、器高の () は残存を示す

	ice I	No. of Co.								1		コ径、底径の()は復元径、〔 〕は 「	721十1主、鉛向り () は721十亿小り
図版 番号	- 1	遺物 番号	調査区	出土位置	器種	口径 (cm)	器高 (cm)	底径 (cm)	残存率	胎土	焼成	色調	備考
40	69	175	9	3層	陶器(常滑)		(9.7)		1/10 以下	やや密 径3mm以下の長石、径4mm以 下の石英、径2mm以下の角閃石 を含む	良	外:5YR4/2 灰褐色 内:5Y4/4 暗オリーブ灰〜5YR4/3 にぶい赤 褐色	常滑焼
40	69	176	9	3層	須恵器 片口鉢	(27.8)	(6.0)		口縁 1/10	密 径 2 mm 以下の長石、石英を含む	良	外:N7/0 灰白色 自然釉 N2/0 黒色 内:N7/0 灰白色	東播系こね鉢
40	69	177	9	3層	弥生土器 甕		(3.9)	4.2	?	密 径 1 mm の長石、石英を含む	良	外:7.5YR5/6 明褐〜 10YR4/1 褐灰色 内:10YR5/3 にぶい黄橙色	底部に木の葉痕か。筋状痕が残る
-	69	178	9	3層	須恵器 杯身	(10.1)	(3.7)		1/5	密 径 1.5mm 以下の長石を含む	良	外:5PB5/1 暗青灰色 内:5PB5/1 暗青灰色	
41	69	179	10	3層上層 (Y = -42,480 アゼ 第 1 ~ 2 面間)	磁器(青磁 or 白磁)碗	(11.0)	(5.9)		1/4	密	良	外:2.5GY7/1 明オリーブ灰色 内:2.5GY7/1 明オリーブ灰色	
42	69	180	10	3層上部 (X = -123,845 トレ ンチ)	陶器皿	(11.6)	3.3	(4.0)	1/4		良	外:施釉 2.5YR6/1 黄灰色 素地 10YR6/1 褐灰色 灰色 内:5Y7/1 灰白~ 2.5Y5/2 暗灰黄~ 5Y8/1 灰白色	重ね焼痕有り
42	69	181	10	3層上部 (X = -123,845 トレ ンチ)	陶器 皿	(11.6)	(1.9)		1/6	密	良	外:5Y6/4 オリーブ黄色 内:5Y6/4 オリーブ黄色	瀬戸焼 陰刻によって、菊花文状の模様を施した ものか
41	69	182	10	3層 (機械掘削)	磁器(青磁)碗		(1.2)	4.6	?	密 径1mm 大の長石を少し含む	良	外:施釉 10Y6/2 オリーブ灰色 素地 10YR7/2 にぶい黄橙色 内:施釉 10Y6/2 オリーブ灰色 釉剥げ 10YR6/2 灰黄褐色	ロクロ形成 削り出し高台 重ね焼痕有り
-	69	183	10	3 層上部〜中部 (X = -123,845 ライン アゼはずし)	土師器	(10.5)	1.6		1/5	密 微細の長石、石英含む	良	外:2.5Y8/2 灰白色 内:10YR8/2 灰白色	
40	69	184	10	3 層中部〜下部 (X = -123,845 ライン アゼはずし)	瓦器 椀	(14.6)	(3.4)		1/5	密 微細の赤色粒を少し含む		外:2.5Y6/2 灰黄~ N4/0 灰色 内:10YR5/2 灰黄褐~ 10YR3/1 黒褐色	
42	69	185	10	第3面精査 (地山直上)	磁器(染付)	(13.6)	3.0	(7.4)	1/3	密	良	外:7.5GY8/1 明緑灰色 内:7.5GY8/1 明緑灰色 染付 5B5/1 青灰色	口縁部には草花文が。口縁部と見込みの 境には二重圏線が描かれる。 高台部は蛇の目状に釉剥げ
40	69	186	10	2層・3層 (機械掘削)	陶器 擂鉢	(32.0)	(3.7)		1/10	密 径3mm以下の長石、石英を含む	良	外:7.5YR4/3 褐色 内:7.5YR4/3 褐~ 10YR4/3 にぶい黄褐色	備前焼
40	69	187	10	3層上部 (第1~2面間)	須恵器 鉢	(28.0)	(3.2)		1/10	密 径 2 mm 以下の長石、石英を含む 径 4 mm 以下の礫含む	良	外:N6/0 灰色 内:N6/0 灰色	東播系ごね鉢
-	69	188	10	3層上部 (第1~2面間)	須恵器 鉢	(24.8)	(4.4)		1/10	密 径2mm以下の長石、石英、径3 mm以下のチャートを含む	良	外:N4/0 灰色 内:5PB6/1 青灰色	東播系ごね鉢
41	69	189	10	3層下部 (第3~4面間)	磁器(白磁) 碗	(14.6)	(4.1)		1/10	· 密	良	外:施釉 7.5Y8/1 灰白色 素地 5Y4/1 灰色 内:7.5Y8/1 灰白色	
41	69	190	10	3層中部 (第2~3面間)	緑釉陶器		(2.0)	(6.0)	1/10	密(極めて精良)	良	外:10BG4/1 青灰色 内:10BG4/1 青灰色	貼付け高台
40	69	191	11	3層	黒色土器A類 椀	(14.2)	(3.3)		1/5	密 径 3 mm 以下の長石、石英を含む	良	外:10YR7/2 にぶい黄橙色 内:N2/0 黒色	
40	-	-	10	3層(Y = -42,458 ライン側溝)	黒色土器 A 類椋		(1.5)	(8.4)	底部 1/2	密 微細の長石を少し含む	良	外:10YR5/4 赤褐色 内:N3/0 暗灰色	
40	69	192	11	3層	瓦器 椀	(14.2)	3.4	(4.0)	1/7	密	良	外:N4/0 灰~ 10YR8/1 灰白色 内:N4/0 灰~ 10YR8/1 灰白色	
41	69	193	11	機械掘削層 (1・2層)	磁器(青磁)碗		(1.6)			やや密 微細の長石を含む		外: 施釉 10Y6/2 オリーブ灰色 素地 2.5Y6/1 黄灰色 内:10Y6/2 オリーブ灰色	龍泉窯系 削り出し高台
41	69	194	11	3層	磁器(青磁) 碗		(2.8)	(6.8)	高台 1/3	密	艮	外:10Y6/2 オリーブ灰色 内:10Y6/2 オリーブ灰色	龍泉窯系 花文 削り出し高台
41	69	195	11	3層	磁器(青磁) 碗		(3.4)	(5.2)	<u> </u>	密	やや不 良	外:施釉 7.5Y6/2 灰オリーブ色 素地 10YR8/3 浅黄橙色 内:7.5Y6/2 灰オリーブ色	龍泉窯系 削り出し高台
40	69	196	11	3層	陶器 盃	5.4	3.2	2.2	ほぼ完 存	密	良	外:施釉 10Y8/1 灰白色 素地 5Y8/1 灰白色 内:10Y8/1 灰白色	
40	69	197	11	3層	土師器	7.8	2.1		ほぼ完 存		l R	外:2.5Y5/3 黄褐色 内:2.5Y6/3 にぶい黄色	
41	69	198	12	2層 (機械掘削)	磁器(青磁) 碗		(4.3)		1/10以 下	密	良	外:5GY6/1 オリーブ灰色 内:2.5GY6/1 オリーブ灰色	龍泉窯系鎬蓮弁文碗
40	69	199	11	3層	黒色土器 甕	(16.3)	(6.1)		口縁 1/3	密	良	外:N5/0 黒色 内:N5/0 黒色	
	69	200	12	3層 (地山直上)	須恵器		(8.6)		1/4	密	良	外:2.5Y5/3 黄褐~2.5Y7/1 灰白色 内:2.5Y7/1 灰白色	

表3 石器観察表 [] は残存長を示す

ı	図版	挿図	遺物	調査区	出土位置	器種	長さ	幅	厚さ	重量	石材	備考
	番号	番号	番号	明且匹	川工四區	拉拉生	(cm)	(cm)	(cm)	(g)	1117	C. Bin
ı	43	58	31	1	第3面 41 土坑	石鏃	2.4	1.6	0.4	1.1	チャート	縄文時代
	44	58	32	2	2層(第1~2面間 上層・トレンチ部分)	石器未製品	3.8	2.7	0.6	5.3	サヌカイト	
١	43	67	164	4	第2面(3層上部)	石鏃	4.8	2.0	0.8	5.0	サヌカイト	弥生時代前期~中期
ı	43	67	165	4	2層(第1~2面間)	石鏃	(2.0)	1.8	0.3	0.6	サヌカイト	縄文時代早期
	44	67	166	13	3層上部 (第1~2面間)	剥片	5.6	3.8	0.8	19.0	サヌカイト	

[] は残存長を示す

											し」がが対け攻で小り
図版	挿図	遺物	調査区	出土位置	器種	長さ	幅	厚さ	重量	石材	備考
番号	番号	番号	阿且区	山工位區	台合作里	(cm)	(cm)	(cm)	(g)	11179	7JH2-5
				2層(マンガン含む、中							
44	67	167	4	央部1層目)	剥片	4.0	5.4	1.4	34.5	サヌカイト	
				確認 53 - 1 区③層							
				2層(マンガン含む、中							
44	67	168	4	央部1層目)	石核	13.1	10.3	2.6	321.8	サヌカイト	
				確認 53 - 1 区③層							
				2層(マンガン含む、中							
45	68	169	4	央部1層目)	磨石	10.2	8.6	6.1	749.7		
				確認 53 - 1 区③層							
43	71	210	9	3層(直上)	有舌尖頭器	7.7	3.7	1.3	27.2	サヌカイト	縄文時代早期
45	71	213	9	3層	叩き石?	4.9	3.6	3.1	85.1		

表 4 石製品観察表

[] は残存長を示す

			073 (22 (() (0/2/11 22 (2/17)
ſ	図版	挿図	遺物	調査区	出土位置	器種	長さ	最大幅	厚さ	重量	石材	備考
L	番号	番号	番号	阿且心	山工位區	位行里	(cm)	(cm)	(cm)	(g)	11177	湘与
	45	57	30	1	機械掘削 2層(北半)	砥石	(6.1)	3.8	2.3	80.9	砂岩	
1	45	71	211	9	3層	砥石(仕上げ砥)	(6.6)	3.5	1.1	35.7	砂岩	
	45	71	212	9	3層	砥石(仕上げ砥)	(8.7)	3.6	1.0	50.1	砂岩	

表 5 木製品観察表

図版	挿図	遺物	調査区	出土位置	器種	長さ	幅	厚さ	備考		
番号	番号	番号	剛且心	山工位區	台合作里	(cm)	(cm)	(cm)	1 1 1 1 1 1 1 1 1 1 1 1 1 1 1 1 1 1 1		
42	66	161	6	2層 or 3層(機械掘削)	曲物底板	16.0	7.4	0.7	 外面に黒漆を塗布		
72	00	101		3 層上部 (第 1 ~ 2 面間)	III IVIIEVIX	10.0	7.1	0.7	7.1回に2次後で手巾		
_	70	207	9	2層	部材	18.8	2.0	1.6	ほぞ穴有り		
42	70	208	11	3層	円形板	8.4	3.6	1.6	円盤状		
42	70	209	11	3層 (上部)	曲物底板	6.4	6.3	0.7	柾目取り 黒漆を塗布か?		

表 6 銭貨観察表

	K • WARING										
図版	挿図	遺物	調査区	出土位置	器種	直径	孔径	厚さ	重量	残存率	備考
番号	番号	番号	門田心	HTEE	110"1±	(cm)	(cm)	(mm)	(g)	/スロデ	D HING
46	57	28	2	2層(第1~2面間)	北宋銭(元豊通寳)	2.4	0.7	1.5	3.7	完存	1078 年初鋳
46	57	29	1	機械掘削(1層)	一銭青銅貨	2.2	-	1.0	3.5	完存	
46	66	145	4	第1~2面間(3層)	明銭(洪武通寳)	2.3	0.7	1.0	3.1	完存	1368 年初鋳
46	66	146	4	第1~2面間(3層)	北宋銭(皇宋通寳)	2.4	0.75	1.0	2.2	3/4	1038 年初鋳
46	66	147	4	3層上部 (第1~2面間)	北宋銭(元豊通寳)	2.4	0.7	1.0	2.9	完存	1078 年初鋳
46	66	148	4	3層上部 (第1~2面間)	北宋銭(治平元寳)	2.3	0.7	1.5	2.7	完存	1064 年初鋳
46	66	149	4	第2面(3層上部)	北宋銭(皇宋通寳)	2.4	0.7	1.5	1.9	完存	1038 年初鋳
46	66	150	4	3層(第1~2面間)	北宋銭 (元豊通寳)	2.3	0.7	1.5	2.4	完存	1078 年初鋳
46	66	151	5	2層	南宋銭(紹定通寳)	2.3	0.7	1.5	2.0	完存	1228 年初鋳
46	66	152	5	3層(第2~3面間)	北宋銭 (元豊通寳)	2.3	0.7	1.5	3.5	完存	1078 年初鋳
46	66	153	6	第1面 601溝	北宋銭(熈寧元寳)	2.4	0.7	1.0	2.8	完存	1068 年初鋳
46	66	154	6	盛土層(機械掘削)	北宋銭(熈寧元寳)	2.2	0.7	1.5	1.8	完存	1068 年初鋳
46	66	155	6	3層上部 (第1~2面間)	北宋銭(太平通寳)	2.4	0.6	1.5	2.5	完存	976 年初鋳
46	66	156	6	3層上部 (第1~2面間)	明銭(永楽通寳)	2.4	0.6	1.5	3.2	完存	1408 年初鋳
46	66	157	7	3層中部	北宋銭(嘉祐通寳)	2.5	0.75	1.0	3.5	ほぼ完存	1056 年初鋳
46	66	158	8	第2面	北宋銭(皇宋通寳)	2.4	0.7	1.0	2.1	完存	1038 年初鋳
46	66	159	13	3層(第2~3面間)	000寶	2.4	0.7	1.0	2.4	完存	
46	66	160	8	西壁 耕土層、2層	一銭銅貨	2.7	-	1.5	6.1	完存	
46	70	201	9	2層	北宋銭(熈寧元寳)	2.2	0.6	1.0	2.2	完存	1068 年初鋳
46	70	202	9	2層	寛永通寳	2.5	0.6	1.0	3.2	完存	1636 年初鋳
46	70	203	9	第1面上面	寛永通寳	2.4	0.6	1.5	3.8	完存	1636 年初鋳
46	70	204	9	3層	南唐銭(開元通寳)	2.4	0.7	1.0	2.3	完存	960 年初鋳
46	70	205	9	3層	北宋銭(紹聖元寶)	2.3	0.7	1.0	1.5	ほぼ完存	1094 年初鋳
				3層							
46	70	206	11	(X = -123,844 Y =	北宋銭(元豊通寳)	2.3	0.7	1.5	3.3	完存	1078 年初鋳
				-42,5055 Z=238.64)							

表 7 金属製品観察表

	図版	挿図	遺物	調査区	出土位置	器種	残存長	幅	厚さ	備考
L	番号	番号	番号				(cm)	(cm)	(cm)	
-[-	66	162	7	3層上部~中部	用途不明品	12.5	2.8	0.4	鉄製

表8 土製品観察表

図版 番号	挿図 番号	遺物 番号	調査区	出土位置	器種	長さ (cm)	最大幅 (cm)	厚さ (cm)	重量 (g)	残存率	備考
-	66	163	7	2層	土錘	4.1	1.4	1.6	7.2	完存	

写 真 図 版

写真図版 1 1区

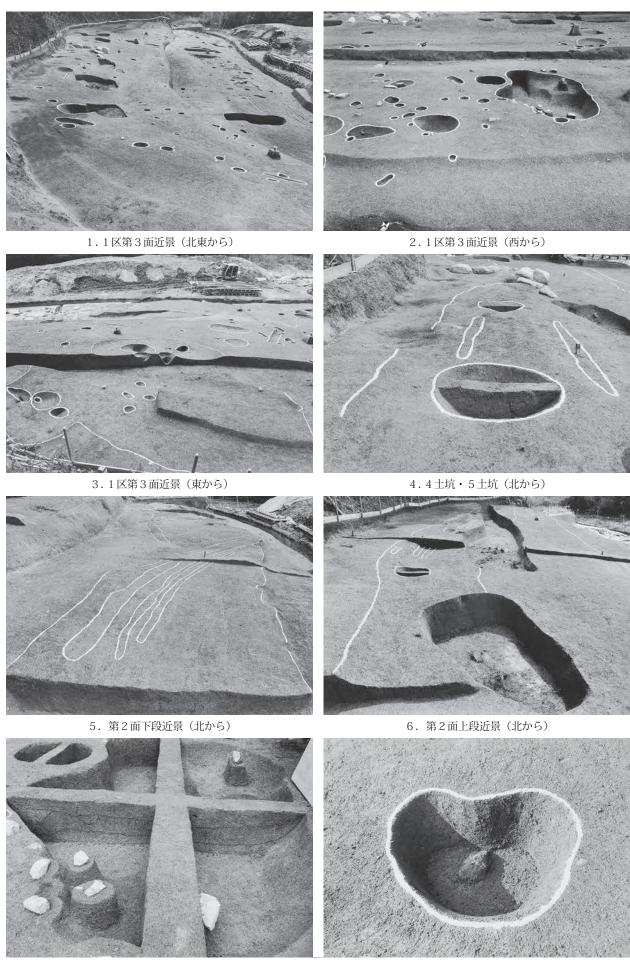


1.1区第3面全景(西から)



2.1区第3面全景(南西から)

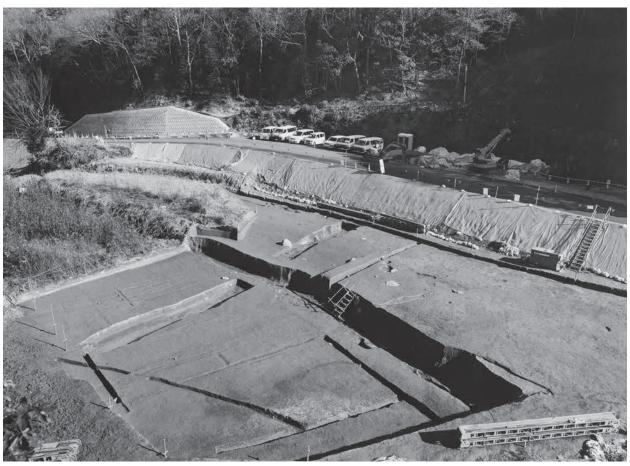
写真図版 2 1区



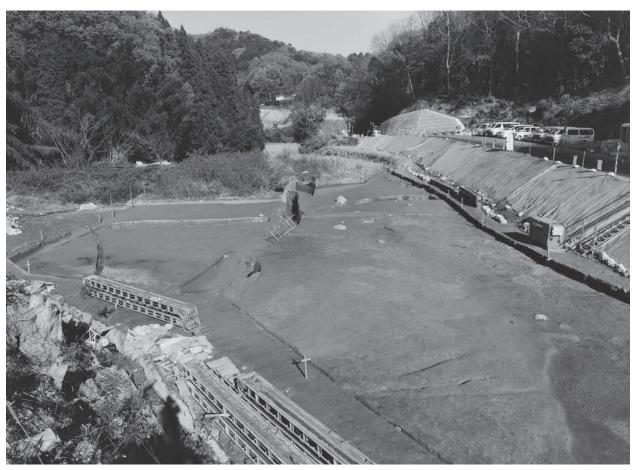
7.53 土坑断面(西から)

8. 71 ピット完掘状況 (北から)

写真図版3 2区

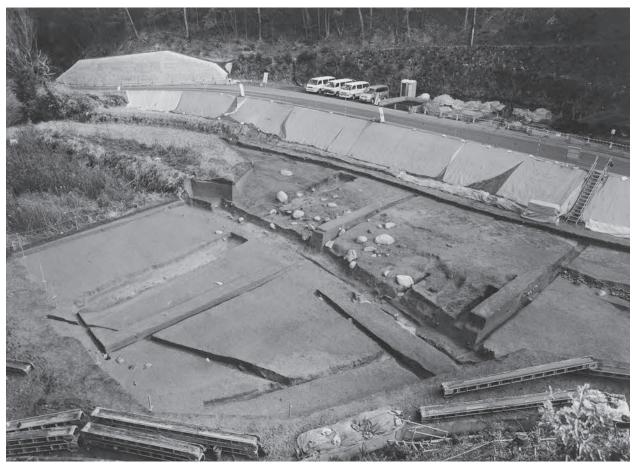


1.2区第2面全景(南西から)



2.2区第2面全景(南から)

写真図版4 2区

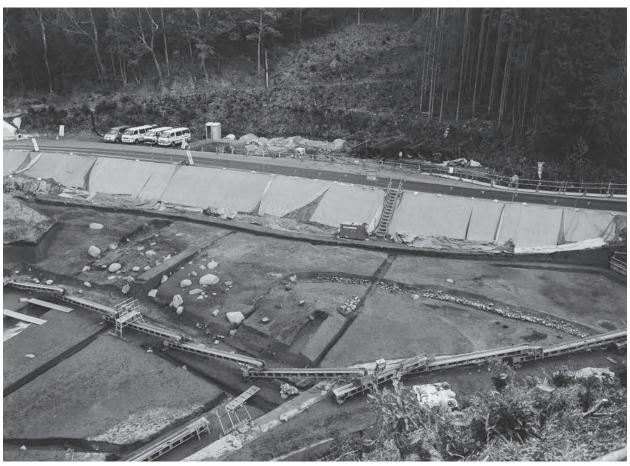


1.2区第3面全景(南西から)



2.2区第3面全景(南から)

写真図版 5 2区



1.2区第4面全景(南西から)



2.2区第4面全景(北東から)

写真図版6 2区

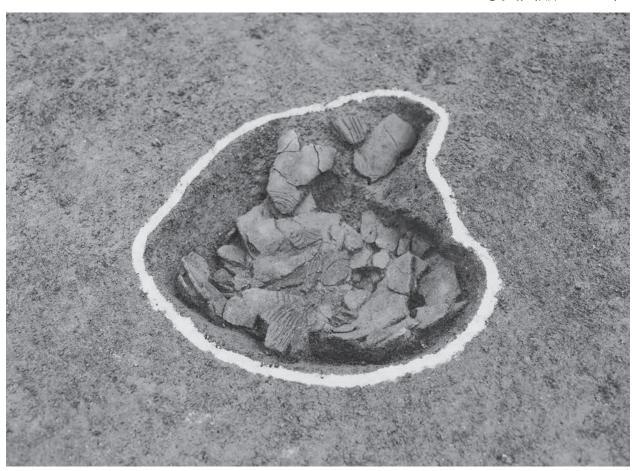


1.2区第5面全景(南西から)



2.2区第5面全景(北東から)

写真図版7 2区



1.2区第3面215土坑検出状況(西から)

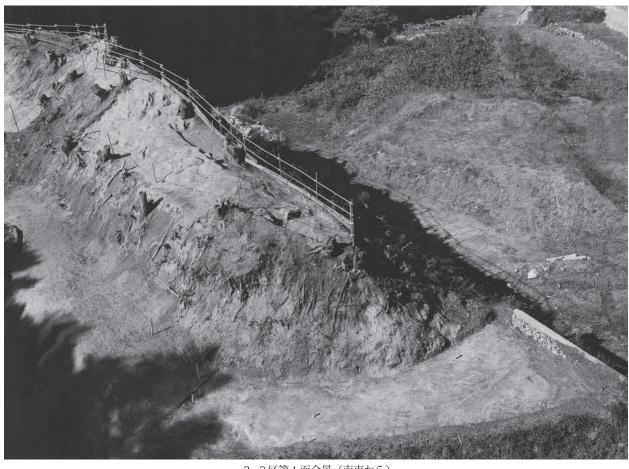


2.2区第3面229石列検出状況(南西から)

写真図版8 3区



1.3区第1面全景(東から)



2.3区第1面全景(南東から)

写真図版 9 4区



1.4区第1面全景(西から)



2.4区西部近景(西から)

写真図版 10 4区

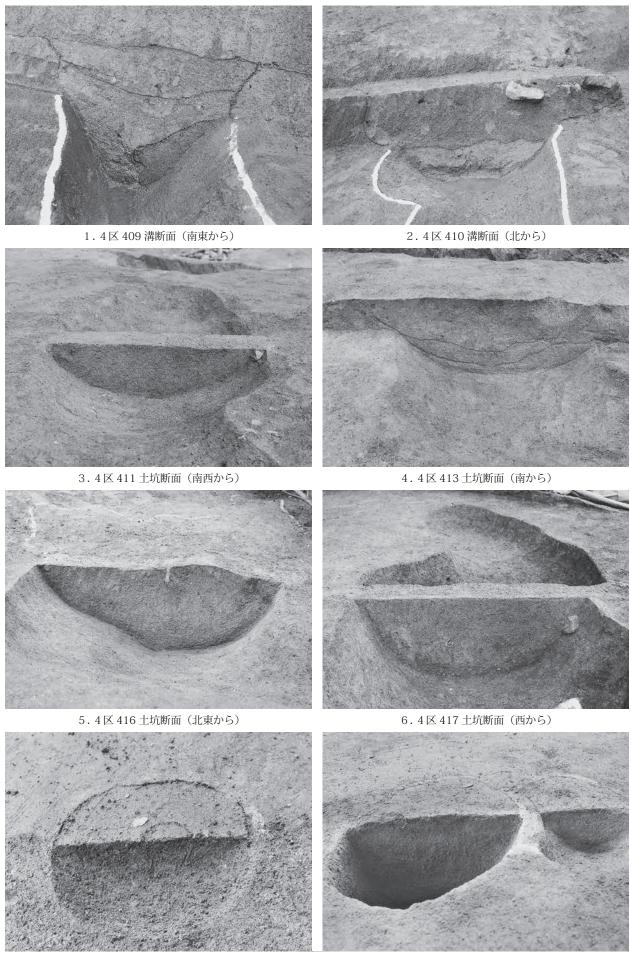


1.4区中央部近景(南西から)



2.4区東部全景(東から)

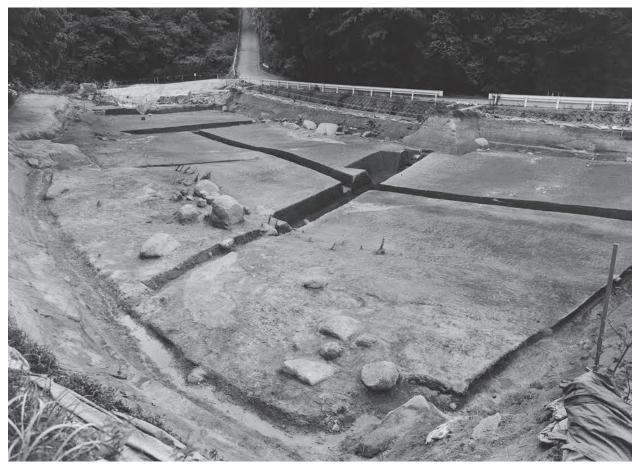
写真図版 11 4区



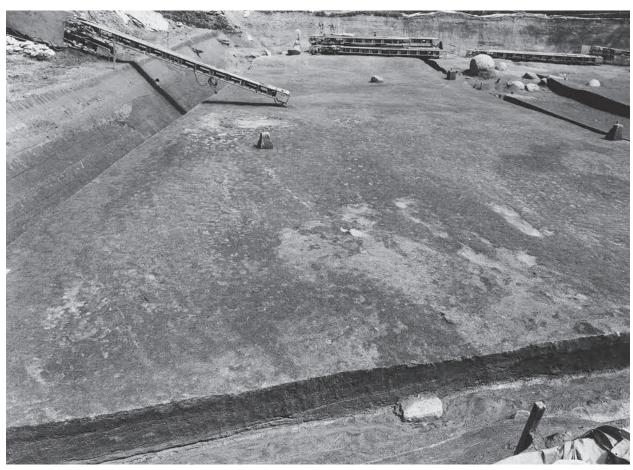
7.4区450ピット断面(東から)

8.4区440土坑・441土坑断面(南から)

写真図版 12 5区



1.5区第2面全景(西から)



2.5区西半足跡検出状況(南から)

写真図版 13 5区



1.5区第3面全景(西から)



2.5区第3面全景(東から)

写真図版 14 6区



1.6区第1面全景(南西から)



2.6区第1面全景(北東から)



1.6区第1面601溝(東から)



2.6区第1面601溝断面(南西から)

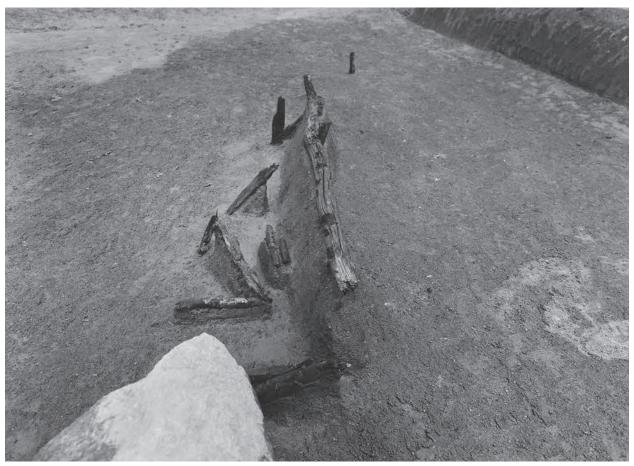
写真図版 16 6区



1.6区第3面全景(南西から)



2.6区第3面全景(北東から)



1.6区第3面603杭列検出状況(南東から)



2.6区第3面602杭列検出状況(南東から)

写真図版 18 7区



1.7区第1面全景(南西から)



2.7区第1面全景(南から)



1.7区第3面全景(北西から)



2.7区第3面全景(北から)

写真図版 20 8区



1.8区第4面全景(北から)



2.8区第4面全景(北西から)

写真図版 21 9区



1.9区第1面全景(西から)



2.9区第1面全景(北から)

写真図版 22 9区



1.9区第2面全景(西から)



2.9区第2面全景(北東から)



1. 10 区第2面近景(南西から)



2. 10 区第 2 面 1001 溝・石列検出状況(北東から)

写真図版 24 10区



1.10区第3面近景(北東から)



2. 10 区第3面 1002 石列検出状況(北から)

写真図版 25 10区



1. 10 区第4面全景(北西から)



2. 10 区第 4 面近景(南西から)

写真図版 26 11 区



1. 11 区第2面全景(西から)



2. 11 区第2面全景(北西から)

写真図版 27 11区



1. 11 区第2面全景(北東から)



2.11区第2面棚田検出状況(南東から)

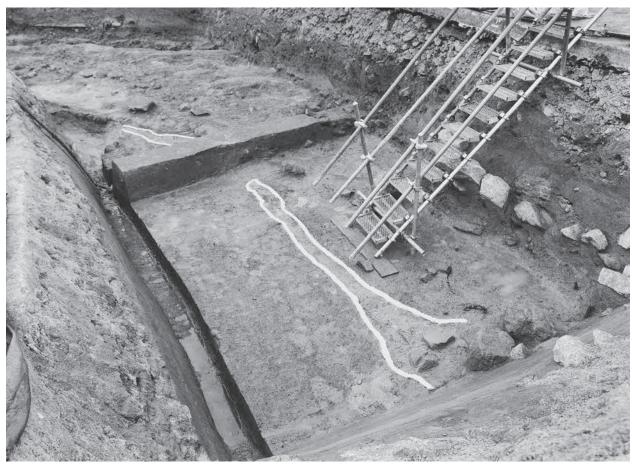
写真図版 28 12 区



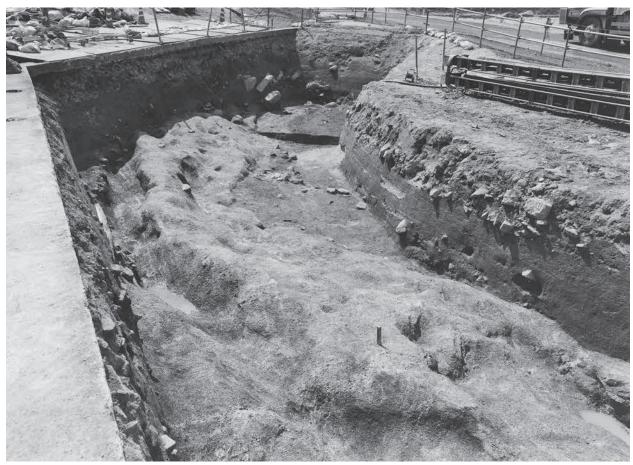
1. 12 区第3面全景(北西から)



2. 12 区第3面全景(南東から)



1. 13 区第 2 面全景(北西から)

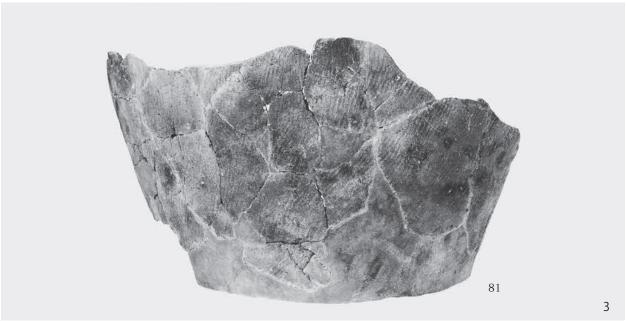


2.13区第3面全景(南東から)

写真図版 30 2 区遺構出土縄文土器(1)







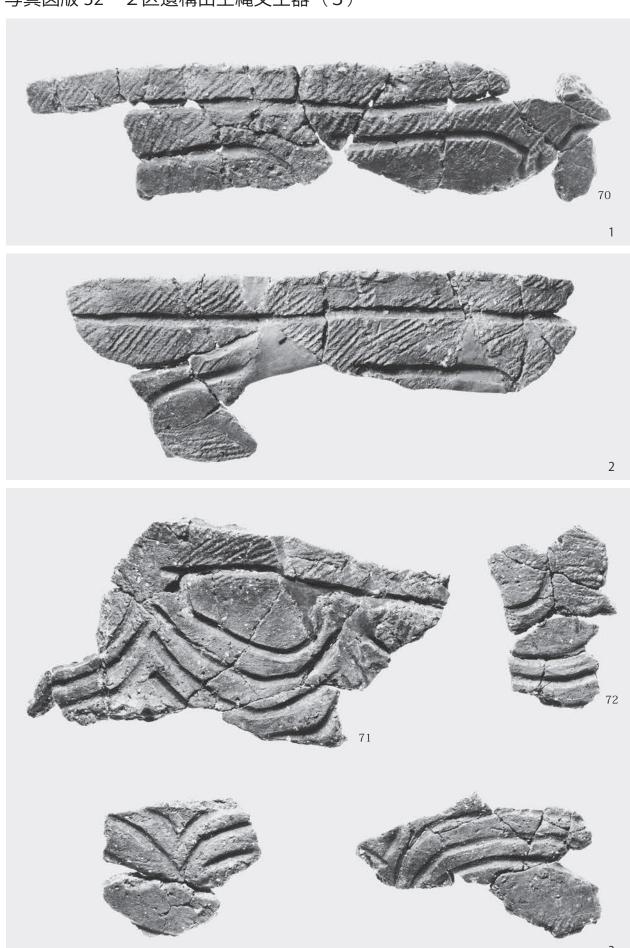
1~3.2区215土坑出土深鉢

写真図版 31 2区遺構出土縄文土器 (2)



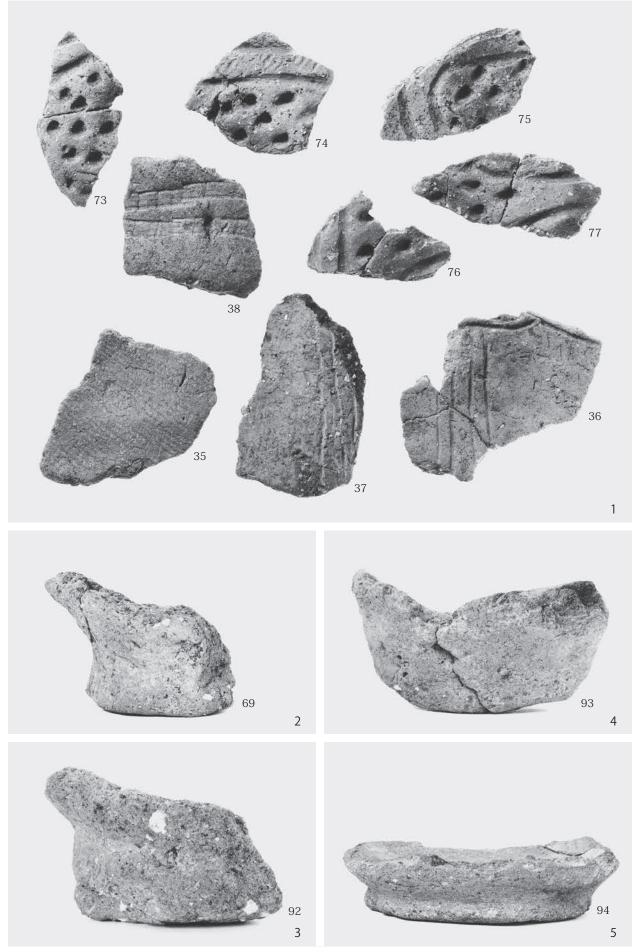


写真図版 32 2 区遺構出土縄文土器 (3)



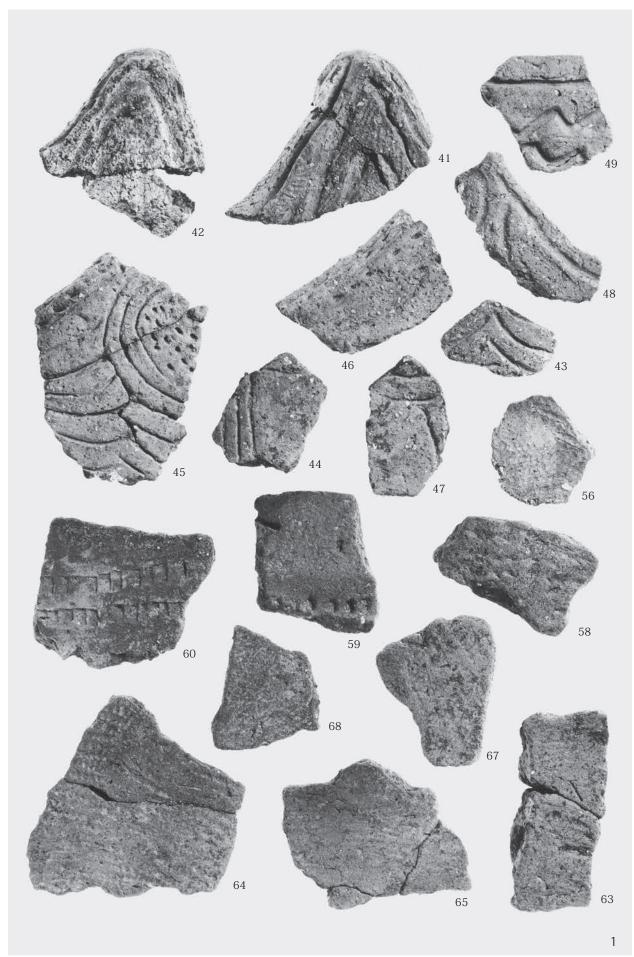
1~3.2区215土坑出土深鉢

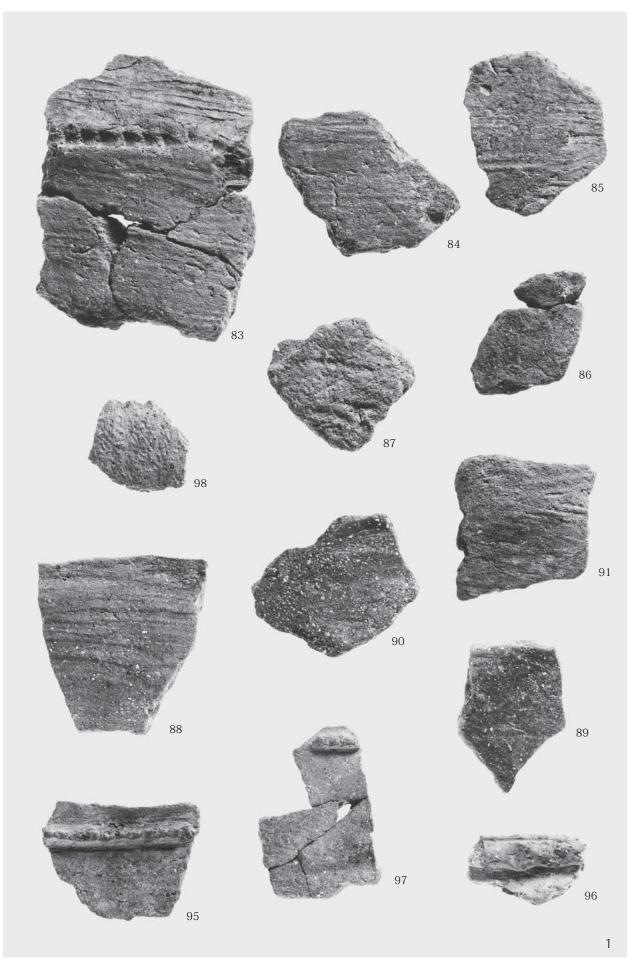
写真図版 33 1・2区遺構・包含層出土縄文土器



1.2区215 土坑出土縄文土器、1区71ピット出土縄文土器、53土坑出土縄文土器2.1区包含層出土縄文土器3.2区包含層出土縄文土器4・5.4区包含層出土縄文土器

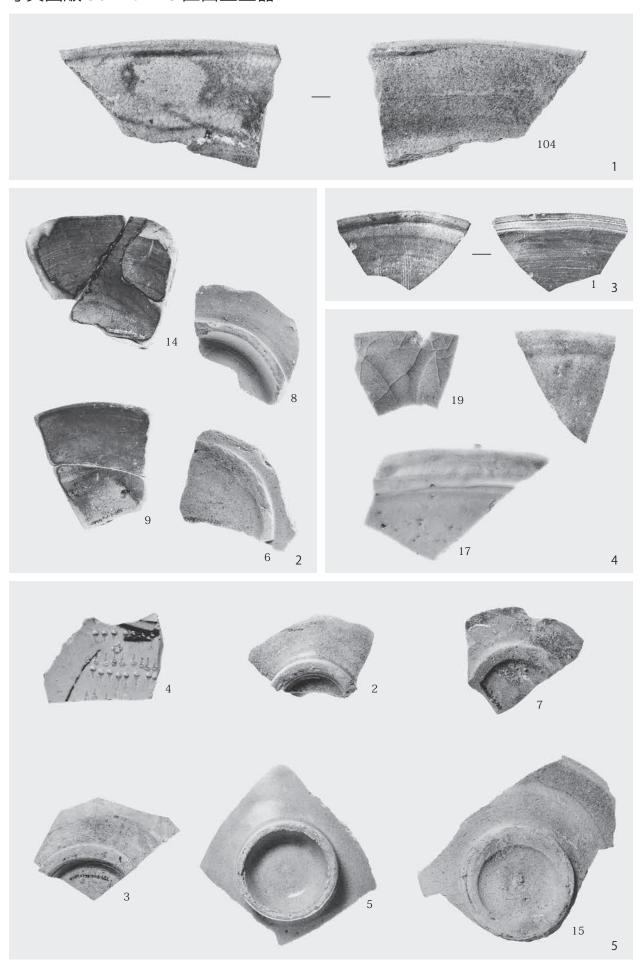
写真図版 34 1区包含層出土縄文土器



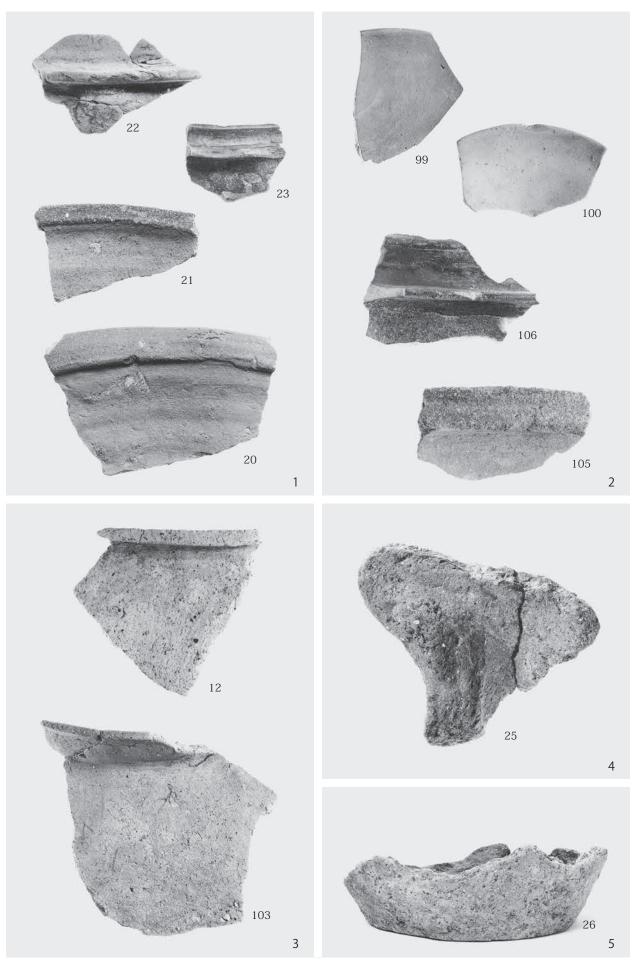


1.2区包含層出土縄文土器、4区包含層出土縄文土器

写真図版 36 1~3区出土土器

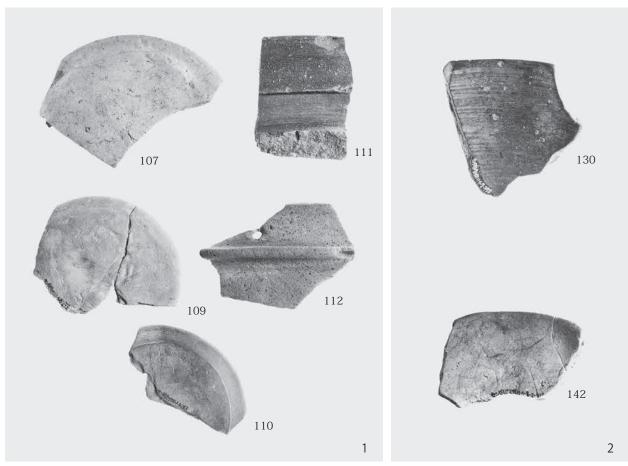


1.3区出土土器 2.2区出土土器 3.1区出土土器 4.2区出土土器 5.2区出土土器

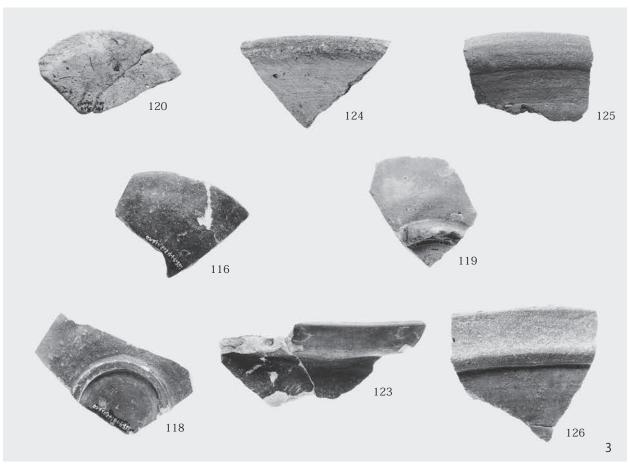


1.2区出土土器 2.4区出土土器 3.2区出土土器、4区出土土器 4.2区出土土器 5.1区出土土器

写真図版 38 5~7・13 区出土土器

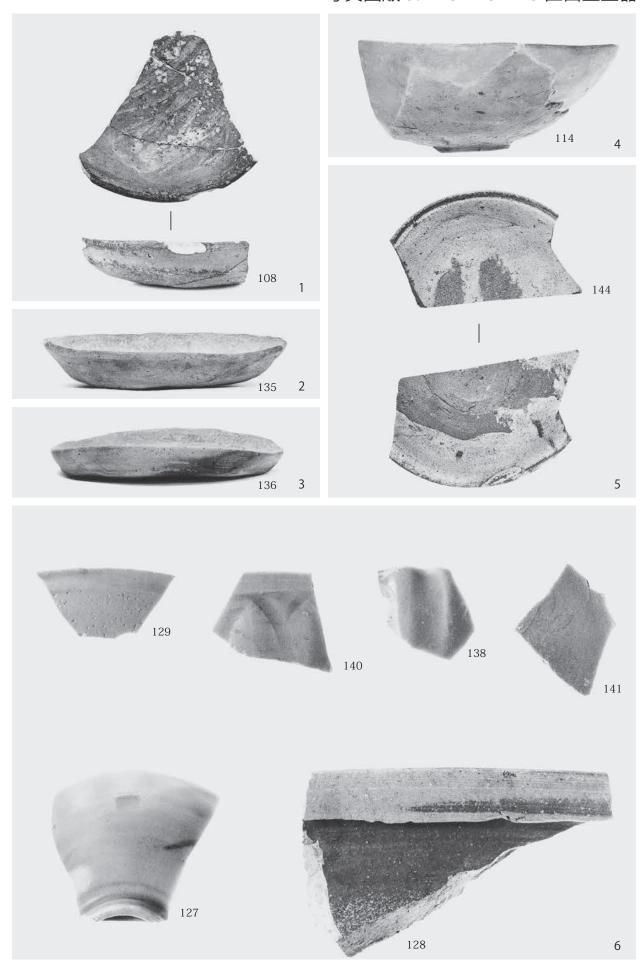


1.5区出土土器 2.7区出土土器、13区出土土器



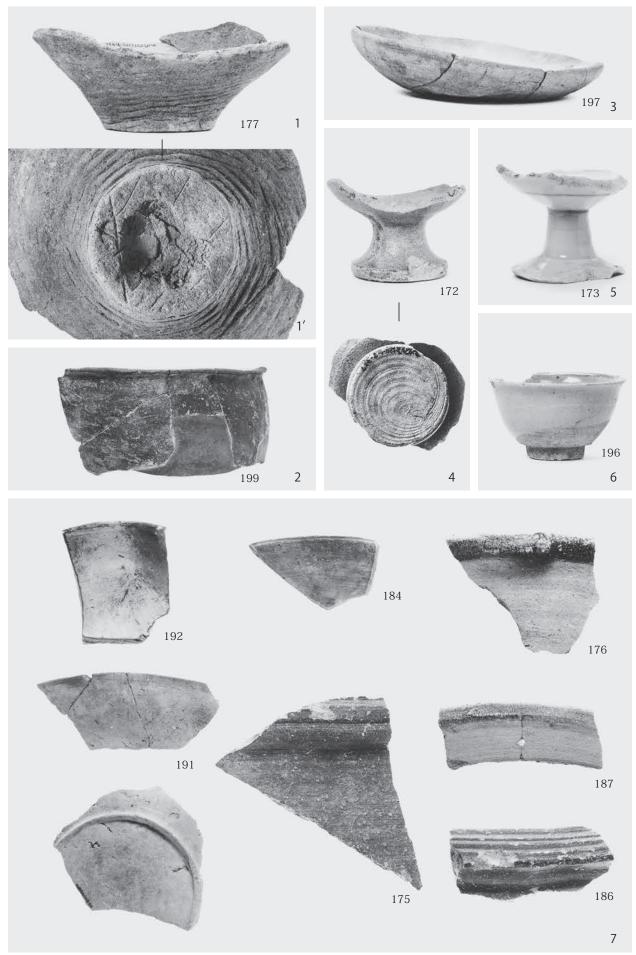
3.6区出土土器

写真図版 39 5~8・13 区出土土器



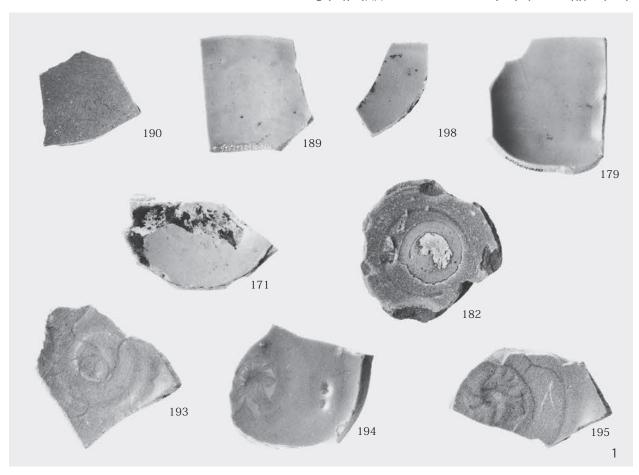
1.5区出土土器 2·3.7区出土土器 4.6区出土土器 5.13区出土土器 6.7区出土土器、8区出土土器

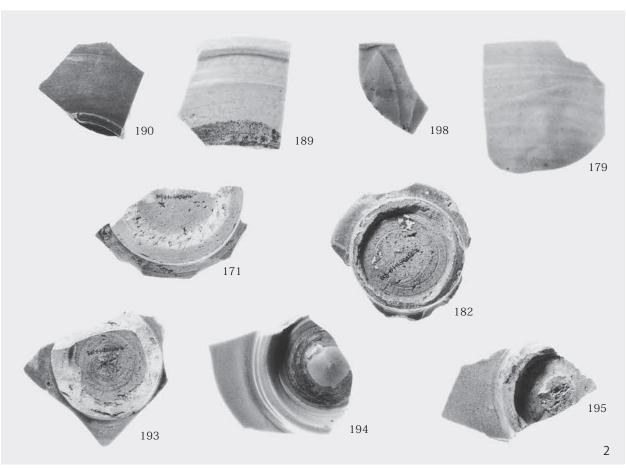
写真図版 40 9~12 区出土土器 (1)



1.9区出土土器 2.11区出土土器 3.11区出土土器 4.9区出土土器 5.9区出土土器 6.11区出土土器 7.9~11区出土土器

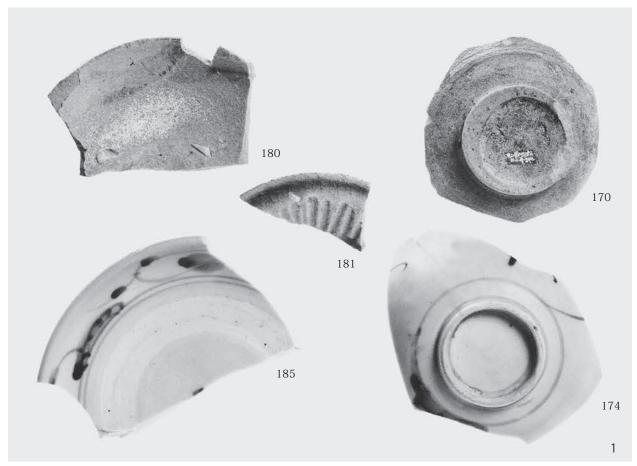
写真図版 41 9~12 区出土土器 (2)



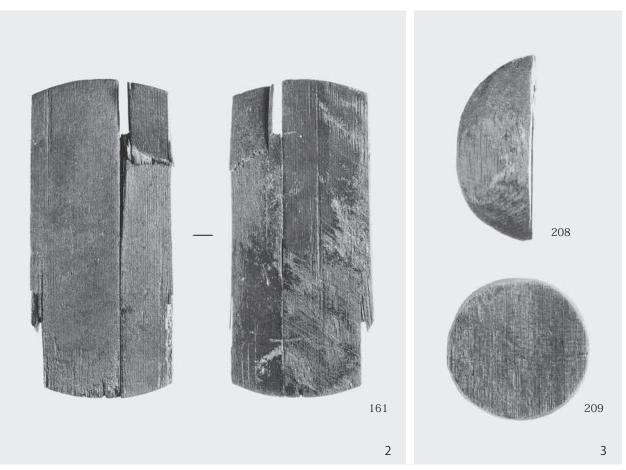


1・2.9~11 区出土白磁・青磁、10 区出土緑釉陶器

写真図版 42 9~12 区出土土器 (3)・木製品

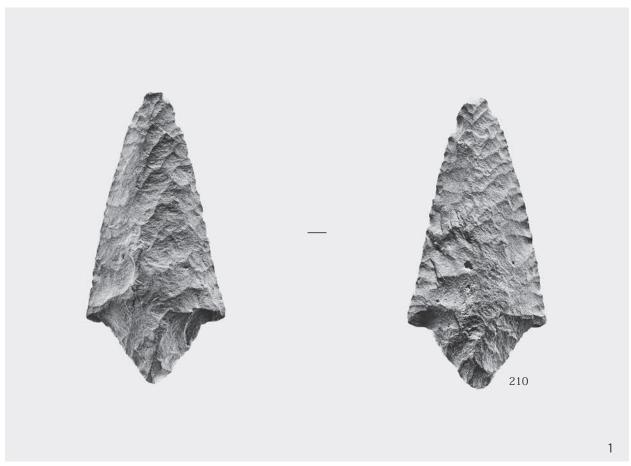


1.9~11区出土土器

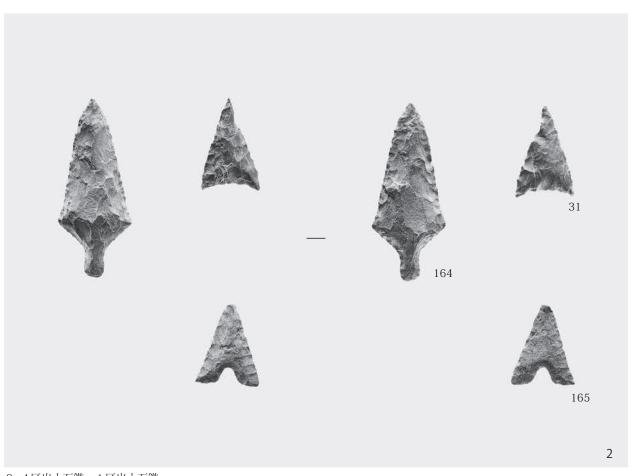


2.6区出土曲物底板 3.11区出土曲物底板

写真図版 43 打製石器 (1)

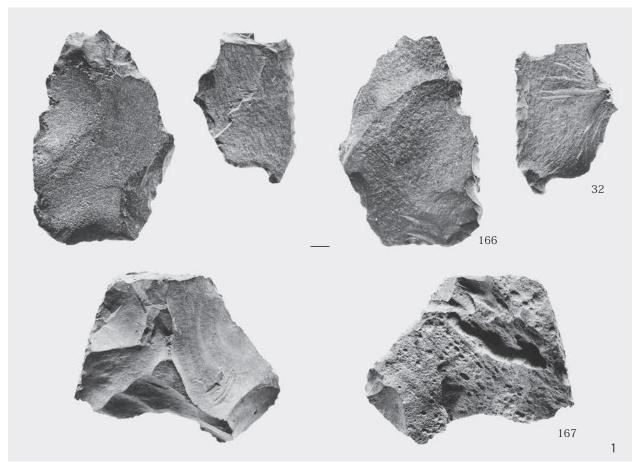


1.9区出土有舌尖頭器

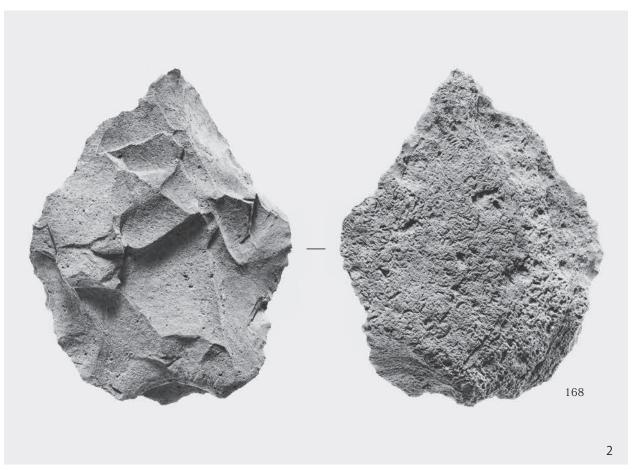


2.4区出土石鏃、1区出土石鏃

写真図版 44 打製石器 (2)

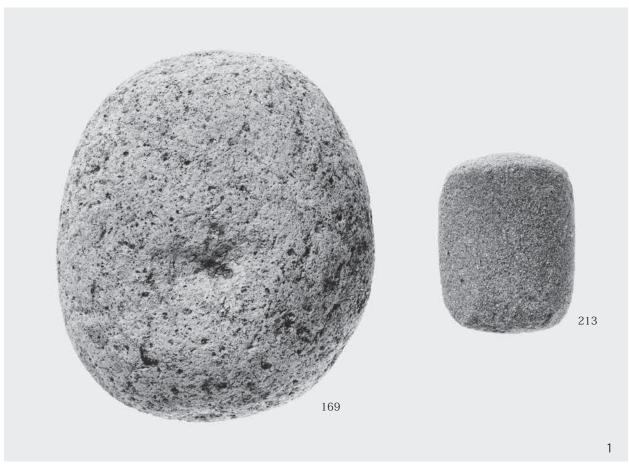


1.2区出土未製品、13区出土剥片、4区出土剥片

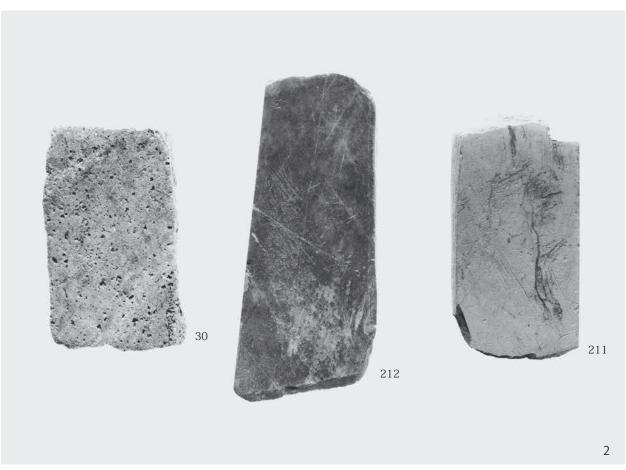


2.4区出土石核

写真図版 45 磨製石器・石製品

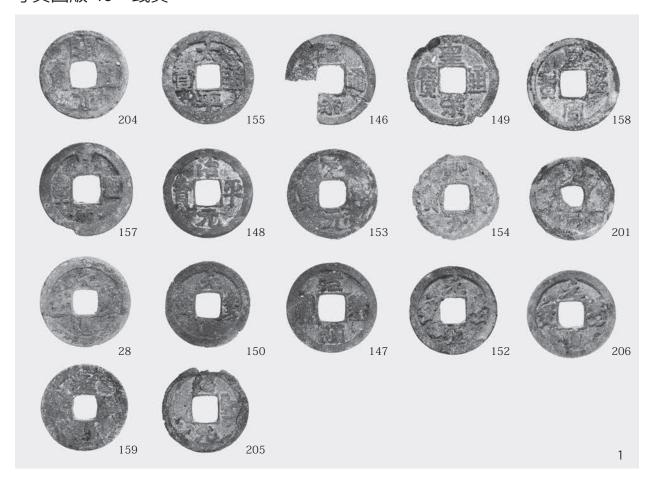


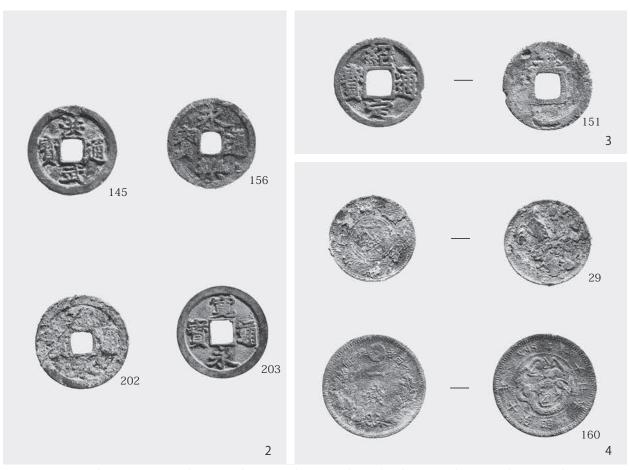
1.4区出土磨石、9区出土叩石



2.1区出土砥石、9区出土砥石

写真図版 46 銭貨





1. 唐銭 - 開元通寳、宋銭 - 太平通寳、皇宋通寳、嘉祐通寳、治平元寳、熈寧元寳、元豊通寳、○○通寳、紹聖元寳
 2. 明銭 - 洪武通寳、永楽通寳、寛永通寳 3. 宋銭 - 紹定通寳 4. - 銭青銅貨、一銭銅貨

報告書抄録

ふりがな	せんだいじみなみいせき									
書名	千提寺南遺跡									
副書名	高速自動車国道近畿自動車道名古屋神戸線建設事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書									
巻次数										
シリーズ名	公益財団法人 大阪府文化財センター調査報告書									
シリーズ番号	第 245 集									
編著者名	川瀬 貴子									
編集機関	公益財団法人 大阪府文化財センター									
所在地	〒 590-0105 大阪府堺市南区竹城台 3 丁 21 番 4 号 🖫 072 - 299 - 8791									
発行年月日	2014年3月20日									
ふりがな	ふりがな		コード		(#. I. (= I.			調査面積	i	
所収遺跡名	所在地		市町村	遺跡番号	緯度・経度		調査期間	(m²)	調査原因	
せんだいじみなみいせき 千提寺南遺跡	####################################		27211	9488	北緯 42度39分50秒		(11-1-1~12調査) 20120116~ 20130308	13400 m ²	高速自動車国道 近畿自動車道 名古屋神戸線	
					東経 123 B	度84分50秒	(11-1-13調査) 20130520~ 20130606	1066 m [*]	建設	
所収遺跡名	種別 主な時代		主な遺構			主な遺物		特記事項		
千提寺南遺跡	生産	縄文	土坑		縄文土器・石器					
	集落中世		水田・溝・土坑			土師器・須恵器・瓦器・陶器・ 輸入陶磁器・銭貨・石器・石 製品				
要約	東部では縄文時代の土坑・ピット・溝などを多数検出した。なかでも、一つの土坑からは縄文時代 要約 中期末の土器が一括資料として得られた。遺跡全域にわたっては、古代末~中世の水田、棚田やそれに関連する溝、石列、杭列などを検出し、耕作地として連綿と利用されてきた事が判明した。									

公益財団法人 大阪府文化財センター調査報告書 第245集

千 提 寺 南 遺 跡

高速自動車国道近畿自動車道名古屋神戸線建設事業に伴う 埋蔵文化財発掘調査報告書 発行年月日/2014年 3月20日発行

編集・発行/公益財団法人 大阪府文化財センター 大阪府堺市南区竹城台 3 丁 21 番 4 号

印刷·製本/株式会社 明新社 奈良県奈良市南京終町 3 丁目 464 番地